
お気に召ませ

おるこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

お気に召しませ

【Nコード】

N2825T

【作者名】

おるこ

【あらすじ】

人間がこの世界を己たちだけの世界だと思っている世界、その片隅で彼等は息づく。片田舎でのんびりと過ごす彼女達の元に現れた子供、マルコとティーチ。彼等との出会いによって未来は大きく変わることになる。

ワンピースのお話になりますが、独自設定、原作ブレイクです。ご注意ください。

キャラ説明等（前書き）

ヒロインに癖が強いのでご説明をば。

キャラ説明等

名 サキ

元々は江戸中期～後期生まれの芸者

三味線、琴、書道、お茶、お華、舞なんでもござれの売れっ子芸者
生粋の江戸っ子で、気風の良さと色香で巷では人気があった。

権兵衛名（源氏名）は「梅吉」

堤防の工事で人柱として埋められる予定だった娘に、そっくりであったという理由から身代わりにさせられた経歴を持つ。

工事現場の近くにあった小さな社も一緒に壊され、己と同様に殺される娘に同情をしたのか奉られていた狐に助けられる。

狐と融合し生きながらえ不老となったらしいが記憶が曖昧な為はつきりせず。以降自分が人間なのか、妖狐なのか曖昧なままだったが子供達との出会いで変化が。

頭の回転が良い為、身代わりに差し出した張本人を捕まえ財産を奪い取ったり平気でするくらいには悪党。

ヒロインはいわゆる「深川芸者」をモデルとしています。

深川芸者とは文化年間（一八〇四～一八一八）、場所が江戸からみて、東南（辰巳）の方角にあることから、辰巳芸者ともいわれます。
辰巳芸者は粋で人情に厚く、芸は売っても色は売らない心意気を自慢とし、

身なりは地味で薄化粧に、当時男のものだった羽織を引っ掛け座敷に上がり、男っぽい喋り方をします。

また芸名も「鶴吉」「鶴八」「竹助」など男の名前（権兵衛名）を

名乗っています。

深川は吉原と違って、公認の遊郭ではありません。

ゆえに、正式に遊女を雇い入れることができませんでした。

他の四宿（千住、板橋、品川、新宿）は、宿場町でしたので、飯盛り女として女性を雇い入れることが出来たのですが、深川は宿場でもないので不可能でした。

そこで、策略を用いました。

契約の時に男性名義で雇用契約をするという大胆な策略を。

ですから、辰巳芸者は「ぽん太」とか「米吉」とか男性名で通っているのです。

そういった男性名を「権兵衛名」といいます。

実は、この権兵衛名がついていない女性（雇い入れたばかり等）を「名無しの権兵衛」と言うのです。

更に、権兵衛名のついた辰巳芸者を内妻にしますと、いそねこ権妻となります。

名 セイ

明治後期～大正初期生まれ

刀鍛冶の跡取り息子であったが、跡取りを狙う弟子達の裏切りにより絶命。

その後、同じ場所にて犬神を作り祭ろうとした愚か者の手違いにより、犬神の成り損ないと融合し復活。

悲しいかな、メス犬であった為女として復活するも、姉となったサキのおかげで何とか落ち着きを取り戻す。礼儀作法などに厳しい苦

労人。

生前が男であつた為に、現在では恋愛に興味はなし。

名 キヌ

濡れ女。

名 任左衛門
ニンザエモン

古狸、貉の旦那などと呼ばれる。あまり名前で呼ばれない。

名 タキ

古狸、任左衛門の家内。

クロウ・コスケ

烏天狗の二人組み。

以上、情報社会と言われる現代日本の社会の歪を利用しつつ生きています。

2部以降の登場人物

与一
ヨイチ

琵琶の付喪神。梅吉の一番弟子。2代目く調停者く

小峰
コミネ

櫛の付喪神。芸者見習い。

舞台設定

グランドライン内の孤島（秋島）紅葉が多く温泉が沸いている

島の名前：イナリ島

港町であるくマヨヒガ>を中心にして、小さな集落が点在。

港町の中心部に唯一の湯屋兼宿屋の「幻燈楼」（げんとろう）が存在。周りには茶屋や商店等が展開されている。

裏通りには住民の長屋が連立する。

所謂「娼館」というものは存在しない。

ゲイシャとユウジヨの格付け

この島では地味なゲイシャが最高ランクとされている。

こちらにランク付けされるのは付喪神や芸に秀でた妖精や精霊などが多い。

華美なユウジヨは所謂サキュバス等の、人間の精気を糧としているものが従事するものであつて

それ以外の能力を使わない為下のランク付けとなる。

街の外観等

石畳の階段が多い町となっている。建物はワノクニと洋風を足して2で割ったようなもの。

イメージ的には日本の伊香保温泉街のような感じ。

夜は彼方此方に灯籠や提灯が灯り、明るく照らします。

特産物

この島は所謂妖怪や妖精、精霊と呼ばれる者が移住してきた場所です。

その為他にはない、妖精の花蜜や幻獣のミルクや卵等の加工品が大変美味です。

しかし、表立ってヒトではないものたちの島とはなっておらず、極秘扱いになっています。

その為加工品のみのお買い得です。

農場や牧場などは厳重に警備され罠も多く張り巡らされています。

鉱物や珍しい動植物も豊富です。こちらでも厳重に警備されています。また、地妖精等が鍛える武器や防具、細工物も高額で取引されています。

治安について

上記の特産品があるために、海賊からの襲撃が後を絶ちません。

通常の補給目的ならば問題ありませんが、襲撃の場合は、自警団と呼ばれる者が対処します。

島民のほとんどが、この自警団に所属しているので島全体の警備が可能です。

また襲撃者は肉食の島民の餌となり、それに該当しなくとも、島の秘密を暴こうとした場合は記憶を奪われる仕組みになっています。

島民同士のいざこざがあつた場合は、「調停者」と呼ばれる選抜されたものが対処します。
こちらは島のゲイシャの中でもランクの高いものになるのが決まりです。

追加設定

サキ

「毒婦のウメキチ」懸賞金3億4千万

セイ

「魔狼セイ」懸賞金1億9千万

島の住人である小峰^{コミネ}が天竜人に拉致られた為、追いかけて殲滅、及び天竜人を殺害。

名目では天竜人殺害による世界政府に敵対する反逆者（能力者）

結局のところ本性である獣の姿のみ見られている為、人間の姿では捕まる要素は一切ないという本末転倒な賞金首

ニライカナイの住人達と子供

蝸^{ひくま}の鳴き声が聞こえ始めた夕暮れ。町といえば聞こえは良いが、隣家との距離が200M以上というものが普通である地域。

起伏に富んだ地形と、海岸に隣接していることもあり、古くから漁業で栄えていたその町は現在では、併用して柑橘類などの果実でも栄えていた。

人の住む場所には少なからずとも「変わり者」と呼ばれる人間が現れるもので、その人物も近隣住民から「変わっている」と評されていた。

とはいえ、敬遠される類ではなく、いうなれば「愛すべき変人」というべきか。

なんの仕事をしているのか、年齢はいくつなのか、何者なのかは全くもって不明ではあるが、それでも人間性は悪ではない。

町の年配者とも関係は良好で、近所の悪餓鬼共も、そこでは悪さをしたりはしない。

困っていれば、手を差し伸べてもくれるし、町やご近所に不利益はないのだ。もとのんびりまったりとした町の特性故か「まあ、迷惑掛けられてもないんだし、多少（？）解らないことがあっても問題なくね？」といった具合で、友好関係も良好であった。

若者という割には言動が老成しているし、中年というわりには外見がそれを否定する。

不細工というには整いすぎているし、美形かといえば、そうでもない。

印象に強く残るかと言えばそうでもないが、平凡というにはかもし

出す雰囲気か否定する。

中途半端のようで中途半端でない人間。

其れが件の変人を称するに一番近い表現であつた。

さて、その変人である人間、サキの容姿、性格を説明するならば、日本人らしい黒に近い焦げ茶色の髪は無造作に伸ばされていて、それは腰に届くくらい。とはいえ、手入れを怠っているというわけでもなく、切るのが面倒なだけにも見える。

瞳も同じような色合いで、一重の切れ長な目はやや釣り目。唇はやや小さく薄い。肌は白く、常時日傘を使用するせいか、日焼けの痕跡もない。

とはいえ病的でもなく日本人特有のやや黄色おびた健康な肌色だった。

着物が常服であるせいか体型はわかりにくい、身長はやや高めの170センチほど。

無造作に髪を伸ばしていることから判るが、基本面倒くさがりで、己の興味の沸いたことにしか行動を起そうとしない。

そのくせ、世話好きというか、一旦自分の懐に入れた人間は可愛がる性分な為、それにかかる手間や労力は惜しまない。

現在では其れが己の妹と、飼い猫達に如何なく発揮されているのだが。

全体的に見れば整った顔つきではあるが、気分屋にも似た性格とあいまって美形とも言いがたい。ある意味残念な人間であつた。

そんな彼女が今居住しているのは、海岸に面した古民家だった。築2000年を越えた屋敷と600坪の土地、小さいながらもプライベートビーチ付きだったのでかなりの金額が予想された。

しかしとある事情により600万ほどで売りにだされていたというのだから、言わずもがな。誰もが買い渋る大人の事情というものがあつたようだ。

しかし、そんな複雑(?)な大人の事情など無視し購入したのが「愛すべき変人」たる彼女だったため、町の住民もどことなく納得してしまったようだった。

そして、この話は、変わり者と称されるサキとその家族に起きた、奇妙な話の一つである。

ニライカナイの住人達と子供2

敷地内にある家庭菜園の水撒きが終わってから、縁側に立てひざで座り込み煙草を飲む女。

縁側の下には水を張った盥^{たらい}が置いてあり、トマトやキュウリなどの夏野菜と小振りのスイカが浮かんでいた。

彼女の妹は、飼い猫とともにプライベートビーチへ散歩をしに行つてしまい、今家には彼女1人であった。

手に持った煙管の吸い口を咥え、美味そうに煙を吐き出すと、手馴れた仕草で掌に灰を転がしながら次の刻み煙草を火皿へと詰め込む。手馴れない人間がやるものなら火傷を負うのだが、器用なものでそのまま掌の灰から、煙草に火をつけてから捨てる。

紙やフレーバーの味が嫌いな彼女は、純粹に煙草の味だけを楽しめる煙管を愛用していた。

ほうつと何気なしに煙を輪状にして吐き出せばその瞬間聞こえるのは、手を叩く音だった。

「あん？」

首をめぐらせて、音の方を見てみれば、年のころは3〜4歳だろうか。まだ幼稚園に通っているであろうくらいの子供が、こちらを見て嬉しそうに手を叩いていた。

「もっと！もっとやって、よい！」

くりくりした目に金髪ふわふわした髪の毛から、おそらく日本人

ではないであろう容姿。この町に、外国人が引越してきたなど聞いたことがなかった。

「やるのはいいけどねえ。坊や、どこから来たんだい？」

いくらこの町が鍵をかけなくても良いくらい治安がいいからといって、こんな幼子を一人でふらふらと遊ばせるのはどうなのか。と、思いつつ幼子を手招く。

少しは警戒心というものがないのだろうか、と思うほど幼い足取りで近寄ってきたその子に、再度煙で輪を作って見せてやる。

「すごい、よい！」

「そうかい。ありがとうね。で、坊やはどこから来たんだい？おばちゃんに教えてくれるかね？」

語尾に「よい」とつけるのは、この年齢の間で流行ってるのだろうか。と思いつつ、実際子供というのは、奇妙なものを流行らせるのが得意であり好むものであると納得して再度尋ねる。

その質問に幼子は困ったように「うーん、えーと」などを言いつつ拙い言葉ながら必死に説明をしようとする。

しかし、それもやはり幼子の表現では不明瞭すぎて、説明にならない。だんだん自分でも混乱してきたのか、たちまち涙ぐむその子に、ため息を一つ零して煙管を煙草盆へ置くと抱き上げた。

泣くのを堪えようとしているその背中を、あやす様に叩けば小さい両手で必死になって抱きついてくる子供。抱き上げてから気が付いたのは、この子供の服装だった。幼いとはいえ、着ているのはＴシヤツのみで、ズボンはおるか下着もつけていなかった。

新手の虐待だろうか。はて、これからどうしようか。などとのんきに考えていれば、なにやら玄関が騒がしい。おそらく散歩に出かけていた妹なのだろうと思っていると、案の定妹であるセイが猫を従えて紙袋を抱えつつこちらへ顔をだした。

「ああ、無事姉さんのところこれたんだ。」

「あん？この坊やは知り合い？」

胸にしがみ付いている子供を見て、セイは首を振り否定してから話し出す。

一緒に来ていたメス猫の「若菜さん」（アメリカンショートヘアなのだが、肥満ではないのにどういうわけか巨大に育ってしまい13kgもある）が、サキのすぐ隣へ歩み寄り、子供の頬をざらついた舌で舐め始め、悲鳴を上げていたが無視だ。

「プライベートビーチで倒れてたんですよ。この荷物も一緒に」

そういつて紙袋の中身を見てみると、明らかにサイズが違う服が入っていた。

「本当にこの坊やの物なのか怪しくないかい？サイズ違うじゃないか」

話をしていると膝を押される感触。視線を投げかければ、飼犬のグレートピレニーズであるジャンが背中になにかを乗せてこちらを見ている。

それを見たサキは、子供を抱えたまま視線をまた妹へと向けた。

「一人じゃなかったのか…」

「あいにく一人じゃあ、なかつたんですよ。」

ジャンの白い毛皮に埋もれた子供は黒髪で、天然パーマなのかくるくるとしている。サキからは旋毛しか見れないが、いつの間にか寝てしまった抱き上げてる子供にしても、その体つきは華奢というよりも肉付きが薄い。

子供というのは、もう少し体がふくふくしているものじゃなかったか。と思いながらも、人種が変われば肉付きも変わるのかもしれないと思い直す。

それにしても骨と皮だけといってもいいほどの体型に、流石に彼女たちもその柳眉を潜める。

「いくら日本人じゃないとはいえ、子供ってのはもう少し肉が付いててもいいんじゃないかね。」

どう思う？と真顔で妹へ尋ねる姉。

「子供は嫌いなんで詳しくはないですけど。一般論でならこれは痩せ過ぎでしょうね。」

これまた真顔で返答する妹。

「……………」。

無言で見つめあう、姉妹と飼い猫、飼い犬達。

「新手の虐待かと思ったが…これはちいと訳アリ、ってやつかねえ。」

私らと同じで…と口には出さずに胸中でつぶやく。どちらにせよ拾

ってしまつた以上放つて置くわけにもいかずに、小さなため息を零して家の中へと入るよう愛犬を玄關へ促した。

濡れた手ぬぐいで、ジャンと若菜さんの足を綺麗に拭くと、ジャンは理解しているのか背中に乗せた子供を揺らさないように段差を歩く。

布団出してそこへ着替えさせた子供を2人寝かせれば、自分の心地よい体勢を探しているのか身じろぎをしながら、何事か不明瞭な言葉漏らす子供たち。

その間に入り込むように若菜さんが入り込めば、金髪の子供が抱き枕のようにしがみ付く。

子供の力とはいえ、抱き付かれれば普通の猫ならば嫌がるだろうに、気にした様子もなくされるがままでいる猫にサキは苦笑を漏らした。子供が嫌いだと公言したセイは、拾ってきた洋服を洗濯してしまおうと席をはずしている。

「おんや、随分と気に入つておいでだね。若菜さん。まあいいさ、その子らが眼を覚ましたら教えておくれな」

着物の袖を紐で軽いたすきがけにしまつと、土間へと降りていくサキを横目に、若菜さんはうるさくない程度に一声鳴いた。

ジャンはいえ、自分が背負ってきた子供の隣で伏せをした状態でおとなしくしている。

そうこうしているうちに、居間に出汁のにおいが漂つてくると子供たちにも変化が起こつたようだった。

それを察した若菜さんは、器用に子供の腕から抜け出すと土間へと向かい一声鳴く。それをきっかけに金髪の子供が眼を擦りながら眼を覚ました。

「起きたようだね。坊やは泣きつかれて寝てたんだよ。判るかい？」

そこへ、小さな土鍋を載せた盆を片手にサキが居間へ入ってきた。サキの顔を見て一瞬怯えた様な、警戒するような表情を出す、先ほど自分が抱きついていた人物だとわかるとコクリ、とひとつ頷いた。

ニライカナイの住人達と子供3

土鍋に入った程よい熱さの雑炊を小さな器に入れて子供の前に置いてやる。黒髪の子供はまだ眠っているのか身じろぎひとつしない。

「まだ熱いからね、少しずつお食べ。」

そう言えば、判ったのかレンゲを持ってちびちびと食べ始める。これだけ細いのだから、年齢と合わせて見ても食べれる量は少し。だとすると回数で補うしかないか、と思いつつ目の前の子供を眺める。

「あせんなくったって、誰もとりやしないさ。ゆっくりお食べ」

先ほど縁側においてあった盥に、冷やしてあった野菜とスイカを引き上げ振り返れば、黒髪の子供と視線がぶつかった。

どうやら寝ていたのではなく、警戒して狸寝入りをしていたようだ。

「お前さんも起きたのか。腹はすいてないかい？」

警戒した表情を前面に出した少年に、さして気にした様子もなくサキは問いかけた。

「もう一人の坊やはご飯食べてるがね。一緒のものでいいかね？」

「…っ」

それを聞いたとたん、黒髪の子供が勢い良く起き出して、雑炊を食べている子供へ振り返った。

「まるこー！」

金髪の子供の名前だろうそれに、呼ばれたことにびっくりしたのか、
レンゲを落として黒髪の子供を凝視する金髪の子供。

「てーち！」

今まで食べることに夢中で気が付かなかったのか、黒髪の子供の名
前らしきものを呼ぶと、また泣き出しそうになったのか見る間にそ
の双眸が潤みだした。

「だいじょうぶか？なにもされてないか？！」

どうやらこの2人の子供は知り合いだったようで、黒髪の「てーち」
と呼ばれた子供が金髪の「まるこ」をかばうようにしてこちらを睨
んだ。

その様子にサキはひとつ頷いてから口火を切った。

「二人はどうやらお互いを知ってるんだね？ならなんであんな海岸
に二人して倒れてたか、覚えてるかい？」

そう尋ねれば、黒髪の子供が戸惑ったような表情で首をかしげた。

「あんたが、おれらをつかまえたんじゃないのかよ。」

「私が？っは！冗談をお言いでないよ。海岸に倒れてたって私の妹
が拾ってきたのさ。」

黒髪の子供の言い分を、鼻であざ笑うかのように言い返せば、逆に
当惑したような表情を浮かべる子供たち。

金髪の子供より大きいのであろうその子は5〜6歳といったところ

か。しっかりお兄ちゃんのように背後に隠した子を守ろうとしている。

昨今、このような「心構え」をもった子供はどれだけいるだろう、と胸中に浮かんだ彼女は目の前にいる子供らに久しく家族以外に沸かなかった愛しさを覚えた。

「そんな言い方をしたって事あ、帰る場所もないんだろう。だってここに気が済むまで居ればいい。なんせここには私と妹、そして家族同様のペット位しかいやしない。」

どうせ、同じ訳有り者同士、仲良くしようじゃないか。そういった彼女に、今まで隠れていた”まるこ”が出てきて、止める間もなく彼女に抱きついた。

ぎゅうぎゅうと額を押し付けて抱きつく幼子を片手で抱き上げてやれば、そのまま首に腕を回し抱きついてくる。その体温が仄かに高いなと思えば、この頃の子供は眠くなると体温が上がるのだったかと思い当たり、先ほど子供を寝かせていた布団へ寝かせようとする。とむずがる。

「なんだい、眠いんじゃないのかい？」

腕を一向に離そうとしない子供に、片眉を上げてあきれた口調で問いかけるも、返事はない。

さすがに困ったと、黒髪の子供に視線をやれば、先ほど見せた警戒はなりを潜め、同じく呆れた様に彼女を見つめ返す。

「あきらめたほうがいいぜ。まるこは、いつかいそうなると、てをはなさないんだ。」

「おやまあ。雑炊も中途半端に食ってたが、やっぱり一度に食べれ

る量が少ないのかい。」

満腹になり抱きついたまま眠ってしまった幼子を抱えたまま、食べかけの雑炊を片そうとすると、黒髪の子供がそれを留めた。

「おれがたべる。もったいないし。」

そうしてそのままレンゲを持って残りをあつという間に食べきってしまう。まだ食べたりなさそうな子供にスイカでも切ってやろうかと思っていると子供がつぶやいた。

「おれは、”ていーち”。そいつは”まるこ”だ。おばさん、あんたは？」

土鍋にこびりついた米粒ひとつ残さぬように食べている子供、ていーちにサキはニンマリと微笑んで言った。

「私の名前は”サキ”さ。てち坊や」

「てちじゃねえ！ていーちだ！」

ニライカナイの住人達と子供 4

「目をさましたんですか。それなら丁度良い。」

奇妙な渾名あだなを付けられて、ご立腹なティーチの真後ろから洗濯をしてきたのであろう、セイがのっそりと現れた。

驚きの余り声にならない悲鳴をあげるティーチを綺麗に無視したセイは、姉へ声を掛けた。

「姉さん、引き取る事にしたんでしょう。子供の衣類はどうします？」

「こんなに細っこいからねえ、私がちよつと古着で身繕つてやるにしてもねえ。」

流石に現代で着物を着ている子供等珍しく、目立つ事この上ない事くらい彼女達にも判る。

「ああ、でも下帯だけは作ってやった方がいいかね。男児とはいえ、必要だろうしねえ。」

「何を言い出すんですか、今時禪なんて締めませんよ。自分のいた頃じゃあるまいし。もつと着脱楽な下着があるでしょうに。お金下さい、自分が買ってきますから。」

下着事情が大分昔から進歩していない姉に、セイは頭が痛くなる思ひだった。

流石に今から300年以上前に生を受けただけはあり、身に付ける物は自分で作ることが常識であるサキ。対して文明開化を過ぎ、モガ・モボ（モダンガール・モダンボーイ）なるものが流行した時代

を経たセイ。セイもかなり現代社会でも時代遅れな観があるのを自覚しているが、彼女よりは十分マシである。

それはサキも解っているのか、大人しく財布の入った巾着をセイに手渡した。

「全く、なんでも買って済んじゃうなんて……。時代も変わっちゃまったもんだ。」

「目立つのを避けるなら、時代の波に上手く乗らないと。お願いします、外見を裏切るような言動は避けてください。」

胃が痛くなる……と、渋面しつつ巾着を受け取り玄関へと急ぐ。現在の時間は18時、この辺りの店は19時半には閉まってしまいうため、急がないと子供達の衣服が褌と女用の衣になってしまう。流石に元とはいえ、男として可哀想になったセイは、足早に店へと出掛けた。

蚊帳の外で会話に入れなかったティーチだったが、判らないなりに今の会話に違和感を覚えた。

それはまるで、長い期間を生き続けている老人のような表現。しかし目の前にいる2人はそんな年には見えず、自分で「おばさん」と表現したが「お姉さん」といってもおかしくない程度の外見。

目の前でマルコを抱えてあやしなながら、土鍋を片付ける彼女を見てティーチは首を傾げた。しかし本人に尋ねることはしない。何となくだが、聞いてはいけないことのような気がしたのだ。

「さて、てち坊や。まだお前さん、腹が満たされてないだろう？ スイカが何か切ってやろうね。」

やっと寝付いたのか、マルコを先ほどの布団に寝かしつけてから、盥を持ち上げて土間へと消えたサキ。

今まで自分がいた「家」という概念からしても奇妙なその家に興味

が沸いたティーチは、彼女の後ろを付いて歩いた。

草を編みこんでいる床に、板張りの床。天井は高く、壁は薄い紙がガラスの変わりに貼り付けてある。見れば見るほど奇妙な家。

彼女が消えた方向へ行くと、家の中だというのに土が剥き出しになつていて、丸い暖炉のような、ものが備え付けてあつた。

「竈を見るのは初めてかい？」

「かまど？」

「そう。これで火を熾して煮炊きするのさ。まあ、今じゃ珍しいかもしれないねえ。私や、竈のほうがやり易いさ。」

そう言いながらスイカを切り分けると、1切れを土間に降りる為の段差に座り込んだティーチへ差し出す。

井戸水で程よく冷やされたそれを、もう疑うことを止めたのか素直に受け取って種を気にせず噛り付けば、果肉から甘い汁が口の中に広がる。

夢中で食べていると、サキが気が付いたように子供に振り返って言った。

「食べるのはいいけど、種は出しな。そんな形だ、胃腸だつて弱つてるだらうからね。腹壊すよ。」

小皿に種を出すようにと渡せば、今度はおとなしく種を出しながら食べ始める。

その様子に、子供は好きなだけ食べてたっぷり寝て遊ぶのが一番と昨夜から砂抜きをしていた浅利の剥き身で味噌汁を作り始める。

ふつつつと煮える其処に、粗く刻んだ葱を入れて溶き卵を回せば、

深川飯の準備は完了。

本来なら卵は入れないのだが、栄養が足りていない子供がいるために卵を追加したようだった。

「てち坊や、まだ食べられるかい？」

「くれる」

「腹いっぱいになったら、風呂に入って垢を落とさないかね。明日からはあんたにも動いてもらうからね。子供ってえのはよく食べてよく寝てよく動くに限る。」

深めのどんぶりにご飯を敷き詰めて上から浅利を汁ごと掛けまわし、レンゲと一緒に渡してやる。

暫く味噌の香りが珍しいのか匂いを嗅いでいたが、一口食べたすと止まらない。あつという間に平らげてしまう。其処に先ほどより少ない量で同じように用意してやればそれもぺろり。

ティーチの衰えることのない食欲に、サキは眼を細めて微笑んだ。

「一気に食ったら腹がびっくりしちまうよ、その辺でよしときな。また腹が減ったら食べりゃいいさ。食い物は逃げやしないんだから。」

カラカラと笑いながらどんぶりを片付けて、風呂に火を入れるべく、風呂用の竈の前に腰を下ろす。この季節は水風呂が多いのだが、子供には良くはないだろうし、熱くしなくてもぬるま湯でなければ垢は落ちまい。

薪を中に入れて、竈から持ってきた火種を放り込めば火が爆ぜる音が聞こえる。

本当はまだ食べられるような気がしていたティーチも、それを眺めているうちに腹が満たされたせいなのか眠気が襲ってくる。

うとうとと幼い頭が船をこぎ始めた頃、またしてもティーチの後ろから白い何かが現れて、その首根っこを捕まえ引っ張ってきた。

「わあ?!」

「てーちー!!」

「おや、ジャン…と坊や。坊やは起きちまったみたいだねえ？」

驚いたティーチが振り返れば其処には、先ほどの大きい犬。ふさふさとした尻尾がうれしげに揺れていて、その背中にはマルコが乗っていた。

その顔はジャンの背中に乗っているせいか、とても楽しげで。足元には若菜さんも一緒にこちらを眺めていた。

ニライカナイの住人達と子供5

ティーチもジャンにいつの間にか懐いてしまったのか、くわえられた襟首を正す。そしてジャンの首元に抱き付き、少々硬いながらも白く柔らかな毛並に顔を埋める。

超大型犬に分類される犬種故か、子供を二人ぶら下げたままでも、その体躯が揺らぐ事はない。

そうして湯を沸かしながらじゃれ合う子供達を眺めていれば、その向こう側からセイが帰宅したのが見えた。

「お帰り。いい塩梅に買えたかい？」

「ええ。丁度入れ替え時だったらしく、良い買い物が出来ましたよ。」

丁度湯も沸いた事だしと、子供達を風呂に入れようとした所でちょっとした騒動が起きた。

「いやだ！おばさんと、はいりたくねえっ！」

「おばさんとは何だ。この餓鬼。」

サキが纏めて子供達を風呂に入れようとするのを、ティーチが拒んだまでは良かった。しかしサキに対する呼称がセイの爛に障ったようだった。

それを聞いたセイがティーチに拳骨をお見舞いした拳句、自分が入れると引き摺って行ったのだ。勿論マルコはサキにベツタリなので異論などない。

「いいか。姉さんをそんな風に呼ぶんじゃない。ちゃんと梅吉姐さんよべ。」

「うめきちねえさん？」

「そうだ。例え血の繋がりが無くとも、自分の保護者たる相手へは、必ず敬意を持つて接しろ。暴言を吐くな。子供だろうと年寄りであろうと驕ることなく、礼節を持つて接しろ。それが此処で暮らす上での規律だ。」

「けーい……」

「守れないなら、自分がこうやって拳骨を落とすから、その心算でいろ。自分は常識や礼儀のなっていない子供が何より嫌いだ。」

元々セイは刀鍛冶など継ぐ心算もなく、近くの道場で寝泊まりをしていた。上下関係や礼節に重きを置く道場であつた為か、セイは殊更そついった事に厳しかった。現在では肉体の性別を違えてしまつたとはいえ、鍛練は変わらず続けていたし、鍛え上げられた体軀は現代でも珍しく180センチ近くもある。相貌も端正といえば聞こえは良いが、鋭い目付きのせいでそれも霞んでしまう。

その為女性には見えないし、本来の性別である男性と認識される事が常であつた。

勿論本人はどちらであつても、「本質」は変わらないとして意に介さない。こんな言い方をされて、ティーチはすっかり「セイは男である。」と認識してしまったのが、それも風呂場で覆された。

「……にいちちゃん……え？」

「……………気にするな。」

有るはずのものが無いと認識するなり、ティーチは驚いてしまったのだが、セイは「気にするな」の一言で終わらせた。

今まで理不尽な環境で生きてきたティーチも、なんとなく「これ引きいけなないことなんだ」と無理矢理納得してしまった。余談だが、セイの存在が、ティーチの中で女性というものは怖い生き物であるという、ある種のトラウマを植え付けていた。その為かその

後の彼の言動からも女性を曝すような物はでなくなった。

その後、サキがマルコを抱えて入浴をしたのだが、その時にマルコが言い放った問題発言に、遠い未来に彼女等が呆れながら爆笑することになる。

さて、ぬるま湯を使いながら丁寧に洗いこまれ、すっかり垢を落とした子供達は、縁側で水分補給にとスイカを食べていた。

種をどちらが遠くまで飛ばせるか等と、遊んでいる辺り微笑ましい限りだ。

その横で、子供達を寝かせる為に蚊帳の準備をするサキ。初めて見る蚊帳に遊んでいた子供達も、興味深げに眺めていた。

「ねーちゃ！こえなに？」

「あみなんかぶらさげて、なにするんだ？」

「姐さん」と、まだちゃんと発音できないマルコは「ねーちゃ」と呼ぶことにしたらしく、垂れ下がる蚊帳を触っては握ったり引く張ってみたりしていた。

「これかい？坊や達が寝ている間に、虫が悪さしないようにしてんのさ。この中で寝てれば、悪さする虫は入ってこれやしないからねえ。」

現代社会において蚊帳を使う家など珍しい事この上ないのだが、古き良き時代のまま暮らす彼女達しか知らない彼等にわかる筈もない。

子供用甚平を着せられた二人を布団へ寝かせると、ペット達もその足元で丸くなり、寝る体勢に入る。

明かりを消せば、開け放たれた障子戸から入ってくる月明かりが寝室を柔らかく照らした。

隣で子守歌を聞きながら眠ってしまったマルコの体温は温かくて、時折部屋にそよぐ夜風は、寒くなくて丁度良い。

初めてが沢山あった1日。見たこと無い場所で、怖いけど……

ぶら下げられた網は「かや」って言って、マルコや自分を悪い虫から守ってくれる。

足元には大きな犬や猫も一緒だから、悪いやつが来てもきっと大丈夫。

あんなに大きいから、ジャンが頭からぱくりって食べちゃうんだ。

お腹いっぱいになるまでご飯も食べられて、甘いスイカも貰えた。

マルコがぎゅうぎゅうって抱き付いて甘えても、呆れてたけど笑って許してくれた。

温かいお湯で身体も洗って貰って気持ち良いし、パジャマも見たこと無いものだけど新しい物。

初めて布団を見たけど、ふかふかで日向の匂いにする。

拳骨は怖いけど、ちゃんと怒る理由を言ってくれる兄ちゃんみたいな姉ちゃんができた。

あの拳骨はすっごく痛いから、きっと自分達を拐おうとした奴らなんが一捻りだ。

ご飯を食べさせてくれて、子供はたくさん食べて遊んで寝るのがいいんだと、本当に女なのかとおもつくらいおとこまさりなおばさん

……

あ……おばさんっていうと……にいちちゃんが……おこる、から……ちゃ

ん、と……うめきちねえさんって……よばない……と……

今日起こった事、思った事を反芻しながら、ティーチは襲ってくる睡魔に抗えず、いつの間にか寝息を立てていた。

それでも、互いの手をしっかり握って眠る子供達の姿に、サキは静かに微笑んでいた。

ニライカナイの住人達と子供6

心地好い微睡みから意識を起こせば、うつすらと辺りは夜明け色に染まりつつあった。サキがまず感じたのは、腕と胸の辺りの違和感だった。

はて、いつから自分は布団を抱いて寝たものかと、瞳を開いて確認をしてみたならば、まず視界に入ったのは腹を出して気持ち良さそうに寝てる黒髪の子供ティーチ。

そういえば昨日から住人が増えたのだったと思い当たり、視線をもっと下へずらせばいつの間にかそうしたのか。サキの腕を枕にして、胸元にすがり付くように眠る金髪の子供マルコがいた。

サキの気配がわかったのか、目を覚ました若菜さんがティーチの姿を確認すると、呆れたように欠伸をしてからのそりと歩み寄り上掛けを引つ張りはじめ。そうして出っぱなしの腹を隠すと、また先程のように丸くなって二度寝を始める。

なんとも人間くさい行動ではあるが、ある意味らしいといえらしい為なんとも微笑ましくみえる。

「はて…どうしたもんか。」

己の胸にすがりつく幼子は、寝汗で髪が額にぺたりとくっついて、寝苦しいだろうに顔は胸に埋めたまま。年齢から言って母親に甘えたい盛りなのだろうその様子に、眼を細めながら前髪を撫で付けてやる。

しかしそろそろ己は起きる時刻。体をずらして身代わりに布団をおいてやると、すやすよと気持ちよさそうに寝ている寝顔が見える。

蚊が入らぬよう素早く蚊帳から出ると、鏡台の前で寝乱れた髪を整

え、身支度を済ませれば土間へと行って朝餉の準備を始める。

セイは別の部屋で眠っているのだが、土間で作業を始める頃には既に寢床を離れ、朝稽古を始めている。

卵の焼ける匂いや味噌汁の匂いが辺りに漂う頃には、日もだいぶ昇り眠っていたジャンもあくびをしながら行動を開始し始める。

「んゝ…む…う」

起き上がったジャンが、眠っている子供達の顔を舐め始めれば、くすぐったさと揺れでさすがに眼が覚め始める。

大きいとまでは行かないがそれなりに通る犬の鳴き声で、最初に眼が覚めたのはティーチだった。

「うるさい…なんだよう…」

ごしごしと両目を擦りながら、あくび交じりに起き上がれば目の前に白い毛むくじゃらの顔。あまりの驚きに眼が覚めてしまい良く見てもみればジャンで。

「あー…おまえ、きのうの…そっか。おれらここんちにすむんだ」

「うゅ…て…ちい？」

ジャンの吼え声に目が覚めたのかマルコもモゾモゾと起き出した。その両手には布団を抱えたままで、まだ寝ぼけているらしく頭がふらりふらりとおぼつかない。

しかし自分が抱きついているのが布団だと気が付くと、今にも泣き出しそうな顔できよろきよろと辺りを見回し始める。それを見たティーチは、頭をぱりぱりと掻きながらマルコに話し掛けた。

「まるこ？うめきちねーさんがしてんのか？」

「いつしよねてたのに、いない…」

すると布団を放してティーチに抱きついてくるマルコに、ティーチは頭を撫でてやりながら言い聞かせるように話し出す。

「まるこ、うめきちねーさんはきつと、あさごはんつくってんだよな？ほら、いつしよにうめきちねーさんとこいくぞ。きつとおいしいごはんたくさんくれるから。な？」

「うー…ゆ」

抱きついたまま離れないマルコを宥めすかしてなんとか蚊帳から出ると、マルコを抱えたまま居間へと向かう。すると、鼻腔をくすぐるイイ匂いに二人のお腹から同時に音が聞こえた。

「てーち、なかしゅいた」

「そうだな、おなかすいたから、ごはんもらいにいこうな」

「うゆ」

ぎゅうぎゅうと、相変わらず抱きついてくる弟分をしっかりと抱えなおして居間へとたどり着けば、いつの間に先回りをしていたのか若菜さんが座布団の上に丸くなっていた。

「おや、起きたんだね。おはよう坊や達」

「おはよ…うめきちねーさん」

「あよい」

居間の卓袱台に朝ごはんを並べ終わり、やれ、子供達を起こしに行こうかと思えば、自分達で起き出したらしい。挨拶をすれば、マルコがティーチから離れてサキへと覚束ない足取りで歩み寄る。

それを見たサキが首を傾げていると、昨日と同じように額を押し付けるようにして抱きついてくる。

「なんだい、坊や。まったく甘えん坊だねえ。」

好意を前面にだして抱きついてくる子供に、嫌な思いを抱くはずも無く笑いながら抱き留めれば、とたんにマルコは顔を上げてサキの顔をじいっと見る。

「ねーちゃ、やーよい！」

「え？」

「はなれちゃ、やー、よい！」

いつの間に其処まで懷かれたのか、離れようもしない幼子に驚いた彼女へ、ティーチが説明をする。

「あー、さっきおきたときいなかったから、まるこのやつ、すねてんだ」

「おやまあ。」

朝ごはん作ってたからねえ。と笑いながらマルコを抱き上げてその頭を撫でてやれば、唇をへの字にまげてその肩口に抱きついて顔を隠してしまう。そのいかにも拗ねている表情と仕草に、ティーチとサキが噴出したのはしかたあるまい。

ニライカナイの住人達と子供7

拗ねていたマルコもサキの膝の上でご飯を食べていたおかげか、機嫌も良くなりティーチと一緒に縁側に座ってオヤツを食べていた。やはり痩せ細っていた二人は一度にたくさんのが食べられない為、小分けにして食べさせるようにしたのだ。

昨日のおやつはスイカだったが、いま二人が食べているのは茹でた玉蜀黍だった。いわゆるハニーコーンと呼ばれるものでとても甘い。これには二人も喜んだ。

1本を一気に食べるのは無理だとしても、簡単に割ることが出来るので、量を調整できるという利点もある。

「おいしかったー！」

「かったー！」

オヤツを食べ終わった2人は、手をつないで、土間へと行く。

「食べ終わった食器は、運べるものは運ぶ事」

これは朝食時にセイから言われたことであつた。子供が嫌いだと言ひてはいるが、泣き喚きもせずくっついてくる子供達には閉口したらしい。

ティーチはからかうと打てば響く鐘のようにすぐさま反応を返すが、普段から騒ぐわけでもなくジャンとじゃれあうか、食べるかのどちらか。

対してマルコは少々泣き虫な点はあるものの、サキがいれば機嫌はいいし傍を離れようとしてもしない。離れていたとしてもティーチが傍にいて面倒を見ている。

つまり対して手がかからない為に容認したというわけだ。

「なあ、うめきちねーさん。このさら、ここでいいのか？」

「ああ、そこに置いておくれ。これから畑に行くからね。靴を履いて裏へ回っておいで。」

「わかったー！いくぞ、まるこ」

「よい！」

皿を台の上に置くと、ティーチはマルコの手を引いて玄関へと向かった。畑に行くといわれてテンションが上がってしまったのだろう、廊下を大きな音を立てて走っていた。すると…

「こら、廊下を走るな。」

「あ、にいちゃん。」

「……うゆ」

廊下を走っているとセイに咎められて、慌てて走るのを止めればティーチの背中にぶつかって転がるマルコ。それを片手で救い上げるようにセイが抱えれば、マルコの目がくりくりと広がった。

「よい？」

首を傾げながらいつもと違う目線。床が遠くなり天井が近くなる。そこでマルコは自分が抱えられているという事がわかったらしい。

「にーちゃ、はたけいく、よい？」

「自分に行かないぞ。いいか、廊下を走ったら転ぶだろう。転んで泣くのはチビ、お前だぞ。」

「っうゆ?!」

指先で額を突かれて床に降ろしてもらったマルコはセイを見上げた。

「にーちゃ、ごちやい」

「ごめんなさい、な。」

「ごめなしゃい」

額を片手で撫でながら謝るマルコに、セイは楽しげにティーチに視線を投げる。その視線にびくりと肩を震わせるティーチはまるで小動物のようだった。

「な…なんだよ。にーちゃん」

「チビはちゃんと謝れたのに、兄であるお前は謝罪も出来ないのか。情けないな。大体、兄は弟を守ってやらねばならないのに、お前がチビを転ばせてどうする。」

「……っ！…ごめんなさい！」

もつと早く言えと髪をかき混ぜられれば、元々天然パーマでクルクルとしているティーチの髪の毛が鳥の巣のように乱れた。

必死に止めさせようとするも大人と子供では体格差があり、されるがまま。

「あんた達、何遊んでんだい！お天道様が真上に来ちまうよ。さつさと準備しな！セイ！あんたもからかって遊んでんじゃないよ！」

「すいません。面白くてつい…」

あまりに遅い子供達に痺れを切らしてサキが覗き込めば、廊下でじやれあっている妹と子供達。怒鳴れば慌てて玄関へ急ぐ子供達と飄々とした妹にため息を零した。

子供達が裏へ回ってみると、其処は100坪ほどの菜園があった。季節が夏であるためか、トマトやきゅうり、玉蜀黍などが良く育っている。歓声を上げる子供達へサキは小さな籠を渡しながら言った。

「熟れてる野菜で気に入ったものがあれば食べていいよ。その代わりゴーヤを採ってきておくれ。緑色で大きいごつごつとした瓜みたいなのがそうさ。いいね？」

「わかった！みどりいろ、でゴツゴツしたやつだな！」

返事をするや否や籠を片手にマルコの手を引いて、菜園の中へ消えてゆく子供達。それを可笑しそうに笑いながら、サキは水遣りをするべく隣接の井戸へと歩いていった。

所変わって、ティーチは緑色でゴツゴツした野菜を探していた。瓜と言っていたから、蔓を伸ばす野菜なのだろうと思いつながら。

「てーち、ゴーやってなにー？」

「しらねえ。みどりいろで、おおきくて、ごつごつしてんだってよ。まるこ、おまえもみつけたら、しらせるよ？」

「よいー！」

ニライカナイの住人達と子供8

セイが洋服と一緒に買ってきた小さな麦わら帽子を被った二人は、ジャングルのように生い茂る菜園の中を歩いていた。見たことの無い野菜も多く、まるで冒険をしているかのように感じられる光景に二人はワクワクするのを抑えきれないまま先を進んだ。

日の光を浴びてキラキラと輝く野菜は、ティーチやマルコには宝石のように綺麗なものに思えた。

しかも二人に気に入ったものがあれば、好きに食べて良いとまで言っていたのだ。この家に来てからまだ1日位だが、二人は既に今までの生活ならば一週間分位の食べ物を食べさせてもらっていた。まるで夢を見ているような幸福、もしかしたら今自分達は夢を見てるのかもしれない。そう、夢現なふわふわした思考の中、ティーチはそんなことを思った。

実際夢であつたならセイの拳骨が痛いなどわかるはずも無いのだが、そこは子供特有の「喉元過ぎればなんとやら」だ。怒られたことなどどつくの昔に記憶の彼方へ投げやられてしまっている。

不思議な場所にある不思議な家に住む、不思議でとっても優しいヒト。もしかしたら人間じゃないのかもしれない。前に聞いたことがある、妖精とか天使っていうものなのかも…

本人達が聞いたなら噴出して腹を抱えて、死にそうな程に笑い転げそうなものだが、ティーチとマルコは結構本気で信じていたりする。とくにマルコはサキにすっかり心を許してしまっていて、昨夜など「ねーちゃんのおよめちゃんになつてしゃーわせーになゆのー」発言をしだした。なぜマルコが「およめちゃん」になりたいのかは不明

である。

今起きてる事が本当のことだと信じられなくて、ティーチは自分の頬を思いきりつねってみた。涙が出る程痛くて、思い切りやるんじやなかったと本気で後悔したけれども、痛いだけじゃない涙もでた。泣いているティーチを心配して、マルコが必死に小さい手を伸ばして頬を撫でてくれる。

「なあ、まるこ。ゆめじゃ、ないんだなあ」

「てーち、いちゃい？いちゃい？ねーちゃ、よぶ？」

「だいじょうぶだ。いたいんじゃなくて、うれしいだけだつて」

嬉しい事があっても泣くんだぞ。と笑いながらマルコの頭を撫でて、溢れた涙を力任せに拭くと箆を持ち直して野菜探索へ意識を切り替えれば、マルコもそれ以上は何も言わずに黙ってついてくる。誤魔化すように途中真っ赤に実ったトマトをもいで、二人でかじれば酸っぱいはずのトマトが甘くて、ほんの少しだけしょっぱかった。

小さいマルコにはまだトマトの皮は固いけれども、ティーチが少しだけ剥いてやれば食べる事ができた。あっちでは野菜は美味しくなかったから食べてなかったけど、姐さんの手にかかればそんな事も気にならない。いくらでも食べられてしまう。けどもうすぐ太陽が真上に来てしまうから、お昼ご飯になる。

美味しいご飯を食べ損ねたくはないから、ゴーヤを見つけれなかったけれど、一度戻る事にした。

「てーち、ゴーヤ、ないねー」

「そうだなー。どこにあるんだろうなー。」

本当はティーチにも判っていた。たぶんあの人はゴーヤをちゃんと

持つてこれるとは思っていないはずだ。ただ、退屈しないように、ちよつとでも色々食べられるようにと連れてきてくれている。それでも宝探しのようなゴーヤ探しを止めようとは思わなかった。

「ごはんたべたら、またゴーヤさがすつて、いっしょにおねがいしような！」
「よいーい！」

二人で顔を見合わせて楽しそうに約束をすると、空の籠を持つて大好きな人のところへ駆けていった。

「お昼にするよ。手を洗つておいで」
「きょうの、おひるはなに？」
「その様子だとゴーヤは見つけられなかったようだね。また探すのかい？」
「さがすー！」
「まゆこもー！」

井戸で手を洗つて縁側へ行けば、其処には冷汁と野菜の揚げ物が出てあつた。

魚と胡麻をたつぷりと入れた冷たい味噌汁をご飯に掛けて食べるもので、揚げ物は下味をつけてチーズを塗して揚げた物だつた。

栄養を偏らせず、かつカロリーを多くとらせる工夫をしている辺り、面倒を嫌う彼女がいかにか子供を可愛がつているかが伺える。

人参やパプリカ、牛蒡なども子供達は嫌がる事無く口へと詰め込む。もっとも小さいマルコは上手く食べられない為、サキに食べさせてもらつてご満悦だが、少しだけティーチは弟分の将来が心配になつた。

「なあ、ねーさん、ここってすごいんだな。とまともみんなきれいなんだ。やさいはおいしくないからきらいだけど、ここのはおいしいからすきだ」

「んぐ、むぐ」

「おや、嬉しいことを言ってくれるじゃないか。ま、好き嫌いなんざ、させないが。好き嫌いしてるというままでたつてもチビなままだからねえ。」

「すぐでかくなってやるんだ！にーちゃんにまけないくらい！」

「おやおや、てち坊やが背を追い越すのは、一体何年かかることやら」

「まゆも！まゆこもー！」

「ああ、そうだねえ、坊やも好き嫌いしないものねえ」

負けじと自己主張するその頭を偉い偉いと撫でられれば、とたんにご機嫌になるマルコ。何となく面白くないティーチは、ふと脇にある籠に入っている物に目が止まった。

「あれ？みどりいろでござござ…ねーさん、これがごーや？」

「ああ、そうだよ。午後からはそれを頼りに探しておくれ。4本程頼むよ。」

「うん、わかった！」

確かに見たことの無い野菜で、ちよつと青臭くてゴツゴツとしていてはじめてみたら驚くかもしれない。がんばって力を入れれば、真ん中からパキリと折れる。

中には白い種がふわふわの綿のようなものに包まれていた。

「これがごーやかあ。はじめてみた」

「ごーや？」

二人で手にしたゴーヤをあちこち眺めたり匂いを嗅いでみたり。そしてサキが麦茶をグラスに注ぐと眼を離れた隙にそれは起こった。振り返ったときには遅かった。

同時に、子供らがゴーヤに噛り付いたのだ。瞬間口を開けたまま悲鳴を上げるティーチ。マルコにいたっては大泣きし始めた。

「あんたら何やってんだい?!」

慌てて二人を井戸まで連れて行き、口の中のを吐き出させて何度も口を洗わせる。それでもゴーヤ特有のエグミと苦味が消えることは無い。

もはや苦味というよりも痺れにも似た衝撃だった。

「まふい……」

「うつつうつゆ……」

「ばかだねえ……」

呆れたように二人を連れて居間へ連れて行き、今日のオヤツにしようと思っていた大学芋をとりだした。

「ほら、甘いもん食べて口直ししな。」

泣きじゃくつてしがみ付くマルコへ大学芋の蜜を舐めさせてやれば、スンスンと鼻を鳴らしつつ大人しくなる。ティーチは芋をとると口の中に甘みが行き渡るように、たっぷり蜜を絡ませてから口の中へと入れる。

暫く無言で大学芋を頬張る二人に、サキは声を掛けた。

「これからは生で食べられるもんか、ちゃんと確認してからにしな。ゴーヤってのは別名苦瓜って言つて、とてつもなく苦いんだよ?」

「うゆ」

「わかったよ。よくわかったよ、ねーさん」

苦瓜は生で食べるものじゃない。それが幼い二人の記憶の中で鮮明に記憶された瞬間だった。

因みに余談ではあるが、そう遠くない未来に悪魔の実を食べるマルコがそのときにこう語った。

「確かに美味しいもんじゃないがねい、生で食うゴーヤよりマシだい。」

ニライカナイの住人達と子供9

いくつかの季節を過ごし、沢山たべて、沢山遊んで時折怒られて。海の落とし物として拾われた子供達は次第に子供本来の肉付きを取り戻しつつ、太陽の下で元気に駆け回って遊んだり、ジャン相手に相撲をしたり、時折セイの雷から逃げ回ったり、鍛練に便乗してみたりと、着実に健康体へ近づいていた。

そんなある日の事、二人がいつものように畑でオヤツを選んでいると、いつの間にか客が来ていたらしく、何人かの男達が引き上げるのが見えた。

身形はよいのだが、どうにもティーチとマルコには嫌なものに見えて仕方ない。

「なんか……いやなかんじがする。まるこ、ねえさんとこいくぞ。」

裏の勝手口から家の中に入ると近所の住人も来ていて、その年齢層はばらばら30人ほどで皆同様に厳しい顔付きをしていた。

「まさか、こんなに早まるとは思わなかったけれども。案の定……と言ったところかね。」

「これだから人間ってやつあ……」

サキが些か苦々しい表情をしながら、食卓の上にある紙を見つめている。

この辺りの土地を所有していた地主が亡くなり、その息子が跡をついだが余り出来がよろしくないらしく、多額の借金を抱えてしまった。

あまり表立って営業出来ない金融業から借りていたのか、首が回ら

なくなつたなら土地を寄越せとなつたらしい。

現在住んでいる土地は、借家ではなくサキ名義のものであるのだが、この辺りの土地を全て買い上げて何やらリゾートホテル等を建設したいらしく以前から立ち退きを請われていた。

何かを建設する際に、サキの土地を避けるには場所が悪すぎ、大き過ぎた。今この場に来ている住人達は、サキ達の大体の事情も知つていて、サキを頼つて引越してきて敷地内に住居を構える同じ訳有り の住人達だ。

よくマルコやティーチの面倒も見てくれて、二人もよく懐いていたが、どういったつながりなのかは聞けず仕舞いだった。

「梅吉師匠……」

サキと同じように着物を身にまとつた年若い女達が、心配そうな苦しそうな表情でサキを見つめる。その隣にいる白髪頭の女性…ティーチがためきばーさんと呼んでいる老婆が、お茶を飲みながらつぶやく。

「あたしらは、まあ…いわばあんたの棲家に勝手に転がり込んだよ
うなものだからね。出て行けといわれたら出て行くさ。」

だが、今回は違つたろう?と。

縁側に座つていた坊主頭の初老の男性が、鋭い眼で男達が去つた方向を眺めている。

「なあ、梅吉さん。私等はいつでも準備は出来ているよ。こっちに非はない。が…そうも言えぬ己等の事情が口惜しいよ…」

「師匠の考えに、アタシ達は付いていきます。異論なんてあるわけではないですよ。」

みな同じように口々に賛同を述べる。その様子に勝手口から眺めていた二人は、居間へ入る勇氣も沸かずその場に座り込んでしまった。

「それに、あの子供達もそろそろ頃合だ…ちゃんと話をしてやらなといけないだろうね。人間は直ぐに成長しちまうから…」

「そうですね。怖がらないといいのだけど…」

心配そうに女達が勝手口の方角を眺めれば、場の空気を変えるためか尻馬に乗るようにサキがキセルを啜えながら、からかい口調で言出す。

「まあそうさね。その縁側の似非坊主の本性なんざ、厳つくって仕方ない。あんなんじゃあの子等に泣かれっちまうよ。」

「梅吉さん?! ちよいと酷いんじゃないかい?! いくら私でも泣くよ?」

「よしなよ、みつともない。大の大人がビービーと泣いてちゃ、むさくるしくて仕様が無いよ。」

他のものもわかつているのか、とたんに楽しげに笑い出した。

「丁度いいから、説明をしないとね…ま、それで出て行ってくてなら、寂しいが仕方無いだろうよ。」

懐に入れてある小さな膨らみに手を当てて、少しだけ寂しげに微笑む彼女をマルコには幼いながらも…

普段の威勢のよさとは異なり、道で揺らめく陽炎のように儚げに見えた。

大人たちの話に入っていけるはずもなく、勝手口の所で蹲っている子供達に縁側にいた男が手招く。それを見て恐る恐る近寄っていく

子供達に、大人たちは困ったような笑みを浮かべた。

「さあて…まー坊、てち坊。」

「なに？うめきちねえさん」

いつものように優しい声音で、最初の頃は気に入らなかった渾名でも呼ばれれば嬉しくなる。初めてこの家に来た時は大人は怖くて、自分達を傷つけるものだと思い込んでいたけれどここはそうではなくて。

微温湯の様に暖かく包み込んでくれる、溶けた飴のように甘く蕩けるような天国のような場所。それがこの家だった。

例え彼女達が悪党であっても、ティーチたちはここを出ていこうだなんて思いもしないし、追い出されてもここにいたいと思っている。何を言われるのだろう…と不安げに揺れる子供達の眼差しに、サキとセイは目を合わせ苦笑をもらした。

「坊や達、私らがお前達を追い出すとも思ってるのかい？冗談じゃないよ、ここを出たって行くところなんざ無いだろうに。安心おし、追い出したりはしないから。」

そう言われれば安心したかのように、マルコがサキの元へと駆け寄り抱っこを強請る。それにいつものように抱え込んでやれば、着物を握ってニコニコと微笑む幼子。それを見て微笑まないものはこの場にはいなくて。

「以前に、同じく訳有り>って言ったのは覚えているかい？」

「うん。」

「その理由を説明しようと思ってね…。聞いてくれるかい？」

「うん。」

ニライカナイの住人達と子供10

ことの始まりは凡そ300年以上前、世が平成ではなく江戸時代と総称されていた時代。芸者の娘として生を受けた砂生は、幼い頃から母親に芸事を仕込まれていた。

舞や歌、楽器はもちろんの事、洗練された会話や立ち振る舞い。芸者というく芸に秀でたく者として恥をかかぬようにと。目鼻立ちを決して麗しくは無くともそれを補う能力があれば生きてゆける。

母親を困っていたのはどこぞのお武家様で、お内儀がないということによく母親の元へ通っていた。

本当に変わった御仁で、女であれど武芸が出来てこそ誠の芸者であるという、意味のわからないことを言っては、砂生へ弓や薙刀、果ては馬術まで教え込んだ。

元より巴御前に憧れていた節があったため、彼女のような女傑に育てたかったのだろう。生まれ持ったの才能ゆえか両親の期待通りに育ったのち彼女を置いて流行病であっけなく逝ってしまった。

その後母の権兵衛名を受け継ぎ芸者として生計を立て、巷で人気芸者として売れ始めたのが災いしたか。

ある大店の店主の娘に似ているということで、洪水を防ぐ堤防の人柱へ身代わりとされることとなった。その裏に何があったのかなど彼女が知るわけも無い。

彼女を厭うものも少なからず存在していたし、その大店の主人の鼻屑している芸者が彼女を厭うていたのは誰もが知るところであった。

堤防の工事をする場所の近くには毎日お参りをしている稲荷の社があり、其処も壊されると聞いて最後の願いとばかりに人柱になる日、あの日に参拝をしたのだ。

それは今でもよく覚えている、雨の降る肌寒い春の日の事、それは砂生が24になったばかりの日。芸者であることを最後まで己の誇りと、黒の着物にお太鼓で、母の形見の簪を黒髪に、仕事道具の三味線を抱えて…。

己の後ろで急かすくでなし共に腕をとられた時だった。

雨の中走る閃光

地響きとともに目の前に迫る濁流

掴まれた手が解けたと思えば、刺すような冷たさが己を包んで…

そう、一瞬だったのだ。

確かに冷たい濁流に包まれたはずなのに、気が付けば蒼白い炎に取り囲まれていて優しく額を撫でる指に、昔に亡くした母親の面影を見た。

そのまま視線を移せば蒼白い毛並みの狐と己の胸が炎によって繋がれていた。その狐は己で、己はあの狐なのだと、まるで当然のように納得してしまった。

気が付けば己を身代わりにしようとした大店の屋敷で、その主人が堤防の決壊で亡くなったことを聞いた。

その辺りの記憶はあやふやで、気が付けば小田原で小さな商いをしていた。畳を捲れば小判の入った壺が隠されていたから恐らく強請

ったか何かであの大店からせしめたのだろう。

罪悪感など沸くはずも無く、気が付けば10年が経過していた。そうすれば嫌でも気が付くのだ。

己が年を重ねずそのままであるということに

己が、もう人ではないものなのだということに。

それから何十年、気が付けばもう300年も経過していて…同じような境遇の者達で肩を寄せ合って生きてきた。

初老の男性とたぬきばーさんは本物の狸の変化で、環境の変化に付いて行けずここへと移り住んだ。

梅吉師匠と慕ってくれる女達も、元は古道具の付喪神でこの目まぐるしく変わってゆく時代の流れについてゆけない。

この家に集うのは、誰しもが人間として馴染むことの出来ない者<化け物>ばかりだ…。

そう語った砂生の双眸は仄暗く、何処までも真っ直ぐ子供達を射抜いていた。

「ねえ、まー坊、てち坊や…それでもお前さん達は、私達を優しい人間<ヒト>だと思うかい…？」

人間ではない。そう言われてもティーチにはいまひとつピンとこなかった。

元からヒトではないのかも知れないとは思っていたのだ。もちろんそれは子供の想像でしかなく、妖精や天使じゃないかなどと思う程度ではあつたけど。

最初の日の会話ですら、普通ではない会話だったというのに、それで気が付くなというほうが無理な話だった。

「ねえ、ねえさん。おれたちしつてたぜ？」

「あん？」

「ねえさんたちが、ふつーのヒトじゃないことくらい、しつてたよ。さいしょから」

その言葉はサキやセイ、周りのものもあっけにとられたような表情をさせた。

「てち坊や…？」

「だって、おれやまるこをきずつけるのはいつだって、おとなのヒトだ。だけど、おれたちをきずつけないんだもん、ひとじゃなくなつて…」

そこまで言うと、ティーチは両目に涙を溢れさせてサキに抱きついた。思わず抱きとめれば必死に嗚咽をこらえようとするも、一度堰を切ったものを抑えるなど出来るはずも無く。その泣きじゃくるティーチをみて、マルコは必死に頭を撫でてやっていた。

「てーち、てーち…」

今いる世界がいままで自分たちのいたところと違うことくらい、い

くら幼いとはいえ、ティーチだつてとつくの昔に気が付いていた。拾われたあの日…住んでいた島が海賊に襲われて島の女や子供はみんな連れ去られて、マルコやティーチも 商品 として船倉に閉じ込められていた。

船という閉鎖された厳しい環境で、ろくに食事も与えられない船倉に閉じ込められた島民が耐えきれはるはずもなく…一人、また一人と動かなくなつてゆく光景は、まさに地獄だつた。

それでも、明らかに逃げられない大人たちが子供に食事を分けていてくれたおかげで二人はなんとか生き長らえ、ひどい時化で船が座礁した際にマルコとティーチは損傷した船底の隙間から逃げ出したのだ。

もちろんすぐに二人は海に飲み込まれてしまったけど、必死にお互いで互いを抱きしめていたおかげであの海岸へ流れ着いた。

「おれや、まるこにとつてねーさんたちが、いちばんなんだ。ほかにんげんなんかしらない！やさしくて、おれらをたすけてくれたのは、ねえさんたちじゃないか！」

「てち坊…」

咽び泣きながら、必死に訴えるティーチの言葉に、付喪神の女衆も袖で目元を拭いながら肩を寄せ合っていた。

人間の姿形をとつていても己らでは、この子供をきちんと育てられぬのではと不安に思わなかった事がなかったわけもない。

人間の大人、特に男性に恐怖を感じているのがわかっていた為、仲間内でも男衆はなるべく子供に近づかないように心掛けてもいたのだ。

それでも、この海からやってきた幼子を、自分たちなりに大切にし

てきたのだ。その珠玉の宝が己らを厭うのではなく、大切だと言ってくれた。それだけでどれだけ救われたことが、この幼子たちは理解していないに違いない。

そのままではサキの体勢が辛かろうと、化け狸の夫婦がティーチを受け取って抱きしめてやれば、ティーチはその膝に抱きついたまま泣き疲れてしまったのかいつしか眠ってしまっていた。

マルコはサキにしがみ付いたまま、泣きもせず大人しくしている。

しかしその目は今にも泣きそうで、その様子に気が付いて背中を撫であやしてやれば、サキの首筋に抱きついて、静かに涙をこぼした。

ニライカナイの住人達と子供 11

「思ったより、あの子らは周りをよく見ていたんだねえ……。私なんざ何百年生きてたって、判らないこともあるってのに……」

古狸の夫婦に子供たちを預けて、いまこの場に居るのは妖怪だけ。人間なのか妖狐なのかいまだ曖昧なサキを除けば、だが。

子供たちを守りたい……。幸いにも己らは人間の法に縛られない存在。どのような手段を使おうとも、この子たちだけは守り抜くことが出来るだけの力や知識だけでなく、望まれはいくらでも財宝を手に入れてもこれる。

人間に排斥された己らが出来ることと言えば、己らの ちから を、知識 を駆使し、この子供たちに伝えること。

近い未来この世界から弾き飛ばされる子供たちに、生き抜く 術 を教え込まなければ。無情で冷酷な世界の波に幼子が迷い倒れないように。

「なあ、みんな。思ってることあ 一緒だと思うがね。どうする？」

煙管に新しい煙草を入れ火をつければ、独特の紫煙が一筋立ち上る。尋ねるその双眸は先ほどまでの暗い闇も、揶揄する色も見えない。しかしどこか人間としての温かみの欠けた、ガラス玉のような色を煌めかせていた。

今まで己の存在は人間であるのか、それとも妖狐であるのか曖昧なまま生きてきたが、サキは己の信条に反するものを排除するためならば、ヒトであることを捨てることも厭わないと考えるようになっていた。

己を救ってくれたのは小さいとはいえ、社に奉られていたお狐様。九尾の狐と言えばもともと守り神とされた霊獣で、裏を返せば革命

を促す凶獣でもある。（世間一般では凶獣のほうが有名ではあるが。）
その気性も受け継いだのか、その信条次第では相手を傷つける事さえもさして気にはならないようになっていた。

「そうさなあ、今の人間ってのはどこでだれが生まれたかって、事細かに全部管理してるらしいじゃないか。ここの者じゃない、あの子らにはそんなもんなかるうよ。」

「なんだってそんな面倒くさいことをしてんだろっねえ。いやらしい…。だったら、さっき来ていた人間にその辺りを付け込まれる可能性もあるかもしれないねえ。」

どうする？どうしようか？

言葉に出さずとも、視線のみが交わされればそれだけで互いの考えがある程度解かるといものだ。なぜなら、全員の意見など聞かなくとも結果など分り切っている。

<子供を守る>

<生き残るための知識をつけさせる>

それに必要な時間を稼ぐことなど彼らには容易い事。

人間の都合など、アヤカシである「人で無し」の己等には関係の無い事。

「じゃあ、時間稼ぎに…。ちいと物の怪らしいことをしようじゃあないか。はて、科学だ、なんだと言ってる奴らがどこまで耐えられるか見ものだねえ…」

そう言い出した別の女の眼が濡れたように光る。楽しげに微笑むその口元は常人ではありえないほどに吊り上がり、その爪も鋭い。それを見た何人かも楽しそうに含み笑いをしだした。

「悪戯の好きな連中が多いからねえ。どうせなら知り合いに声を掛けておいてあげようよ。なあに、表立って商売が出来ない連中さ、多少派手にやったって、あちらさんには騒げるはずもない。」

猫のような瞳孔と鋭いきばを持つ女が囁いた。

「そりゃあそうさね、いつの時代もああいった連中は表に出ることを嫌がる。」

サキは、表情を変えることなく煙管を吹かし旨そうに煙を吐き出す。

「本当の裏の連中つてのは、私らを本能的に避けるはずなんだがねえ。可哀想に。」

湯呑みを持つ手に鱗を生やした男が、長い舌で湯呑みの中にある酒をうまそうに啜る。

「これも時代の流れさね。本当の悪党になり切れないなら、見せてやればいい。私は善人じゃあなんでね、自分の懐にいれた大事な宝^{タカ}物^{ラモン}を壊そうとする奴には容赦しないよ。」

その時、彼女の背後で蒼い蒼い炎が彼女の笑みに呼応し、嘲笑うように揺らめき、隣に座る妹の口元も牙を剥き出し歪むように笑みを形造った。

翌日から早速マルコとティーチは遊びと称して、住人たちの手によ

りその体をく生き延びるゝに適したように作り直される。以降、長い人生で二人の生きる指針になり、戦闘スタイルを形づくる原型となり、また不死鳥という異名で呼ばれるようになるマルコの礎となることになる。

ニライカナイの住人達と子供12

「へえ…結構悪いことをしてんだねえ。まあ、後ろ楯はないようだし、ちいと突けば直ぐ終わっちまいそうだ。」

感心したように目の前にまとめられた書類を眺め、目の前に座る客に笑ってみせる。

「楽しかったよ。最近の活動写真でやってた……ほら、あれだ、スパイになった気分だ。」

「近頃じゃ「映画」とか「むうびい」って言うらしいですよ、貉の旦那」

「人間は面倒な名前付けんのが好きだねえ…舌かんじまうよ。」

労いを込めて冷酒を振舞うサキに、黒い上物の着物を身に着けた男とその連れであろうクリーム色のスーツを着た女が微笑みながら注がれた冷酒を立て続けに3杯一気にあおる。

「ああ、やっぱり暑いときゃ、これに限るねえ。梅吉さんや、そいつらなんだが、大きなコトはやっちゃいないが、そこそこ小金を貯めていそくだよ。ねえ、キ又さん」

「ええ、しかもあそこの取り締まりをやってる男つてえのが色狂いなのか、ちよいと笑いかけてやつたくらいで面白いほど反応しやがるんですよ。まったく人間の男つてえのはいつまでたっても進歩しやしないんだねえ。」

「おキ又さんや、仕方ないだろう。それだから私だつて芸鼓として日々の飯のタネにできてたんだ。100年や200年で男のサガがなくなるならこっちの商売もあがったりだい。」

「まったくだ。ああ、自由に生血をすすつてた頃が懐かしいねえ。」

最近じゃ食事をするのも一苦労だ。」

「儂等だつて似たようなもんさ。」

この会話をきいている限り、酒を振舞われてる二人組も妖怪のようである。

「あの子等の仕込みはいかがなんです？今烏天狗の旦那方が教えていらつしやるんでしょう？」

「ああ、何でも感覚を鍛えるとか言つてたねえ。なにせ、まー坊はまだ数えでも4つかそこらだ。無体はできないだろう？バランス感覚とかを養うとか何とか…」

「ははあ、まー坊は確かに何も無いところで、よくすつ転んでますからねえ。ちょうどいいかもしれませんぜ。」

まだ頭のほうが重いせいとか、実際マルコは良く転んでいた。その度に大きな音を立てて転ぶので、常に若菜さんが傍に付き添うようになつたほどに。

子供の教育が始まってからは付き添うことはなくなつてはきているが、それでも前転しつつ転ぶという器用な転び方を時折披露してくれている。

そのたびに後頭部をぶつけているので、いつか後ろ髪が禿げるんじゃないかと心配されてもいるのだが、予想を裏切ることなく成長した姿は言わずもがな、…というやつである。

「話は変わるがね、梅吉さん。」

「なんだい、改まって…」

酒の入った湯呑を置いて、貉の旦那がまっすぐ彼女を見据えた。その表情は先ほどまでの穏やかな会話がされていたことなど、忘れたかのように厳しいものだった。

その隣に座るキヌも、同様にその双眸に冷たい何かを宿らせてサキを見つめる。

「覚悟、ついにお決めなすった、と受けとっていいのかい…？」

その言葉は短いながらも、重い意味を含んでいた。

「ああ、腹あ括ったさあ。ま、いい切欠になったといえになったんだろうねえ。」

「そうかい。」

人間を貶める覚悟

子供たちを守り抜く覚悟

そんなものを尋ねているのではない、もっと根元のもの。

<人間>という<サガ>をサキが見切りを付け、<妖狐>として、<人あらざるモノ>として生きる覚悟がついたのかと尋ねているのだ。

サキの妹であるセイは姉であるサキに甘いから、覚悟がなくとも姉の傍を離れることはないだろう。

しかし、妖怪は人間に良い感情を抱いているものだけとは限らないのだ。中には餌としてしか認識しないものもいるし、純粋に嫌悪や憎悪の対象としてでしか認識しないものも存在する。

そんな中で妖怪なのか人間なのか、曖昧なままにいるサキをよく思わないものも多い。それに終止符をうち、妖怪として人間の理を外れて生きると腹を括ったというのなら彼らは何も言わない。

10年20年の付き合いではない。それこそ200年程の付き合い

になる彼らだからこそ尋ね、受け止めた彼女の覚悟。

「女の感情つてえのはシチ面倒なもんでねえ。天女のように清純なモンでも、裏返せば鬼にも夜叉にもなる。ヒトつてえのは簡単に捨てられるモンさあ。だったら、この梅吉、意地に掛けたつてあの子供らのためとは言わないよ。手前えが手前えらしく生きるために、腹あ括つて妖あやしだろつとなんだろつとなつてやると、啖呵切つてやろうじゃないか。」

そう、言い切った彼女は、清々しいまでの笑みを浮かべていた。

ニライカナイの住人達と子供13

久しぶりに出した裁縫箱を使つて、何かを縫っているサキに今日の分のく遊びをを終えたのである。マルコが近寄ってきた。針仕事をしているとわかると邪魔をしないように近くに座り込んで、首をかしげてサキへ尋ねた。

「ねえちゃ、なにを、してるよい？」

住人たちが挙つて子供たちをかまい倒すせいか、マルコは、4歳ほどの年齢に反して話し方もしつかりしてきた。相変わらず語尾に「い」や「よい」とつける癖は抜けていないが、サキ自身が江戸っ子で巻き舌気味の口調な為さして気にするほどでもない。

それでもサキにべつたりと甘えることも治る様子もなく、マルコはいまだに「ねえちゃのおよめさんになる」と言い続けている。しまいはどうやったらサキと同じになれるのだと聞かれる始末。

男は嫁になれない、また生まれもったものだから、同じにはなれないと説明しても、いまだに男女や人間と妖怪の区別がイマイチ分かっていないようで、最近ではティーチと貉の旦那の頭痛の種になりつつある。

「ん？これかい？」

一端針仕事をやめて、手に持った何かをマルコに見せる。

「これはお前さん達へ渡す予定のお守り袋さ。」

「おまもり、ふくろ？」

針仕事をやめたサキの膝に甘えかかって、その袋を眺める。だが、お守りというものの自体がよく分かっていないのか、マルコは不思議そうな表情で首をひねっている。

「おやおや、まー坊、これじゃ針仕事ができやしないよ。どうしたんだい？ん？」

「よいよい！」

烏天狗やみんなが構ってくれることはマルコも嬉しいのだが、やはりサキに構ってもらえるほうが嬉しいと感じる。口では怒っていても結局甘やかしてくれるサキの膝に抱きつくようにして、頭を乗せて楽しみに笑う。

いまだに妖怪であるサキと自分の違いが理解はできないけれど、マルコの世界の大部分を占めているのはサキとティーチなのだ。

「ねえちゃ、ずうつとずうーつとまること、ていーちと、にいちゃとじゃん、わかなしゃん、みんな、みんないつしょ？」

「……………そうだねえ。まー坊が、もつと、今よりも大きくなってお嫁さんもらうまでは一緒だねえ。」

妖怪と人間が同じ時間を生きることなど無理だと、幼子に説明しても判りはしないのだ。ならば…と、今だけは甘い夢の中、真綿のように優しく温かいこの箱庭の中で幼子の幸せを紡ごうと。そうすることは間違っているのかもしれない。

しかし人間の理から外れたこの身が、神の下す罰など受けるはずもない。

（まあ、お稲荷さんとはいえ、その神さんと融合そちまった私に、どうこうできるはずもないさね。）

「まるこ、およめしゃんもらうんじゃないよい！まるこ、ねえちやのおよめしゃんになるの！」

「まったくこの子は。お嫁さんをもらえるのは男だけなんだよ？私は一応女なんだから嫁さんはもらえないんだよ。」

「うーゆ……、じゃ、ねえちやおよめしゃんになって！まるこの！」

「おやおや、熱烈な求婚だこと。まー坊が、そうだねえセイより背丈がでかくなったら考えておこうか。」

「ぜったいね！やくそくだよい！」

少なくともその頃にはこの箱庭から子供たちは出ているだろうし、己らもここにいるとは限らない。ここは束の間の夢なのだ。この子たちが人間として生きるためには己らのことは忘れてしまったほうがいい。

幸い幼いころの記憶はすぐに薄れ行くもの、そう考えてサキは微笑んでいた。

もうすでに色恋沙汰など、己にはありえぬと考えていたというものもある。

いったいどこの世界に、年を取らない化け物を伴侶にと選ぶ馬鹿がいるというのか。この妖怪には住み辛い世界で、生抜くだけでも大変なのだ。命があつて仲間と共にいられるだけでも有難い。それ以上望んでどうしろというのか。

「まるこ、はやくおおきくなる、ねえちやといっしょにいるよい。」

それでも、この優しい幼子の言葉に胸を詰まされるのは、己がまだ人間を捨てられていないということなのだろうか。

そう考えながら、サキは優しくマルコを抱きしめてやりながら、束の間の夢を楽しむこととした。

「ありがとだね。やさしいまー坊が私は自慢で、大好きだよ。」

ニライカナイの住人達と子供14

無事お守りを作り終わったサキは簡単には開かないようにしっかりと縫い付けた後、ティーチとマルコを呼んだ。

「なに？ねえさん。」

いつもと違う、真面目な表情で正座をして二人が来るのを待つサキに、ティーチとマルコは些か緊張した面持ちでその前に座る。

二人が座ったのを確認して、サキは徐に、懐に入れていたお守りを二人の前へ置いた。

正絹で作られたそれは小さな巾着のようなお守りで、紐が付いており、首からかけられるようになっていた。

「こいつはね。お前さんらを守るお守りさ。肌身離さず持つておいで。」

「おまもり？なかに、なにかはいつてるのか？」

「てち坊やのにはセイの爪と私の髪、まー坊のには私の爪とセイの髪の毛さ。お前さん達にはわからないだろうが、それを持っているだけで大抵の獣や妖怪は寄ってこないんだ。」

犬神崩れとなったセイも、妖狐となったサキも妖怪の中では一目置かれる存在である。強さなどではなくいろいろな要素もあるのだが、そんな二人の匂いをさせている子供を如何こうしよう等考えられる妖怪は少ない。

たとえ世界が異なっているとしても、動物は異質な存在を恐れ近寄らないものだ。己の手の届かない場所にいたとしても、これで少しは守ることができるであろうという、せめてもの親心。

二人がしっかりと首に付けたことを確認すると、サキは一つ頷いて

から二人の頭をなでてやる。

「こんなもんで守れるのかと思うんじゃないよ？昔っから伝わる方法なんだから。」

「へえ…ありがとう！ねえさん！」

実際はそんな伝え等はないのだが、妖怪の力関係など説明しても理解できないに違いない。そんな考えをよそに子友達は無邪気に喜んでいた。

「姉さん、あいつらが来たようですよ。」

「おや、ずいぶんと早いお着きなようで……おキ又さん、いるかい？」

「あいよう、ここにいますとも。坊や達を連れて行くんだね？」

「ああ、頼んだよ。」

奥から小さな包みを持ったキ又と貉の旦那が、ティーチャマルコを抱えて裏へと飛び出してゆく。

「なっ？！なにすんだよ！おっちゃん！はなしてくれよ！なんで？どこにいくんだよ！」

「いい子だから黙って行くよ。ここは危ないからね。」

「やー！！ねえちゃ！ねえちゃー！！」

「まー坊！梅吉姐さんのお願いなんだ、あたしらはあんたらを海の祠へ連れて行かなくちゃいけない！」

そんな声が遠くから聞こえてくる。その場にいつの間にか集まったものか、住人たちが普段の人間の姿ではなく本性を現したまま、玄関のほうを黙ったまま睨んでいた。

サキは、黙ったまま立ち上がり、表情を消したまま玄関へと歩みを

進める。

「梅吉さん…大丈夫かい…？今ならまだ引き返せるんだよ？」

「冗談はよしておくれよ。私は腹あ括ったっていったらどう？中途半端じゃなく、まっとうな妖怪になるって決めたんだよ。その方があの子らを守るのにちょうどいい。」

<妖狐という本性で人間を殺す>

それがサキに課せられた試験だった。本来ならばすでに彼女は妖怪なのだが、彼女を良しと思わない者らを黙らせるために用意されたのがこの試験であった。

刀などを道具を使うことなく

その牙で

その爪で

その炎で

引き裂き、噛み砕き、燃やしつくす。

抵抗がないといえは嘘になる。

抵抗があるからこそ、今の今まで中途半端な存在として生きてきたのだ。

老いない己の体を恨み

己より先に朽ちてゆく物（者）を悲しみ

果ては己をこのような生き物へと変えた神さえも呪った。

（でもね……）

人でなくとも、妖怪であろうとも、大切だと言ってくれた。

己らの生きてきた時間からすれば瞬きよりも短い時間

そんなわずかな時間だというのに得た幸福はそれをも凌駕するもの

（もらったものはきっちり返すのが、私の流儀さ。）

素足に下駄をつっかけて、サキは前を見据えて微笑む。

「さあ！とくと見てもらおうか。私が妖狐だと、あの堅物どもに認めさせてやるうじゃないか！」

ニライカナイの住人達と子供15

まだ昼過ぎだというのに雨雲が空を覆い尽くし、あたりは暗く、生ぬるい潮風がティーチの鼻孔を撫った。暴れつかれたティーチはサキから貰ったお守りを握りしめて、家の方向を見つめていた。

マルコもお守りを握って泣きじゃくり、ずっとサキの名前を呼び続けたままだった。

いつしか風が強くなり遠雷の音が聞こえる。

「なんでだよ…。」

「あんたらにやまだ分らないだろうけど、梅吉さんは今危うい立場なのさ。人間を殺す能力のない妖怪はたくさんいるがね、能力を持っていて殺さないのは訳が違うんだよ。」

「ころさない？なにがちがうのさ」

ティーチだって、色々本を読んだり住人の話を聞いていて、妖怪には人間を殺したり食べたりするものがあることは知っていた。

自分達を助けてくれたのは、姐さんがいたからなのだ。キ又だって、濡れ女>だから人間を殺したり生血を啜る妖怪で、たまに<食事>をしに出かけることも知っている。

「何処の世界にも、頭の固い耄碌爺はいるもんさ。妖怪の癖に人間を殺せない人間の心を持った、妖怪のなりそこないが九尾の狐など許せないんだと。」

「散々あの人のおかげで暮らしてこれたって言うのに、恩をあだで返しやがる、どうしようもないやつ等だよ。」

キ又と貉の旦那が吐き捨てるように言えば、マルコとティーチは何もいえない。その原因がもしかしたら自分達なのかも知れないのだ。

すると目の前に岩があり、その影に洞窟が見えてくる。其処へ向かっているようだった。

「ここは、アタシの縄張りでね、奥にはお稲荷さんが奉つてあるのさ。つていつてもあの人を生きながらえさせたお方の残骸を保管してるだけだね。ここなら、めったなことじゃあいつ等も来ないからここに隠れてるんだよ。」

中は暗いかと思えば、先回りしていたのか鬼火達が中を照らしてくれている。奥に行けば天井は崩れ落ちているのか吹き抜けになつており、かなり広い広場になつていた。その中央に大きめの社が建てられていて、そこに二人は下ろしてもらえた。

羽音が聞こえると思えば、真上から烏天狗が風呂敷包みを持って降りてきた。その背中には若菜さんも乗っている。

「おお、童共わらわ、丁度よい。」

「からしゅのおっちゃん！」

マルコが降りてくる烏天狗に飛びついて、それを器用に受け止める彼等は、少々緊張した面持ちだった。

その烏天狗をみた貉の旦那が、訝しげに尋ねた。

「なんだい？上手く事が運んだんじゃないのかい？」

「いや、姐さんは上手くやったさ、だが、あいつらがこつちに向かつてきてやがる。姐さんがあつちに掛かりきりなのをいいことに、童共を始末しようとしてるようだ。」

「なんだつて？！話が違うじゃないか！あいつら…！」

事情を聞いたキヌの髪がザワリと揺れる。すでに人型ではなく本性である下半身が大蛇の姿へと戻つていて、洞窟の出口を忌々しげに

にらみ付けていた。

同じように毛を逆立てた若菜さんの尾が二つに裂け、その身の丈も2倍に膨れ上がる。

ザリザリと岩を引っかくような音、その音が聞こえた瞬間に社の戸を開き、烏天狗が二人を其処へと入れる。一緒に猫又となった若菜さんが滑り込み、しつかりと戸を閉める。

既に子供達も事態を把握しているのか、悲鳴も上げず互いを抱きしめて震えながらも戸を睨みながらお守りを握りしめていた。

「おいでなすったか…」

キヌの声に反応するように洞窟の中の闇がぬるりと動いた。風が辺りを揺らしながら天空へと昇る瞬間に現れたのは、鼠色に斑模様をした狼のような牛程の大きさの妖怪だった。

低く地を這うような唸り声を上げながら、いつでも飛びかかれるような体勢でこちらへにじり寄る姿は異様といえた。

「やっぱり、あんただったんだね…。前々からセイさんを目の仇にしていたもんねえ。」

「黙れ！あんな犬神崩れなど、認めぬ！断じて認めぬ！あの成り損ないの女狐もだ！」

「黙るのはあんたさ！成り損ないだってえ？ふざけんじゃないよお、あんただって散々あの人の世話になっておいて、言うことがそれかい？！」

黒く長い髪を振り乱しながらキヌが斑模様の犬神を睨みつける。貉の旦那は相手が犬では勝ち目が無い為、サキへ伝えるべく別の隙間から外へ飛び出している。

身構えるキヌの周りで同じように烏天狗達が羽を羽ばたかせながら、威嚇をする。

「盟約を違える事の重大さ、知らぬとは言わせぬぞ、犬神い！」

「知ったことか！其処にいる憎き人間を血祭りに上げれば、あの成り損ない共もわかるだろうよ！」

「おのれ…斑尾っ！抜かせえ！」

ニライカナイの住人達と子供16

烏天狗の羽が強く羽ばたかせられれば、辺りの風が渦巻き奔流となつて斑尾と呼ばれた犬神を襲う。しかしその真空の刃は身体に届く前に、斑尾の吼えた声に相殺されてしまう。

その隙を狙うかのように、濡れ女が蛇体をくねらせ斑尾に体当たりを仕掛ける。

それを見て斑尾は牙を剥き出しにして凶悪な笑みを浮かべた。

青味掛かった白い毛並みが今は鮮やかな紅に彩られ、その足元には薄い赤色をした犬神が踏み潰されている。

9本の尾がざわざわとくねり、普段は硝子色の静かな色合いの瞳が憎悪に彩られている。

「よくも私を謀っておくれだね。そんなにこの縄張りが欲しかったか！ 私も舐められたもんだ」

そういうと、飛び掛ってきたほかの犬神の喉笛に喰らい付き、食いちぎる。

サキは今は人の姿ではなく、九尾の狐と呼ばれるものの姿をしていた。青白い毛皮は血塗れていてもなお淡い燐光を放ち、その民家2／3軒はあるかという体軀は雄雄しくも美しい。

「倒した妖怪を食らえばその分力が増す、あんたらが知らないことじゃあ無いだろうに。」

こちらにきた人間を始末したとたん、周りで見張っていた犬神の集団が一気にサキに襲い掛かってきた。しかし、元からの体格差に物

を言わせるサキに致命傷を与えることは出来ない。始末した人間と犬神を喰らったサキは以前よりも妖怪として力が増していた。そしてその後ろで身構える同じく白銀の狼も血塗れになりながら、襲い来る犬神の群れを迎え撃っていた。

「姉さん、ここは自分が抑えます。姉さんは早くあのチビ共のところへ。」

「…頼んだよ。」

自分とほぼ同じような体躯の狼、犬神崩れのセイに声をかけると、追い縋る犬神を蹴散らしながら子供達のいる場所へと駆ける。それを見送ると、己の毛を逆立たせてセイが唸る。力強く地面を抉れば、軌跡を描くように炎が辺りを行き交う。

「あのチビ共を巻き込もうなど愚の骨頂だな。安心しろ、全員残らず喰らってやる。」

滅多に自身の感情で動くことをしないセイではあるが、それでも一緒に住んでいた子供達のことには彼女なりに気にかけていたし可愛がってもいた。

ティーチは何回言い聞かせても、廊下を走り回るしオネショも治らない。それでもセイを「にいちゃん」といつて懐いている。

マルコは泣き虫で、良く転んで頭をぶつけてはそこらへんで大声で泣いている。あの泣き声は耳に痛い、それでもたしなめれば直ぐに泣き止むし、舌足らずな口調で「にいちゃ」といわれれば悪い気もしない。

サキに言わせれば溺愛しているらしいが、それでもこと二人の躰は

きつちりとこなしている辺り、飴と鞭を使い分けて可愛がっているのは明白で自覚もある。

所変わって祠の中で、斑尾がキヌを踏みつけニタリと笑みを浮かべていた。

「人間を守って何が楽しい？我らは人間に仇なす存在だろう？貴様とて、人間を殺しその生血を啜る妖ではないか！人間を襲うことをやめれば力が弱まる、それは摂理！これくらいで倒れ付す貴様は人間に墮落されたのだ！」

「お黙り……！アンタたちに何がわかるってんだい！」

斑尾に言われたことは真実だ。確かに生血を啜っていないキヌの力は弱まる一方。しかしそれでもサキが作ってくれた楽園で、慎ましやかなれど幸福の中生活が出来ていたのだ。

それを壊されそうになったキヌの慟哭すら、斑尾には届かない。

「わかるはずもない、脆弱な人間などにウツツを抜かす女狐や貴様の事などわかりたくも無いわ！安心するがいい、貴様も喰らって我の一部にしてやる。」

胸を踏み抑えられたキヌに抵抗が出来るはずもなく、その喉笛に喰らいつかれそうになった瞬間白い何かが斑尾の腹を抉るようにぶつかっていった。

「梅吉さん！」

慌てて起き上がれば、斑尾と組合い互いの喉笛を狙いあう九尾がいた。血みどろになりながらもその瞳は静かな怒りで光り輝き、対し

て斑尾は先程の体当たりの時に一緒に狐火で焼かれたのか片目が潰れていた。

「おのれええええ！女狐ええええ！！！！！！」

「私を謀って無事で済まされるところで甘いなだよ！この犬っころが！」

尾を全開に広げ燐光を発しながら威嚇をするサキ、こうしてみているだけでも彼女の力が斑尾を圧倒していることが判る。

ニライカナイの住人達と子供17

サキの声を聞いてティーチとマルコは、社の戸の隙間から外を覗き見れば、其処には青い炎と光を纏わせた大きな狐。その尾が9本もあり鼠色の犬に向かって何事か吼えている。

「私の目の黒い内は、あの子等に手出しはさせやしないよ！」

そう叫ぶ狐がこちらを守るかのように社に背を向けていて、マルコはその狐が血に染まっていることに気が付いた。

「ねーちゃ…？あのきつねしゃんは、ねえちゃ？…けがしてる？！」

幼いマルコの目には、返り血で塗れたサキが怪我をしているように見えてしまったのだ。

慌てて社を飛び出そうとするマルコをティーチと若菜さんが飛び掛って取り押さえる。

「まるこ！おちつけ！キヌさんもいつてたろ？！ここにいなきゃだめだ！おれたちじゃ、たすけられないんだ！よわいから！」

泣きながら必死にマルコを抑えるティーチ。自分達がまだ子供で妖怪のような強い爪も、牙も何も持っていない人間の子供だから。この社に隠され守られている。

今ここから出てしまえば、皆の苦勞が水の泡だ。これ以上自分達を慈しんでくれている優しいヒトを苦しめない為に。

涙を流ししゃくり上げながら必死にねえちゃ、ねえちゃ、と呼ぶマルコを、懸命に説得する。

「いまねえさんのところにいったら、ねえさんがこまるんだぞ？ねえさんをこまらせたくないだろう？」

「でも、でも、ねえちゃ、がっ！」

『ありや、返り血さ。あのお方は怪我なんぞしてやしない、坊や達、安心おし。』

突然皺枯れた老婆の声が聞こえてきて、暴れていたマルコも抑えていたティーチも驚いて止まってしまった。そしてその声の方向からは…

「わ…わかなさん？」

『あたしや話すのが苦手なんだ、いいね？ここを出るんじゃないよ？出ようとしたらその尻を引っぱたくからね。』

「はい！」

「よ…よい！」

二又に分かれた尻尾を社の床にたたきつければスパンと大きな音がし、そんなもので叩かれたくはないとばかりに二人はその場で正座をした。

これもセイの教育の賜物か、条件反射なのか。その様子を見て、若菜さんはため息を一つ零し、奥へ行くよう促した。

「女狐えええ！成り損ないのくせに、よくも！」

焼かれた傷が痛むのかしきりに首を振りサキへ唸り吼える斑尾。それに対しサキは双眸を細めて、楽しげに笑んだ。

「その成り損ないに殺されかかってるのはどこのどいつだい？キヌまで喰らおうとしていたようじゃないか。ここの周りにも犬神が多

くいたようだけど、全部私が頂いちまったよ。」

流石に食いすぎたかもねえ…と舌なめずりをしつつ悪びれもせずに笑うサキに、斑尾の毛が逆立つ。倒れ臥していたキヌは既に烏天狗が抱えて社の傍へと避難をしている。

「おのれ、オノレ！よくも我が同胞をおおおおっ！」

悠然と立つサキに向かって、完全に激昂し牙を向いて襲い掛かる斑尾を今度は真横から白銀が襲い掛かった。

一瞬のことであつた、白銀の狼が斑尾の喉笛を食い破りなおも四肢で身体を大地に縫いとめている。

斑尾は四肢を痙攣させながらも逃れようとしているが、次第に齒茎を剥き出した口から舌が力なく零れ、その黄色い瞳が濁り動向が開いてゆく。

「お前で最後だ、斑尾。せめて自分の中でその同胞と再会するかい。」

大きな痙攣を最後に動かなくなつた斑尾を啜えセイがゆっくりと飲み込む。血の一滴も残さぬように。

それが殺めた妖怪への償いだとも言つように。

「大丈夫かい？キヌさんや」

「梅吉さん…ごめんよう…あたしや役に立てなかつた…！」

烏天狗の介抱を受けながらキヌが泣き崩れた。子供の事を任されたというのに、満足に戦うことが出来なかつた事を悔やんでいるのだ

ニライカナイの住人達と子供18

頂垂れるキヌの元へ社から飛び出してきた子供達が抱き付いた。

「坊や達っ！怪我はないね？」

子供達を目に留めるなり安否を気遣うキヌに、子供達は涙に濡れた顔でただただ頷くことしか出来なかった。

「無事なら良かった……」

「皆大したことなく済んで良かったさ。」

サキの声に反応したマルコが弾かれたようにそちらを見れば、先程見た青みがかった白い体毛の九尾と、それよりも二回りは大きい白銀の狼が並んで佇んでいた。

とはいえ、小さいマルコやティーチからは腹しか見えない程に大きい。上を見ようとして仰け反るマルコが、後ろへ引っくり返りそうになるのを慌てて烏天狗が支えてやる。彼等もマルコの後頭部への打撃をこれ以上増やさない為に必死である。

「ねえちゃ、……にいちや…よい…？」

「そうさ。」

目の前の子供達の瞳がこれ以上ないくらいに開かれる。
初めて本性を見たのだ。無理もない。

「おつきい、よい」

「そうだな。」

ティーチなどは、目だけではなく口まで開きっぱなしだ。その目に憧憬が見てとれるような気もするが多分気のせいなのだろう。……しかし。

「まるこ、にいちやくらい、がんばっておつきくなる、よい」
「……ん？」

マルコの言葉に、最初その場にいた大人達は何を言い出したのか今一解らなかった。

思わずサキとセイが目を見合わず。

「ねえちゃより、おつきくなって、しゅごくつよくなる、よい」
「まー坊……？」
「だから、ねえちゃ、まるこの、およめしゃんになる、よい」

泣いて顔をくしゃくしゃにしながら、サキの血にまみれた前足にしがみつく。

初めて見たサキの本性に、マルコは畏怖などよりも、守られている子供な自分への怒りが浮かんできた。たかが四歳といえど、好意を抱いてる相手に守られるのではなく、守りたいと考えるのは男の本能故か……。

実際は、「およめしゃん」発言に託つけて烏天狗達が 男とは何ぞや を説いたせいもあるのだが。

彼等からしたら下手な男（妖怪）に大事な娘を取られるくらいなら、今から相応しく育ててしまえばかりに「逆光源氏計画」を実行しているに過ぎない。

本人達の意向などまるで無視だが、妖怪とは往々としてそういうものである。

「こら、お前まで血塗れになっちまうよ。その手をお放し…妖怪の血は人間には良くないんだよ。お前まで人間の理からはずれちまう。」

唯の人間の血ではない、妖怪の血を浴びてしまえば人間の体にどういった効果をもたらすかわからない。

少なくとも毒にはなれど、薬にはならないことは明白だろう。

「にいちやん…」

「なんだ、てち坊」

「すげえ、かつこいい！！でっけえ！」

「……え…？」

子供達の中でどういう思考回路になっているのか確認できないが、大きい「格好いい」という図式が成り立っているようだった。

セイも血まみれのままで、呆氣にとられたかのように口をパカリと開いてしまう。

人型に戻ったサキは、抱きつくマルコを烏天狗に預けてから、腹を抱えて笑い出す。それに釣られるようにその場にいた大人たちも笑い出した。

「あつはつは！みなよ、セイの顔！あ…まあ、そーいや、これっくらいの子供って、デカイものに憧れるもんだよねえ。ああ、おかしい」

「まったくだ！あ…そーだよなあ。見越し入道の旦那や、キヌを見て平気なんだ、ちいっとデカイ狼や狐みたってなんともないわな」「ちよいと！聞き捨てならないね！見越しの旦那はともかく、なんでアタシなのさ！その羽筆って焼き鳥にしてやるよ！」

ケラケラと笑う烏天狗にキヌが噛み付く。もちろんそれは本気で言

っている訳ではなくじゃれ合いの範囲だ。現に烏天狗は口では怖い怖いといいながらも、キヌを支えるのを止めはしない。

なんだかんだで仲が良いのだ。

そこへ、付喪神や貉の旦那が長持や何やらを荷車に乗せてやってきた。

「梅吉さん、持って来たよ。先発のやつ等ももうすぐ到着するってさあ。」

「師匠、粗方片付けも済ませて来ましたよ。」

住人が次々と祠へとやってくるのを見て、マルコ達は不安げにサキを見上げる。

「ねえさん？なんでもつなんか？」

「この世界は、私等妖怪には住み辛いつてのは話しただろう？これだけ派手に暴れりゃあ、ここにも人間がやってくる。その前に皆で引越しさ」

お前達も一緒にねと言えば、安心したように胸を撫で下ろす子供達に、手ぬぐいで顔を拭ってやってから烏天狗が持ってきた風呂敷包みをしっかりと子供達に背負わせる。

そうしてるうちに皆が準備を整えたと言われれば、再び九尾の姿へ戻ったサキが社へ狐火を点す。

「さ、みんなお行き。急いでおくれ。こういつときの人間は動きが早いからね！」

その声に皆が一斉に炎の燃え盛る社へと飛び込んでゆく。青い炎が燃え上がると飛び込んだものが消えてゆく。

「さ、行くよ。」

「え…ねえさんは？」

「まるこはねえちゃといっしょいく！」

子供達は促されるも其処に佇む二人と一緒にいいと、ぐずり始める。それをサキは表情を変えずに優しく諭す。

「この回廊は私が維持してんだ。先にお行き。いい子だから。さ、キ又さん」

「あいよう。」

必死に離れまいとしがみ付く子供達を捕まえて炎へ向かうキ又。

「はなせよ！にいちゃん！ねえさんー！」

「いやあああ！ー！やー！やー！よいつ！ねえちゃああああつ！！」

マルコがサキへ必死に幼い手を伸ばすも、それすら炎に絡めとられる。

熱くもないその炎に巻かれながら、マルコとティーチが最後に見たのは青い炎を身に纏い夕闇の中佇む美しい2頭の獣の姿だった。

ニライカナイの住人達と子供19

炎に巻かれてから意識を失ったのか、ティーチが気が付いたのは見知らぬ海岸だった。直ぐ隣にはマルコも倒れていて。

「まるこ！」

慌てて抱き起こせばうつすらと瞳を開く。泣きはらしたその目はどこか虚ろで、それでも辺りを見回してサキの姿を探す。

「てーち…？ねえ、ちゃは？」

「いねえ…みんなも…みえるはんいじゃ、みんなみあたらねえ」

捨てられたのではないのはわかる。おそらく自分達が逸れてしまったのだ。

皆が持たせてくれた荷物は幸いちゃんと持っていたし、姐さんが作ってくれたお守りもしっかりある。

「まるこ、いいか。よくきくんだ」

「てーち？」

マルコの肩をしっかりと支えて、ティーチは何かを決心したように海を見つめる。

「つよくなつて、だれにもまけないくらいになつて、ねえさんたちのところへ、かえるんだ。」

「かえる…？」

「おう！おれたちは、ヒトだからよいけど。つよくなったら、きつとねえさんたちといっしょにいられる。」

それは、幼い子供達にとっての唯一の希望。もっと大きく、強くなればあの人たちと一緒にいられる。最低でもあの犬の妖怪に勝てるくらいにならないと、そばにいられないと。

「つよく、なつたらねえちゃ……」

「セハツ！まるこ、おまえ、うめきちねえさんを、よめさんにするんだろ？おんなよりよわいおとこなんて、きらわれちまうって。だからいっしょにつよくなるう」

「なる……！まるこ、つよくなって！むかえにいくの！」

キ又達が語り聞かせてくれたお話でも、天女をおいかけて男が天界へ行っていた。今は無理でも大きくなったら迎えにいける。それは幼いマルコにもわかった。

「なんだあ？チビども、こんなところで何をしてる？」

二人で目標を決めていた時に後ろから声かけられる。慌てて振り返れば、入道のように大きな男がこちらを見ている。白いひげが特徴的な男で、今までのティーチ達なら怯えるしか出来なかった。

しかし、幼いながらも決意を秘めた子供達は怯える事無く男を睨む。

「あんたにかんけないだろ。」

「グラララ、面白えガキ共だな。お前等孤児か？」

「だつたらなんだってんだ。へんなひげしやがって！」

威勢よく言い返すティーチに、無言のまま睨みつけるマルコ。それ

をみた男はニヤリと笑ってこう言った。

「本当に面白い坊主共だな。おれと来るか？俺あ、エドワード・ニユーゲードってもんだ。」

そして、運命の齒車が回りだした。

ニライカナイの住人と子供 F I N

ニライカナイの住人達と子供19（後書き）

読んでいただきました皆様には心から最大の感謝を。

これより以降は番外編と第2部が始まることになります。

突っ込みどころ満載の、自己満足的な連載ではありますが、これからもお付き合いいただければ幸いです。

番外編 端午の節句

季節は皐月、新緑は濃い色合いへ変化し、日差しも強くなり初夏と言って良いほどに気温が上がる日も増えてきた。

そんなある日、珍しく外出をしていたサキは、新聞紙に包まれた大きな包みを持って帰宅した。それを見つけたマルコは、まるで親を見つけた子犬のように喜んで駆け寄っていく。その後ろから一緒に遊んでいたのであろう古狸の旦那とティーチが歩み寄ってきた。

「ねーちゃー！おかーりなしゃーい、よーい！」

満面の笑みで、その足元に纏わりついてちょこまかと歩くマルコの姿は、金髪がふわふわと揺れるのと相まって、刷り込みをしたひよこのようにも見える。

「まー坊、ただいま。良い子にしてたかい？ああ、古狸の旦那、明日は端午の節句だろう？悪いけれど2〜3日は我慢しておくねなとみんなに、伝えておいてくれないか。後で詫び代わりといっちゃなんだが、上物の酒を届けるからさ。」

「それくらいお安い御用だ、梅吉さん。ちょっくら行ってみんなに伝えてくるよ。てち坊や、まー坊、悪いが今日からしばらくは遊べないからな。悪戯はいいが程々にな！」

そう言いながら古狸はティーチの頭を撫でまわしてから、ほかの住人の住んでいる長屋へと駆けて行った。その様子を少し詰らなさそうな表情で、ティーチが見送る。

「なんで、たぬきのおつちゃんたちは、おれたちとしばらくあそべないんだよ。つまらねー。」

気に入らないのか頬を脹らませ、足もとの小石を蹴りながらサキのところへ歩いて行く。その顔のまま着物の袖を引いてサキへ疑問をぶつけた。

「うめきちねえさん。なんでみんなは、おれたちとあそべないんだよ。ダンゴノセツクってなに？」

「だんごって…だんごじゃなくて、たんのせつく、だよ。てち坊や。お前さんたちは人間だからねえ。魔除けをして子供の健康と成長を願うおまじないをするのさ。ここに住む大抵の住人は苦手なものだからねえ。しばらくここに寄りつかないよ。なに、二三日で元に戻るんだ、代わりに御馳走つくるから我慢おし。」

御馳走と言われれば子供も現金なもので、掌を返したように機嫌を直してしまう。

兄貴分の機嫌が良くなったのを見て、マルコも嬉しくて仕方ないのか、サキの着物の裾を掴んで歓声をあげる。

「セハツ！ごちそうかぁ、たのしみだなあ。でも、へんなおまじないやるんだな。こっちって」

「おじまない？」

「おまじない、ね。まあ、今から千年くらい前から続く行事だからねえ。多少形式が変わってるらしいが、せつかくだからね。私等があんた達の幸せを願うのは当然だろう？皆家族みたいなもんなんだ。参加出来ない連中もちゃんとして長屋で願ってくれるから安

心しな。」

こんなに大勢で祈るんだ、妖怪の祈りだって神様が聞き届けてくださるだろうさ。

そうやって、荷物を縁側に置いたサキが二人の頭を撫で回した。

それを嬉しいような、気恥ずかしいようなくすぐったいようなまぜこぜな感情を上手く表現できず、照れ笑いで子供達は誤魔化した。

翌日、早朝からサキは大忙しだった。

何せ元々死人で犬神崩れとして蘇った妹はこういった行事には一切参加が出来ない。参加したら最後、己まで浄化されてしまう。長屋の住人もそういった怨念から生まれた者がいるため、敷地内の奥の奥でじつと終わるのを待っていた。

とはいえ、ちゃんと前日に酒を用意しているので、子供達の健康を願いながら酒盛りをしているのだろうが。

めでたい事だからと、台所で付喪神と一緒になって育ち盛りの子供達へのご馳走を作るべくあちらこちらへと立ち回っている。

そういったモノに左右されない者も多くいるので、せっかくだからと縁側から見える位置に大きい鯉のぼりを飾ってやるものもいたし敷地内の竹藪へ夜も明けぬうちから筍を掘りに行ったものもいる。

海へもぐるものの出来るものは、大きな鯛を生け捕ってきたし、ある者は寝かせて置いた自然薯を持つてくる。

それ以外の者は子供達が退屈しないようにと、色々な話を聞かせてやっていたりしていた。

長い時間を生きていく彼等にとって、こういったちよつとした事でもお祭り騒ぎのようになってしまふ。それが大切な大切な子供の為となればなおのこと。

「セハ！おれ、すいぐんのはなしがききたい！」
「まゆこも！」

海が近いせいもあるのか子供達は事のほか水軍の話を楽しんだ。

水軍は現在で言うところの海賊なのだが自分達を酷い目に合わせたのがその海賊だというのに、そんなことはすっかり忘れてしまっているのかと、語り部達も笑った。

楽しい話に気が付けば辺りはすっかり暗くなっていて、そして料理が出来上がれば、普段の食卓ではない大人数用のテーブルがだされ、その上に乗り切れないほどに並べられる。

弟子と名乗る女衆は綺麗に着飾って音楽を奏でているし、男衆もあちらこちらでそれに合わせて踊りだす。明かりをつけなくても狐火や鬼火がやわらかく辺りを照らしてくれる。

人間の姿をしているものももちろんいるのだけれど、小山のように大きな入道や、大きな蛇の下半身をもった女のヒト、一般的に禍々しいと言われるものも口々に子供達の健康を願う口上をあげてくれる。

姿形は怖いかもしれないけれど、それでもティーチやマルコを「てち坊、まー坊」といって可愛がつてくれる彼等に、無邪気に喜んで彼等に抱っこをせがむマルコ。ティーチは情深い彼等に嬉しくて涙を零して、それをこまかすようにご馳走に齧り付いた。

柏餅を齧りながら、ジュースを飲む子供達。その周りで騒ぐ妖怪た

ち。そのちよつと怖くて優しい夜の事は、いつまでもみんなの心の中に残った。

色々小話詰め合わせ1（前書き）

ちびっこ時代の小話を詰め合わせています。

色々小話詰め合わせ1

1・着ぐるみパジャマ

秋も過ぎ段々と肌寒くなってきた頃、すっかり屋敷での生活に慣れたマルコが梅吉にしがみ付いたまま、泣いていた。

「うーゆ…いちゃーよい…」

「こんなに涼しくなってるのに、腹出して寝てるから腹痛になるんだよ…まったく。腹巻きさせても寝てる間にはずしちまうし…どうしたもんか。」

そう、いくら涼しいとは言え寝ているうちに布団を蹴り飛ばしてしまっ為、マルコやティーチはしょっちゅう寝冷えをしておなかを壊していた。

それを何とかしようと、腹巻きをさせても寝ている間に、器用にはずしてしまい、朝にはお腹をだして寝ているのだ。血が繋がっていないとは言え、この二人の子供はやることなすことが良く似通っていた。

温かい日本茶を飲ませて腹をさすってやりながら寝冷え対策を考え込んでいると、そこへキヌが大きな袋を抱えてやってきた。

彼女はたまにあちらこちらへふらりと出かけ、しょっちゅう何かしらの土産を持って来るのでマルコとティーチはかなり楽しみにしていた。

「梅吉さんいるかい？江戸のほうへ行ってきたんだが、いやあ、あつちは泳ぐものじゃないね。そこかしこへドロだらけで息がつまっちゃう。」

土産持つて来たよ、と居間へ入れれば腹痛に泣いているマルコの姿。それをみて合点がいったのか、キヌが苦笑いをしながら包みを開いた。

中には黄色や白などの色合いが鮮やかな布が入っている。思わずサキが手に取り広げてみれば、それは子供用のいわゆる着ぐるみ状の寝巻きであつた。

「キヌさんや、これは？」

「ほら、坊や達寝相が悪くて腹冷やすつていつてたじゃないかあ。向こうで子供服売ってる店の人間にそれを言ったら、こんなのはどうだ？つて言ってくれてねえ。色々あつたから買つてきたのさあ。」

確かに着ぐるみならばお腹が出る事無いから、子供にはいいのだろう。キヌが広げた所謂着ぐるみパジャマは何種類もあり、猫や犬、ペンギンにキツネというものもあつた。

「きちゆねしゃん、よい！まゆこ、これりえ！こえ！ねーちゃ！」

「セハ！おもしろいなあ。これなら、おなかださないでねれるのか？おれ、はらまきつて、はらがくるしいから、きらいなんだよな。」

キツネの着ぐるみを見た途端ご機嫌になつたマルコが、必死に手を伸ばして、これがいいと自己主張を始める。

ハイハイ、と梅吉が着せてやれば、嬉しいのか居間の食卓の周りをはてばと走り出した。子供用とは言え小さいマルコにはまだ大きかったのか、尻尾を引きずり、よたよたとしているようにしか見えないが本人がいたくご満悦のようだ。

「おやおや、子狐の出来上がりだ。」

デフォルトされたキツネのパジャマは黄色い色でバランス悪く歩くその姿は、子狐というよりも生まれたてのヒヨコと表現したほうがしっくりくるのだが、マルコはキツネに異様なほど執着を見せる為一応<子狐>と表現しておく。

梅吉が九尾の狐のため、幼いながらも自分の大好きな人とお揃いにしたという気持ちがわからないわけではないから。

「おれ、これにしようかな。セハっ！ジャンとおそろいだ！」

ティーチはジャンとお揃いということと犬を選んだようで、キヌに手伝ってもらって着替えていた。幼い子供の割りにお腹だけが出っ張った栄養失調の典型的な体型かと思いきや、どうやら生まれつきのものらしく着ぐるみの腹が出っ張った犬になってしまった。

「……なんか、これってたぬきのおっちゃんみたいだな…。ジャンとおそろいにはみえないや。」

「…っぶ！っあはははははは！自分で言うかい？！」

「たぬきのやつある？」

「あるけど…着るのかい？」

「うん、きて、おっちゃんたちにみせてくる！」

ティーチの言葉に笑いながら一体どこから持ち出したのか、カメラで子供たちの写真をしつかり撮っているキヌが、しつかりペンギンやウサギ、イチゴなどを着せてく子供たちの思い出>と称しアルバムをしつかりと作成していた。もちろん猯夫婦の本性である狸姿とティーチと一緒に撮ったものも添えて。

遠い未来、ティーチとマルコが大人になり、それを持ち出してきた梅吉のおかげで、白ひげの乗組員達が大笑いしたのは余談である。

2・オネシヨ

「……ご、ごめんな、さい…」

縁側に正座をしたティーチが、泣きべそをかきながら梅吉に謝る。と、いうのも縁側から見える物干し竿には敷き布団が干され、その真ん中は濡れていた。所謂オネシヨというものである。

「てち坊や、なんで夜中に厠行きたいなら皆を起こさないんだい？ 声をかけりゃ、ジャンや若菜さんだって着いてきてくれるし、そこらを散歩してる長屋の連中だって付いて来てくれるだろう？」

子供が幼いうちはこういったこともあるものと解っている梅吉達は、オネシヨくらいで怒ったりはしない。だが、なぜ厠に一人で行くのが怖いなら、他のものについてきてくれるよう頼まないのかと問いただしているのだ。

妖怪というものは夜に行動をするものがほとんどなので、声を掛けてくれれば皆が、なんだかんだと世話を焼いてくれる。だということになぜ嫌がるのか解らない。

「だって…」

「なんだい？ 怒ったりなんざしやしないよ。話してごらん。」

ちらちらと、梅吉のほうを伺い見るように上目遣いでみてる幼子に、梅吉は首をかしげた。しかし、辛抱強くまっていれば、ティー

チがクチを開いた。

「だって、ろうかでて、そこにあるだろ？ いったいいったんだけど、くらくて、おつこちそうになったから……」

「だったら、明かりをつけておくから、それなら大丈夫だろう？ ほかには？」

この屋敷は元々が古い作りのため、トイレが外に別の小屋で作られている。所謂汲み取り式の為、幼い子供は足を踏み外せば便器に嵌ってしまうのだ。

暗くて足を踏み外すというならば、明かりが付くようにしておいてやればいいし、子供用に踏み板を大きくしてやることも簡単だ。そんなことは訳も無いという梅吉にティーチはクビを振って見せた。

「どうしたんだい？」

「それだけじゃなくて、からすのおっちゃんたちが……」

「烏天狗？ クロウとコスケか。あの二人がどうかしたのかい？」

話を聞いてみれば、この屋敷の裏にある森を根城にしている烏天狗の名があがり、訝しげに梅吉が尋ねる。

「おっちゃんたちが……」

「ねえ、てち坊、今夜はから揚げと、水炊き、どっちがいいかねえ？」

話を聞けば、わざわざ皆の手を煩わせるのも、と一人で厠へ行っていたのだが烏天狗が暇つぶしにと、明かりをいきなり消したり、暗がりから子供を脅かしたりと散々悪戯をしたために夜の厠がトラウマになっていた。

そんなことをされれば、当然夜中に起きるのを嫌がり朝まで我慢を
してしまうだろう。そして堪えられずにオネシヨをしてしまう。
事の真相を聞けば、梅吉は笑顔で立ち上がり、欄間に掛けてある愛
用の薙刀を片手に外へと出て行き、着物の裾をたくし上げて、烏天
狗を追い掛け回す梅吉にティーチは呆然としながらも憧れの眼差し
で見送るしか出来なかった。

「待ちなあああああ！この烏共おおお！」

「待てっ！話せば解る！わかつぎやあああああああああつ！
！！」

「今日という今日は、許せないねえ。覚悟おし！」

「クロウー！梅吉！待て！我等が悪かった！だからっあああああ
あああああつ！」

「うめきちねえさん、すげえ…かつこいい…」

こうして、この日以来ティーチは夜中に廁へ行くために梅吉がキヌ
に連れ添ってもらい、オネシヨをすることはなくなったという。

閑話 IF未来設定 ようこそ楽園へ（前書き）

こちらは長編「お気に召しませ」の未来設定となっています。

しかしこちらはIFですので、必ずしもこうなるといつわけでは
ありません。

今回ヒロインは出てまいりません。

閑話 IF 未来設定 ようこそ樂園へ

「なあ、そっぴやお前らの恩人ってどんな奴よ？」

グランドラインの中にある小島、その中の歓楽街の店でお茶を飲んでいたマルコとティーチへ四番隊隊長であるサッチが唐突に尋ねた。

「んん？恩人って…ああ。あの人のことがよい」

彼は以前から、マルコとティーチが海賊になる切欠となった恩人なる人物のことが気になっていた。どこで出会って暮らしていたのかは知らないが、二人が言うには「あそこは、ニライカナイって場所なんだ。」としか言わない。

しかし、このグランドラインでさえも、そのような地名は聞いたことがない。そこで直接聞くことにしたらしかった。

ブラックのコーヒーを飲みながら新聞を読んでいたマルコが、尋ねられたことに対し一瞬考え込むようなそぶりをしてから答えた。

その目の前で、ティーチがお気に入り入りのスイートポテトパイを頬張っている。

「まあ、なんとも表現し辛え人だな。中途半端なようで中途半端じやねえ。鬼みてえに怖いが、同じだけ優しい。」

「なんだそりゃ。女か？」

「一応…2人とも女だった…はず。うん、間違いなく女だな。」

一緒に風呂入ったことあったしな、一方的に洗われた記憶しかないけど。とティーチが事も無げに言えば、マルコが懐かしそうに頷き、サッチは眼を見開いた。

「何、お前ら女に風呂入れてもらってたのか？羨ましいじゃねえかって…じゃあ、いまじゃけっこうイイ年のババアか。」

美人は美人でも昔の美人は俺の範疇じゃねえんだよな。と顎を撫で付けながら呟く。

「んな事、あの人達の目の前で言ってみろよい。サッチ、そのリーゼント髷られて頭から食われちまうよい。」

「そうだな。バリバリと食われるな。下手したら一口で終わるかも知れねえなあ。なんせにいちゃんはマジで怖いし。」

呆れた目線でマルコとティーチが言うのに、サッチが笑いながらそれを否定した。

「何言ってるんだよ。頭から食うってどんだけデカイバケモンだよ。俺あ天下の白ひげ海賊団四番隊隊長のサッチ様だぜ？それくらいじゃやられないってーの。」

しかも年寄りだろ？と笑い飛ばすサッチに、二人は視線を合わせて同時にため息を吐く。

「あの人達はな。元ドラム王国にいるDr・クレハの2倍は最低でも生きてて、なおかつ若いんだよ。にいちゃんは、まあ同じくらいかもしれねえけど。」

「俺達があった時点で既に300歳は超えてたはずだねい。それでも見た目は変わっちゃいないらしいから、今でも綺麗なままでゲイシヤをやってるはずだい。」

「マルコは昔からあの人にベツタリ甘えてたもんな。三つ子の魂100までだっけ？相変わらず一筋か。」

「愚問だらうい。」

「ちょ… ちよつとまで。一体どんなやつだよ。ほんと」

300年以上生きる生物など、グランドラインでも珍しい部類で、なおかつ不老となればお宝級だ。しかも… ゲイシャ…？そこでサッチは、いぶかしげな表情をして、首をかしげた。

「ん？ゲイシャってあれだろ？この島にもいる娼婦だろ？お前ら娼婦に助けられてたのか。」

「……あゝあ。サッチ、お前言っちゃいけねえこといったな…。」
「まったくだない。サッチ、嬉しいことにそのフランスパンの寿命も潰えるよい。」

「なんだよ、それ?! やめろっこええこと言うなよ!」

これは俺のポリシーだぜ?! と思わずサッチは己の髪をかばう仕草をする。それに対してマルコは、少々冷たい、むしろ戦闘をしているときのような厳しい表情でサッチを睨んだ。

「いいかい、ゲイシャってのはない、サッチ。芸をうるからゲイシヤであつて、色を売るのはゲイシャっていわねえんだよい。そこらの娼婦と一緒にすんじゃねえよい。今度そんな事言ってみろい。その頭のフランスパンを引きちぎって海王類の餌にしてやるよい?」

そのときは、そこで話が終わったのだが、マルコとティーチはその後思いもかけない出会いをすることになる。

「ははあ… 悪魔の実を食べたら化け物… でございますか。いや、これは面白い。どちらにいたしましても根本は同じ人間でございますのに。」

この島で唯一の宿泊施設に泊まった際、そのの妙に恰幅が良く、眼

の周りが隈なのかいささか黒ずんだ支配人にそんなことを言われた。

「この島では、悪魔の実を食べていようがいまいが、関係ございませんよ。まあ、部屋の内装は少々異なりますが。手前共にはどちらであつてもお客様でございますからね。ああ、この島には能力者は一人もおられませんよ。」

能力者用の部屋には、極浅い浴槽が備え付けてあるらしい。希望者にはシャンプーなども水を使わずに洗えるドライシャンプーに取り替えるらしい。

この島のログは20時間必要とのことで、せつかくだからと一晚厄介になることとなった。

「なあ、なんでこの島の連中は能力者をこわがらねえんだ？能力者は大抵海賊や海軍だろ？一般人からしたら、やっぱり怖いもんじゃねえのか？」

無邪気にエースがそんなことを聞けば、部屋に案内をするくナカイは苦笑いをしながら答えてくれる。サッチがさりげなくナンパをしようとしているが見事にスルーするあたり見事といえる。

「ああ、なるほど。まあ、そうでございますねえ。この島が海賊に襲撃でもされましたら、その理由がよくお分かりになるかと存じますよ。」

「襲撃？！あぶねえじゃねえか。まあ、白ひげがいるところにそうそつくるわけ無いだろうが。」

「いえいえ、よくあることでございますし、それにそれが一番わかりやすいのでございますよ。」

そんな話をした夜に、早速島が襲撃された。見える旗はグランドラ

インでも4000万程度の賞金首で、船員の数だけでどうにかまかなっているような海賊団だった。

最初は白ひげの面子が出ようとしたのだが、この島は白ひげの縄張りではないし、自分達の面倒は自分達で見れるという島の長老に言われてしまい、出れなくなってしまうた。もちろん船に被害が無いように居残るのは問題ないが、手出しだけはしてくるなと釘を刺される始末だ。

島の住民が嬉しそうに海岸へと集まっていく、大人も、年寄りも、子供までも。全員武器らしいものは何も持っていない。

「久々の運動だねえ。」

「まったく。今度はどれくらい楽しめるのやら…」

うふふ、あははと和やかな会話が交わされる。今この島は海賊に襲撃されているというのに、この和やかさはなんなのだろう。

「この島は変わってるなあ？マルコ」

サッチが海岸から少し離れた所で酒瓶を片手に話しかける。マルコとティーチは興味がなさそうに座り込んで辺りを眺めていた。

すると、海岸へ続く道にある集団があわられた。皆一様に地味な色合いの着物を身にまとい、羽織という上着を羽織っている。その上着も黒っぽい地味な色ばかりだというのに、その集団の先頭に立つ一人だけが眼にも鮮やかな桔梗色を身にまとっていた。

「おお、与一姐さんらの到着だ。」

「やっぱり粋だねえ。ごらんよあの気風の良さ」

等と口々に島の住人が憧れを込めてその集団を誉めそやす。それを見ていたサッチが首を傾げる。

「なんだあ？ありや、ゲイシャの集団じゃねえか。」

「ん……？」

サツチの指差す方向にマルコとティーチが首を向ければ、ビシリと体を硬直させ眼を見開いた。

「ちょ… ちょっとまでよい。ありやあ…」

「間違いねえ、あれは… 姐さんだ。なんでここにいんだよ?!」

「へ？お前等知り合いか？」

慌ててティーチとマルコがゲイシャの集団へ駆け寄るのをサツチはあっけにとられる様に眺めていた。

「与一姐さん!!」

ティーチが桔梗色の羽織を羽織ったゲイシャに声を掛ける。すると驚いたように首を傾げる与一姐さんと呼ばれた女が訝しげに返事を返す。

「ええ、確かにアタシは与一ってえ名前ですがね。旦那方あ、失礼ですがどうかでお会いしたことありましたかねえ？」

「俺だよ！ティーチだ！こっちはマルコ！覚えてないか？ほら、あの家で世話になった！」

「え… ティーチとマルコって、あら、やだよ。あのおチビさん達かい？！暫く見ないうちにでっかくなっただねえ？」

思いがけず知り合いに再会した為に、与一だけが二人を連れて座敷へ戻る。

完全に置き去りにされたサツチであったが、その後に見た驚愕の真

実にその島でナンパ行為等を止めてしまった。

そう、この島はマルコやティーチが世話になったくニライカナイの住人達への樂園だった。

悪魔の実の能力者を恐ろしいと思うはずもない、人間というカテゴリーに区分されない異世界でいうなればく妖怪くと称される生物の縄張りなのだから。

「なあ、サッチ！頼む！俺の飯をダイエットメニューに切り替えてくれえええ！！！」

「はあ？！なんだよ、行き成り……」

「その腹がバレたら蹴り殺されるよい。姐さん達、主に兄さんに。」
「俺っ俺まだ死にたくねえ！頼む！！！」

そして翌日、本来ならばこの島で見た記憶は宿の支配人の手配で改竄される予定だが、マルコやティーチがいるならば問題なかうと不問にされた。もし辺りに吹聴したとしてもマルコやティーチの匂いを追って根源を断つのは容易いことであるし、吹聴したところで誰も信じないからだ。そして出航してから、サッチに必死に泣きつくティーチの姿が見られた。それを白ひげのクルーたちは不思議そうに遠巻きに眺めている。

出航前に、この島の住人が見送りをしてくれたのだが、その際に与一がこう言ったのだ。

【暫く見ないうちにでかくなったのはいいけどもねえ。ちゃんと鍛え上げてあるまー坊はともかく……てち坊、お前さん、梅吉姐さん達がその太鼓腹をみたら何て反応するだろうねえ。」

まだこちらに来ていないとはいえ、あの人がそういう体型を一番毛

嫌いしてんのを知ってるだろうに。と言われたときのティーチの顔色は蒼白といってもいい。

「あー…そういうことか、わかった！このサツチ様がどーにかしてやろう！」

「サツチ！本当に恩にきる！！」

「それもそうだけどよい、ティーチ。酒とオヤツ止めて運動しねえと意味ねえよい。」

そんな兄貴分のティーチを見て、マルコはため息を溢した。今更減量をしたからといって、現在のティーチを与一が見てしまっているのだ。まだ二人がこちらに居ないとは言え、遅かれ早かれあの二人に報告が行くのは確実だろう。

それでも何もしないよりはマシかもしれないが、本当にマシなだけで、どのみち制裁が待っている事には変わりはない。

（あ…身体を鍛えておいて本当に良かったよい…）

そしてティーチの、このダイエットが成功したのかどうかは、わからない。

FIN

閑話 IF未来設定 ようこそ樂園へ（後書き）

こちらは元々知り合いへの捧げ物でした。

実際の設定とはかなり違っていますが、お楽しみいただければ幸いです。

第2部 君が為惜しからざりし命さへ（前書き）

第2部開始です。

第2部 君が為惜しからざりし命さへ

蒼い、青い、碧い

海の色ではない

空の色ではない

優しく、包み込む、アオ

白い、シロイ、しろい

雲の色ではない

綿の色でも、絹の色でもない

何処までも恐ろしいまでの強さの象徴

幼い頃の記憶を掻き集めなくとも思い浮かぶ美しい2頭の獣

あれから既に20年以上経とうとしても、マルコとティーチは決し

て忘れないと誓った。

「おい、マルコ！オヤジがよんでっぞー！」

「…ああ、今いくよい。」

あの幼い頃に出会った、エドワード・ニューゲードが率いる白ひげ海賊団に入ってからもうすでに20年以上が経過していた。

あれから身長も伸び、筋肉も付け、幼い頃に良く頭に拳骨を落とされていたあのヒトよりも、大きくなったと思う。強さはわからないが、少なくともあんなパワーはないけれど。

ティーチもマルコよりも大きくなって今では344cmにもなっていて、ほんの少しだけマルコは悔しいとも思うし、羨ましい。しかしあまり大きくなっても身長差が出来てしまう為今のままでもいいかと思い直すようにしていた。

最初のことは反発して暴れまくっていたが、今では白ひげの事はオヤジと呼ぶくらいに尊敬しているし、父親として好意もある。でも本当の家族のことは、いまだに誰にも言っていない。

<人間が来る前に、逃げるんだよ>

あの言葉は、未だに二人の心の中に残っている。そういうものが存在するということは、公言するべきではないのだと暗に自分等に表示していた気がしていて、どちらからとも無く口にしなのが暗黙の了解となっていた。

「オヤジ、呼んだかよい？」

「おう、気候が安定してきたってんで次の島が近えそうじゃねえか。ログがさっさと溜まる島ならいいんだがな。」

「そつだねい、一応島の規模とログの長さを下調べしてくるよい。」
「おう、行つて来い。怪我しねえで無事もどつてこいよ」

白ひげの言葉に、マルコは苦笑を漏らしながら偵察をするべく部屋を出る時に振り返りこう言った。

「オヤジ、俺あ不死鳥だい。怪我なんざあつという間に治つちまうよい。心配するだけ無駄だい。」

その自嘲めいた言葉にも聞こえるそれに、白ひげは眉根を寄せたままマルコの背中を見送った。

実際マルコは自嘲などはしていない。

最初は九尾になれる実でなかった事に落胆したものだったが、蒼く熱さのない炎は彼の人を思い起こさせるものであつたし、<不死鳥>はまるで<ヒト>ではないナニカ>になつたような気分にもさせてくれる。

少しでも彼のヒトに近づきたいと考えるマルコからすればどちらも有難いものだった。

同じく、ヤミヤミの実を食べたティーチも人外といつていいだろう。実を手に入れたのはサッチだったが、マルコとティーチは土下座までして譲ってもらつた。

本来なら、実を手に入れた者が食べる権利を得るのだが、恩人のために何としても強くなりたいと渴望する二人に、結局折れたサッチが譲ってくれたのだ。

その代わり暫くオヤツは抜きになつたが、それは名目上でちゃんと裏でティーチの好物のチェリーパイをくれたりしていた。

「ティーチ、これからちよいと出てくるよい。」

「お、偵察か？」

甲板へ出ようとしたところで丁度出くわしたティーチへ、これから偵察へいく旨を伝えれば頷きながら見送ってくれる。

それは昔からの習慣で、偵察へいくマルコをティーチは仕事がない限り見送ってくれる。二人は血の繋がりは無いが兄弟で、運命共同体のようなものだ。

白ひげの元に集った兄弟達とは違う、本当の兄弟。この絆の強さは白ひげでさえも知っている。

燐光を発した蒼い羽が燃え上がりマルコの姿が人から不死鳥へと変化する。ティーチはそのマルコの姿を見るのが好きだった。見るたびに、あの人達に近づいたと感ずることが出来るからだ。

そして、マルコが舞い上がり虚空へ消えてゆくのをいつまでも見守っていた。

君が為惜しからざりし命さへ2

マルコが偵察へ出かけてからしばらくして、ニュース・クーが新聞を配達しにやってきた。それを受け取りお金を渡してから、何気なしに手配書を開いたティーチの双眸がまん丸に開く。

「はあ?! ちよつ! マルコー!! 早く戻ってこーい!!!」

思わず握り締めた手配書、そこにはかつての記憶のままの2頭の獣の姿。

<毒婦・ウメキチ 3億4千万ベリ>

<魔狼・セイ 1億9千万ベリ>

罪状：天竜人殺害

大きさ、強さのスケールのでかい二人(?)は、犯す犯罪の規模も(ついでに懸けられた金額も)やはり半端なくでかった。

「ってまでよ...? 本性で賞金ってことは人型だと問題ねえってことか?... うん、あの二人なら完全犯罪もやってのけるよな。うん。」

思いも掛けずに恩人の手配書を見てしまったため、いつになく取り乱してしまったティーチだったが、この手配書であの二人が捕まる確率が低いことに気がついたのだ。しかも姐さんにいたっては本名である<サキ>ではなく通り名だ。

いつもあの姿でいれば目立つことこの上ないし、潜伏するにも場所に困る。そうなれば必然的に人型になる。

資金が心配にもなるが、己らに持たせてくれていた荷物は服の他に、

金の板や水晶、瑪瑙や珊瑚といった宝石などだった。

それは金だけは現金に換えたが、その他の石は今も使わずにとっておいてある。つまりそれくらいなら、簡単に手に入ることなのだろう。

今思えば、地上げ屋の事務所からもお金を奪ってたりいろいろやったから、あの時家に押しかけてきたんだろうなと思う。

<人で無し>つまり人間ではないから、人間の法に縛られずに犯罪にも手を染める。とはいえ、あの人間たちは悪人だったらしいから姐さん達はこちらで言うところの「ピースメイン」に該当するのであろつ。

（馬鹿騒ぎや酒が好きで、夜通し騒いだりしてたもんなあ…。そのくせ餓鬼だった俺等と一緒に頑張ってたし…）

思い出せば思い出すほど、あの樂園にいた妖怪達は海賊に、この白ひげ海賊団と良く似ていた。血の繋がりがなくても家族のように身内に甘く、同じだけ身内の敵には厳しく。まさに白ひげの考えのそれ。

この白ひげの<家族>が心地いいのは、この家族の関係と似ているからだ。そう思うと、無性に樂園の家族に会いたいという衝動に駆られた。

（そついや、樂園つて意味教えてくれたのはキムの兄ちゃんだったなあ…）

キム兄ちゃんと懐いていたのは、赤い髪をした青年で鶏が苦手な精霊だった。オキナワというところから移り住んできたらしく、庭に植えてあるガジュマルの木の下でよく昼寝を一緒にしたものだつた。本性はガジュマルの木精で、キジムナーというらしいが子供にはうまく言えなかつたということ、<キム兄ちゃん>と呼ばせてもら

っていた。

あの家は、自分たちにとっての<ニライカナイ>なのだとも教えてくれた。ニライカナイは理想郷、楽園なのだと聞いて納得してしまったのだ。

生まれた島で孤児となり、マルコと一緒に残飯をあさる日々。孤児院はあつたけれどそこは裏で奴隷販売をする競り会場の隠れ蓑だった。大人たちに見つからないように生きなければならぬ日々、目に見える大人はすべて敵だった。

そして島がモーガニアの襲撃を受けて壊滅し、大時化であの海岸へ流れ着いた。

ご飯がたくさん食べられて、みんなに可愛がられて、叱ってくれてたくさん遊んで…人間はティーチとマルコしかいなかったけれども、人間でないものたちから受けた愛情は本物だった。

「会いてえ…なあ」

手配書を眺めながら、そつと呟く。マルコは未だに梅吉姐さんを嫁にするつもりでいるし、この手配書をみたらきつと喜ぶだろう。

この世界にいと判れば十分。昔お守りにともらった爪でビブルカードを作ってしまったばすぐに探し出せる。

そこまで考えてティーチは、早くマルコが帰ってきたらいい、と空を見上げながらにんまりと微笑んだ。

君が為惜しからざりし命さへ3

ティーチが逸る心を抑えつつマルコの帰りを待つて、2日後の夜に偵察から帰ってきた。それをいつもよりも浮き足立った様子で出迎えるティーチに、マルコが訝しげに尋ねた。

「ティーチ、どうしたんだい？なんだかいつもより嬉しそうだない
…何か良い事でもあったのかよい。」

「ゼハハハっ！まあ先にオヤジへ報告してこいよ、マルコ。その後で俺の部屋に來い、話がある。」

何かを企んでいる様な表情をして、大きな腹を揺らしながら楽しげに笑うティーチにマルコは釈然としないながらも了承をして、白ひげの元へと向かった。

「オヤジ、今戻ったよい。」

「おお、帰ったかバカ息子」

「オヤジ、バカは余計だろい？あー次の島なんだがねい、ログが溜まるのに2ヶ月かかるらしいよい。秋島で規模はまあまあだが、海軍の支部はなし、この白ひげの艦隊で行っても問題はなさそうだい。」

白ひげのからかいも軽く受け流したまま報告をするマルコに、その頭を撫で付けてスキンシップを図る。これも日常のことで、白ひげのチョッカイは幼少の頃から受けている妖怪たちの揶揄に比べれば、子供染みていて一々反応するのも大変だったりする。やってる本人は何かしら反応を返してほしいのだろうが。

自分の子供を構いたくて仕方のないという表情をだされれば、マルコも三十路を過ぎても嬉しいし、くすぐったい様な気分にもなるの

だが。いつまでも幼児扱いはいかななものかとも思うのだ。

（って言っても、オヤジからみりやいくつになろうが<子供>なんだろうがねい…。）

彼の人から見ても自分は<子供>なのだろうか…と、少し落ち込みながら報告を終えて、ティーチの部屋へ向かおうとした途中で、四番隊隊長をやっているサッチに出くわした。

「お？マルコじゃねえか。偵察から帰ってきたのか？お前飯は？」

「よい。」

「いや、よいってお前、どっちよ。」

気の良い性格で髪型のセンスはともかく（サッチから言わせればマルコに髪型のセンス云々は、言われたくないだろうが）隊の関係なく人望が厚い人物である。

世話好きで性格は良いのだが、快楽主義の節がありしょっちゅう悪戯を仕掛けてくるというはた迷惑な一面もあったりする。

自分で<食とは快楽である>と自己主張するだけはある、コックとしての腕も最高級、厳つい顔に傷というマイナスな面も、悪戯小僧のような笑顔で相殺されてしまうのだから憎めない。己のことを良くわかつているのだろうサッチを、内心マルコは隠れナルシストなんじゃないのかと疑っていたりする。

「食ってないよい。」

「キッチンに夜食置いてあるから食っていいぞ。ボンゴレリゾットが鍋に入ってて、前菜とデザートは簡易保温棚、コーヒーはセルフな。」

「よいよーい。」

だから、よいじゃわかんねえって！と、笑いながら片手を振って去っていくサッチの背中を見送って、先にキッチンに行きトレーをもつてティーチのところへ行こうと考えを改めると、その足をキッチンへと向けた。

恐らく持つていけばティーチもデザートは食べるであろうと踏んで自分のトレーと前菜とデザートだけを乗せたトレーの2つを持ってティーチの部屋へと向かう。

「よいい、ティーチ、あけてくれよい。」

「おう、お？それ、今日のデザートじゃねえか。うまかったんだよな、それ」

マルコからトレーを受け取ると中へと促して、隠し棚から酒瓶とグラスを2個取り出す。それをみたマルコは普段は眠そうに細められている目を見開いて、ティーチを見た。

「キルシュヴァッサーじゃねえかよい。それ、前に特別なときだけ飲むって言ってたかよい？」

「まあまあ、いいから座れって。」

本当に何があつたんだと、盆の窪を擦りながら勧められた椅子に座るマルコに、ティーチは昔寝物語で聞いた白兔を追いかける少女が出会ったネコの様に、口元をニンマリと歪めて笑った。

はぐらかされたまま、しぶしぶ食事を始めるマルコに、次の島のことなど当たり障りのないことを聞く。そんなティーチに、次の島の事を話し出すマルコ。

「次の島は温泉があるらしいよい。紅葉もきれいだったし、海軍の代わりに島の自警団がいるらしいが、海賊でもちゃんと金を落とすていくだけなら問題ないっていったよい。」

「へえ、変わってんなあ……。ま、俺達にやありがてえ話だがよう。」

リゾットを食べ終わったマルコにキルシュヴァッサーをグラスに注いでやってから、徐に2枚の手配書を差し出した。その表情は少しだけ涙ぐんで、普段の毛むくじゃらな顔ではなく年に似合わない幼い表情で。

「やっと、俺達も行動できるようだぜ。」

君が為惜しからざりし命さへ4

差し出された手配書を手にしそれに目を向ければ、再び目を見開き座っていた椅子から勢い良く立ち上がり、手配書とティーチを交互に見つめるマルコ。

悪戯が成功したかのように喜びながら、自分のグラスの中身を飲み干して笑い出すティーチ。先ほどから何かを企んでいたような顔をしていたのは、このことだったのだ。

「て…ティーチ、これ…っ」

「ゼハハハハっ！流石は梅吉姐さんと、にいちゃんだよなあ！やることのスケールがちげえよ。ま、大方身内の誰かがアイツ等に連れてかれたかなんだかで、やっちゃったんだろ。」

基本面倒事の嫌いな彼女のことだ、それくらいのことでない動きはしないはずだと笑いながら、空になったグラスに新しく酒を注ぎ足す。

彼女達が賞金首になってしまったのは残念だが、逆に己達もその首にかなりの賞金が掛かっている。そこはお互い様というやつだ。

「……………そんなことよりよい。なんだい！このく毒婦>ってえのは！あのヒトのどこが毒婦だってんだい！」

「おま、最初の着眼点そこだよ。」

飲んでいた酒を噴出しそうになりながら、海軍のつけた異名に激昂しているマルコに突っ込みを入れるティーチ。てつきり、彼女達の動向がわかった喜びから驚いたのかと思えば、どうやらそうではなかったらしい。

昔からそうだったが、どうもマルコは着眼点が常人とは違うようだ。

「当たり前だい！大体毒婦の意味ってなあ。騙したり陥れたりする無慈悲で性根の悪い女って事だらう？それに狐の姿で女ってわかるって海軍のやつ等一体どこ見てやがったんだい！」

「そっぴやなんでだらうな。」

「だらう？」

思わず、動物の性別を確認するために海軍はいちいち股座を確認したのだろうか、と勘繰ってしまう。だとしたら彼等の掲げた正義の情けなさに泣きそうなものだが。

この世界は人間とは思えない生物が多く存在する為、彼女達のような存在も受け入れやすいかもしれない。殺した相手を食べるたびに強くなるという妖怪は、この世界では最強になるんじゃないかと思う。

世界最強の白ひげ海賊団と言っても、彼女等に挑んで善戦ができる保障もない。大量にいた犬神をわずかな時間で食い殺してしまうようなヒトなのだ、唯の人間など蟻のようなものだろう。下手したら単騎でバスターコール数倍、もしくは数十倍の戦闘能力を出すかもしれない。

（世界政府とか海軍ってバカが多いからなあ…頭が良いやつってのは逆に馬鹿ってことだし…。姐さん達に喧嘩売らねえといいんだけど。）

いくら自分達が海賊だといってもその辺りは心配をしてしまう。能力者や一般人、海賊や海軍という括りではなく妖怪とく人間では絶対的な捕食者と餌でしかない。

人に害を及ぼさないものもいるにはいるのだが、そんな彼等に害を及ぼそうものならば手痛いしっぺ返しがくる。手を出した瞬間に、殺された天竜人のように危険だと分類される者達がここぞとばかり

に＜食事＞をしにくるだろう。

「……姐さんに、逢いてえよい。」

さつきまで立ち上がっていたマルコは気が落ち着いたのか、椅子に座りなおしサキの写る手配書を指先でなぞりながら小さくため息をこぼした。

幼い頃にサキへ覚えた感情は慕情。それはいつか淡い初恋に変化するの時間は掛からなかった。最初に彼女へ伝えた《およめちゃん》というのは、確か烏天狗から聞いたのだ。

【坊、知っておるか？ヒトというものは常に側に置きたいものを《嫁女》にして側へ侍らすそうぞぞ。】

【嫁女とは、およめさんのことだ】

幼いマルコにはサキと一緒にいるために、あの暖かい場所を手離したくないがためにあんなことを言っていた。

あれから年を重ね年頃の男性としてそこそ女性とイタシタ経験もあるにはあるが、どうにも恋愛までは発展できない。根本にある理想の女性像と一致しないというのもあるが、結局のところその女性像が理想だけでなく、生身の姿でいると解っているからだ。

彼女だけを思っ女性とそういった行為をしないという選択肢もあるにはあるが、その辺りも烏天狗からの余計な知識が影響していた。

すなわち【床上手になっておけ、筆絡するにしても睦言の一つも囁けぬ、閨事の下手な男は嫌われる。】

今思えば、3〜4歳児になんて事を教えてるんだとか、いろいろ言いたいことはあるが、人間の常識の通じない彼等に言ったところで暖簾に腕押しになるだけだ。

彼等の《まー坊逆光源氏計画》は、マルコの気が付かないところで

着々と息づき、現在では慕情ではなく、立派な恋心に変貌を遂げていたりする。げに恐ろしきは妖怪の執念。

「おい、マルコ？大丈夫か？次の島で、ビブルカード作れるなら作っちゃおうぜ。」

「ん…？ああ、そうだねい。」

急に黙り込み物思いにふけるマルコに、心配になったティーチが声を掛ける。

昔からマルコが彼女に何かしら思いを抱いているのは知っていたが、幼い初恋をここまで維持させているのがたまに心配になる。そうさせているのが、あの烏天狗たちだと知っているからなおの事。

彼等がサキに懐いているマルコを、彼女の番にしようと息巻いていたのを知っていたからだ。そこら辺の者に取りられたくないから、とマルコを彼女に相応しいように教育していたのも知っていた。

（烏のおっちゃん達…本当に侮れねえ…。いや、梅吉姐さんは妖怪だとしても確かにイイ女だろうが。）

うつそりと微笑む烏天狗の顔を思い浮かべながら、ティーチはキルシュヴァッサーの瓶を片手にため息を吐き出した。

君が為惜しからざりし命さへ5

無事島に接岸した白ひげの船団は、これから2ヶ月間この島で過ごすことになった。とはいえ船をがら空きにするわけにはいかない為順番に船番をするのは変わらないが。

ワノ国に似た様式の町並みに16番隊隊長のイゾウが少し懐かしそうな表情で、景色を眺める。

今日から1週間は5番隊と11番隊が船番ということで、マルコとティーチはビブルカードを作る店を探しに街へとくりだした。しかし、そこで二人は島の住人から大歓迎されるという事態に巻き込まれることになる。

「なあ、ティーチ…こいつあ、なんかおかしくねえかい？」

「だよな。なんで俺等だけなんだ？」

先ほどから通りを歩けば、あちらこちらから声を掛けられ何かしら貰うのだ。まるで己等の子供に対するような態度で。この島にくると皆がそうなのだろうかと思えば、後ろから歩いてくるエースには普通に対応しているためそうではないようだ。

「おーい！マルコー！ティーチャー！ずっりいじゃねえか、さっきから物もらってよー。」

「あー、わかったわかった。ほら、食っていいよい。」

「ゼハハハ！本当に二十歳になったのか？」

とつくに成人しているはずのエースが頬を思い切り膨らましながら文句を言う様子は、はつきり言って可愛くない。大体185cmもある体つきも筋肉で発達した二十歳の男が、子供のように振舞って視覚の暴力になるだけだ。

白ひげに入った当初のエースは礼儀の礼の字も知らないようなヤン

チャであつたが、セイ仕込みの教育法で海賊にしては礼儀正しくなつた。それでも食事中に突然眠りこける癖だけは更正させることはできなかったが。

結局マルコがもらつたお菓子を貰つて、嬉しげに横で食べ歩いている。

「なんだ？あれ、サッチじゃねえか？」

そのまま石畳の階段を歩いていれば、前方の茶屋でサッチの姿を見かけた。なにやら誰かと話をしているようで近づいて見ると、濡れた様な黒髪の女を口説いてる。

「悪いんだがね、あんたに付き合つてる暇はないんだよ。」

「そうは見えねえんだがなあ。さつきからここで座つてるだけじゃないか。」

「しつっこいねえ！あたしや遊女じゃないんだよ！他を当たりな！」

長い航海で女に飢える気持ちも解らないわけではないが、なんとなく今声を掛けている女性は、やめておいたほうがいいのではないかとティーチとマルコは思った。

本当になんとなくだったのだ、そう思つたのは。しかし女性がこちらを振り返つたときにそれは確証に至つた。

（サッチ…そのヒトはやめておいて正解だ。殺されるぞ…まじで）

「まったく！つて……おや……」

サッチの差し出した手をぴしゃりと跳ね除けて、威勢良く啖呵を切り髪を靡かせながらこちらを向いた女が目を見開く。同じようにティーチも女を見てその眼をまん丸に見開いた。

「その匂い…もしかして…」

「まさか…キ又ねえちゃん…か？」

「ああ！やっぱりてち坊やとまー坊じゃないかあ！坊や達、無事だったんだねっ？！」

さっきまで声を掛けてきていたサツチを完全に無視した状態で、キ又と呼ばれた女がマルコとティーチに抱きつく。

その目には涙が浮かび、しきりに「よかった、よかった」と口にしながら、マルコの頭を撫でて、同じくしゃがみ込んだティーチの顔を撫でて喜んでいた。完全にスルーされたサツチは声も出せずに、呆然とその様子を眺め、その肩を良くわからないなりに察したエースが叩いて慰めた。

頭を撫でられて嬉しいのかいつもは眠そうな目も和らぎ、淡く微笑むマルコにサツチは悔しげに地団太を踏んだ。しかし、マルコもティーチもサツチのことは完全に視界に入っていないのか気が付いた様子はない。

「完全に俺は無視か？！こらあ！」

そう怒鳴って初めて3人は気が付いたというような表情でサツチを見て、完全に視界に入っていなかったのかと打ちひしがれてしまった彼の様子に、エースが余計居た堪れなくなっただのは余談である。

君が為惜しからざりし命さへ6

「本当に懐かしいねえ。あのおチビ達がこんなに大きくなるなんて

」

あれからエースが打ちひしがれたサツチを伴って別行動になると、キヌがマルコとティーチを自分が暮らしているという長屋へと案内してくれた。

話を聞けばやはり、あの時二人だけが逸れてしまっていたらしく皆で搜索したが見つからず、もう逢えないのではないかと思っていたというのだ。

最も、はぐれたのは二人だけではなく何人かの住人も同じようにバラバラになったらしいのだが。

妖怪であれば幼くともなんとか自力で仲間の元へ帰るなり、喚ぶなりできるが、人間の子供では自力で戻ることは難しいであろうと。

それでも、海の妖怪である濡れ女・キヌと一緒に居たということと、本人達が気が付かない所で住民がさまざまな加護を分けていたから海で死ぬということはありえないということから、恐らくどこかで生きているのだろうと。

流石にもう20年以上も経過していれば加護も薄れているが、それでもサキとセイの体の一部を持つていればすぐに彼女達の庇護下の者だと解る。そのため島の住人は二人を歓迎して可愛がっていたのだ。

「そっぴゃ、まー坊、お前さんどうしたのさあ。いつの間にかアタシ等と同じ匂いをさせるようになってるなんてさあ……妖怪でも食べたのかい？」

キヌに聞かれたことにまったく心当たりのないマルコは、出されて

いた茶を噴出しそうになりながらも否定をする。

「よい?! 食ってねえよい?! …… まさか海王類って妖怪なのかよい?!」

「んな訳ないだろ、もしそうだったら、そこかしこ妖怪だらけになつてるよ。…… おかしいねえ…… てち坊はともかく、まー坊は昔は人間だったはずなのにねえ……。 すっかり馴染んじまってるが、確かに匂いがするんだよう。まー坊、あんた急に体の調子が悪くなったとか、なんか覚えてない?」

「いや、不死鳥の実を食ってからはそんなことはなかったがねい。」

「それ以前に、なんで俺はともかくなのかが気になるんだがよ。マルコ」

俺あロギアだが、人間やめた記憶はねえぞ。と、笑いながら、出された茶菓子を口に放り込む。確かに少し特殊な体質ではあるが、少なくとも人間であると自分では思っているティーチ。

妖怪といわれても、キ又たちの仲間になるので特に異存はないのだが、改めて断言されると少し微妙な心境になる。

それよりも特に不死鳥となった以外特に目立った変化のないマルコが、妖怪になつていいると言うことのほうが納得できない。

「だって、妖怪の血肉に触れないと……」

「あ、それだ! キ又ねえちゃん、マルコの奴逸れてから直ぐにすごい高熱を出したんだ! その前に梅吉姐さんに抱き付いてたろ? あれが原因じゃねえか?!」

「よい? そうだったかねい?」

ティーチは健康体だったので問題はなかったのだが、白ひげに拾われてから2日も経たないうちにマルコは原因不明の高熱をだしてしまい、実は当の本人はあのあたりの記憶はおぼろげだったりする。

白ひげと出会う前にマルコは、滴るほどの妖怪の返り血を浴び、他に自身も浅いとはいえ傷を負っていた梅吉に抱きついていて。そして社に隠れていて安全であったとはいえ、あちこち遊びに行ったり、見事としか言えない様な転倒を披露していたマルコは、常にどこかしら擦り傷なりきり傷なりをこさえていた。

妖怪の血を体内に摂取する方法など経口か体に浴びて皮膚吸収かのどちらかだし、そこに傷があればその比率は高くなる。

住民の加護が働いていたお陰で1週間の高熱だけでマルコの命には問題は無かった。その後1年で悪魔の実を食べたマルコ。しかし、それで気が付くのが遅れた。

そして成長期ということも手伝って、拒絶反応も起さず、いや、実際は拒絶反応が起きていたのだから再生の能力で、本人も気が付かなかった可能性が高い。

その不死鳥の能力でゆっくりと身体が変質していたのだ。人間から妖怪へと。

「いいんだか、悪いんだか…わからねえな。しかも不死鳥の能力で体の不調はすぐ直っちゃうし…気が付けねえわけだ。」

「便利なモンだねえ。そのくあくまのみ…ってやつは…ヒトでも簡単にアタシらみたいな能力を手に入れられちゃうんだから。」

「なんでも便利ですませるキヌさんもすげえよい。」

すっかり冷めてしまった焙じ茶の湯飲みを見詰めながら、ティーチがぼつりと呟く。

「でも、納得できたなあ。」

中心になつてく遊んでくれていたのは烏天狗、つまり有翼。マルコは不死鳥になつても、能力に振り回されること無く自在に飛んで

見せていた。つまりはそういうこと。

（実際に飛んでるコツを身体に叩き込まれてたようなもんだもんな。そりゃ簡単に飛べるようになるわけだぜ。）

子供の柔軟性故のものと思われていたが、実際はお手本を嫌というほど見てきたからだと思い出した。なにせ烏天狗は、風を使った攻撃の他に蹴り技に長けている。

思い起こせばマルコの戦闘スタイルも、腕が翼になってしまったため足技がメインだ。

「俺は嬉しいけどない。皆の仲間入りだい。」

当の本人であるマルコは嬉しげに茶を啜る。其れを呆れたように笑いながら見ているキヌと目があつたティーチは、同時にため息を零した。

君が為惜しからざりし命さへ7

「そういや、この島は皆が住んでるんだろう？ 姐さんたちも…いるのか？」

そう、キ又たちがこの島に居るならばと、ティーチが恐る恐るキ又へ尋ねる。隣に胡坐をかいて座るマルコも表情を引き締めてキ又を見詰める。

だが、その返答はなんともあっけらかんとしたものだった。

「ああ、梅吉さんだろう？ ちよいと前まではここの代表をやっていたんだがねえ。やめちまって今は隠居しつつ次期＜調停者＞の育成やつてるよう。権兵衛名が知れ渡っちまったからねえ」

「それって、賞金首になっちまったからか？」

「よく判ってるじゃないか、てち坊や。天竜だかなんだか知らないがアタシ等に喧嘩売ってきやがったんだよ。」

芸者見習いの子をさらって行きやがったから、皆で暴れてやったのさあ！と楽しげに笑うキ又。だがその眼だけは笑っておらず、その瞳孔は縦に割れていた。

「知ってるだろう？ この島には海軍の支部はないのさ…。客の相手をするのは大抵芸者。閨事を希望されれば遊女が相手をするんだがねえ… あいつ等はまだ座敷に上がれない見習いを無理やり手籠めにしようとしやがった。」

急須に新しい茶葉を入れ、火鉢の上に置いてある鉄瓶からお湯を注いで、ちょうど良い温度のそれを湯のみに注ぎ足せば鼻腔をくすぐる馥郁たる香りを放つ焙じ茶。

それで舌を湿らせながらキヌが話し出したのは、彼女達が賞金首になつてしまつた経緯。

「海軍のやつらも礼儀がなつちやいない。お役人つてえやつは、権力を笠に着るような屑が多いからねえ。芸者も遊女もあいつらからしたらく娼婦なんだとさ。そんな事言われて我慢できる奴等はこの島にはいやしない。だから追い出してやつた。」

この島は元々の楽園の住人以外にも、あの世界で行き場をなくした世界各国の仲間が移住に来ていたらしい。その他にも魚人も多数隠れ住んでいるという。この島では魚人であろうと、く人間くの括りに入ってしまうし、外見だつてもっと凄いものがいるから差別などをするはずもない。それ故に安息の地として住み着くものが後を絶たないのだそうだ。

容姿が人間に近いものは商いをし、それ以外のものは島で隠れ里のような集落を作り、特産品を生成し卸す。

その中でも商いの才能は無いが、歌が上手いとか踊りが上手いというものにも仕事を与えるために考案されたのがく芸者と遊女くだった。

その振り分けも各自の能力などによつて分けられていて、主に人間の精気や生き血等を糧にするタイプは殆どが遊女へとなつている。サキユバス等はその行為自体楽しんでるので構わないのだが、殆どの者は幻覚を見せて終わらせるのだという。その隙にこちらは食事を済ませるという寸法だ。

キヌも最初は遊女を考えていたのだが、この島が裕福であるが故に海賊の襲撃を受けるため、そちらで食事が可能だからやっていないのだという。

「ま、最終的にはその天竜何某が、その子を気に入って何人目だかの嫁にするとかいいだして連れて行つちまつた。まだあの子は付喪

神になったばかりの、子供だつて言つのにさ！」

そこで<調停者>となつたサキが九尾の姿で追いかけて行つたらしい。あとからやってきたセイもかなり暴れたのだろうが、サキが天竜人を食い殺してしまつた。連れ去られた見習いが二人の名前を呼んでしまつたため、名前もばれてしまつたのだらうとキヌが言う。念のためと記憶を改竄したのだが、それを免れ逃げ延びた者が海軍へ情報を流した可能性もある。

「終わつちまつた事は仕方ないけどね。そんなもんだから二人は、この島の中心部にある宿の離れで隠居生活してるよ。」

元々浮世離れした御仁だからたいして気にしてないがねえ…と言うが、マルコやティーチからしたら心配で仕方がない。

「キヌねえちゃん…二人のところへ連れてってもらつていいか？」

確かに世話にはなつてはいたが、これだけの年月が経つていれば、会いたいと思う反面、会にくいという感情もでてくる。マルコにいたつては恋愛感情も絡んでくるから余計に複雑そうな表情だ。

「何言つてんだい。坊や達なら宿に行けばすぐ案内してもらえるさ。なんせあの宿は、貉の旦那が夫婦で経営してるし。」

「たぬきのおっちゃん達が?!」

あの飄々とした好々爺夫婦は良く二人を可愛がつていてくれたし、良く覚えてる。そういうことならと長屋を後にし宿泊施設である「幻燈楼」へと足を向ける。石造りの灯籠が続く石畳を少し緊張しながら上つていけば、通り沿いの店やすれ違う住人達からほほえましげな笑顔を向けられる。

「お、ご隠居に会いにいくのかい？喜ぶよ」

「元気な顔を見せておあげよ」

会ったことのないものが殆どだというのに、まるで自分達の子供のように接してくれる彼等。幼い頃に戻ったような感覚に、マルコ達はお互い顔を見合わせて、笑いあう。次第にその足取りが軽くなつて行く。

「行こう、マルコ」

「よい！」

君が為惜しからざりし命さへ 8

石段を登りきり眼の前に広がるのは、燃える炎のような鮮やかな紅と、眩い黄色の洪水。あの家で見た紅葉と同じ色。それに圧倒されつつ宿の玄関へと歩み寄れば、宿の中から見覚えのある好々爺が笑顔で現れる。

「おお、お帰り、おチビ達。ようやっと帰ってきたねえ。さ、中へおはいり、疲れただろう?」

甘い物でもあげようね。と、あの時と同じ人のよさそうな顔で、8時20分の時計のように目尻を下げて手招く男。

<お帰り>

その言葉にもう三十路もとうに越えた良い年した男が、二人して顔を皺くちやに歪めて、笑う。

「たぬきのおっちゃん…た、ただいま!」

「相変わらず、おっちゃん是不変わらないねい…やっと帰ってこれたよい!」

感極まったかのように、170cmもない老人に思い切り抱きつく二人の肩を、優しく叩く。嬉しくて嬉しくてむせび泣く二人、幼い頃に離れたくて離れたわけではなくて。サキの作ってくれた門を潜り抜けたらみんなと離れていて、二人だけで…。

寂しくなかつたわけがない。白ひげが幾ら息子として迎えてくれたと言つても、皆家族なのだと分かつていても。

彼等が与えてくれた愛情を忘れられない、忘れるはずがないのだ。二人で中へ入れば、女将のタキが待ち構えていたかのようにティーチを抱き締めてくれる。

年甲斐もなくボロボロに泣く二人に、老夫婦も笑いながら同じように涙を流していた。

「なんだい、お前達、良い年して情けないねっ。まー坊も相変わらず泣き虫だし、お前様までみっともない！」

袂で涙を拭いながらタキが言えば、お前こそ泣いてるじゃないかと言いい合いになり。その掛け合いすら懐かしいと、マルコ達は笑った。手拭いで顔を拭かれて、離れへと案内される間、マルコとティーチは幼い頃のように互いの手を握る。帰って来れたという安堵と、あの人達に会えるという高揚感で手が震えるのを抑えたくて。その様子にタキが微笑ましいと笑む。

「相変わらず兄弟仲がいいねえ。安心したよ。」

さ、着いたよ。と案内されたのは、宿の一番奥まった場所にある離れの一室。

茅葺きの離れは周りを竹やぶに囲まれて、入口しか見えない造りになっており、隠居するには逃え向きのものだった。

先を促され扉に手を掛け引戸を開けば、途端に紫煙独特の香りが鼻孔をくすぐる。

その香りに、マルコ達の動きが止まる。

間違いなく、この先にあの人がいる。そう思うのに身体が動かない。

「どうしたんだい、さっさとお入りな。私に逢いに来てくれたんだろっ?」

耳に響く、独特な巻き舌の口調。堪らなく二人は同時に駆け寄って叫んだ。

「姐さんっ!」

「うるさいっ!」

その瞬間二人の頭に強い衝撃が襲った。ティーチに至ってはロギアだというのに、踞り悶絶するこの威力。

「につにいちやああんっ」

「デカイ図体して泣くな。やかましい。抱きつくな。暑苦しい。中身は成長してないようだな、全く情けない。」

目の前には紺色の作務衣で腕を組んだセイの姿。心底呆れたように見詰める容姿は昔のままだ。嬉しさにティーチが抱きつけば、その額を面倒くさそうに押しのけてくる。

その相変わらずな様子も、ティーチからしたら嬉しくて仕方がない。

君が為惜しからざりし命さへ9（前書き）

感想などを聞かせていただけると嬉しいです。

君が為惜しからざりし命さへ9

額を抑え押しのけられても一向に離そうとしないティーチを、終いにセイが蹴りを入れて突き放す。一見見るとなんと乱暴に見えるが、それでも踏み止まれる程度に力加減をしているとか、それ以上は突き放したりしないところとか、幼いころには見えなかったセイなりの譲歩。

性別は女なのに筋肉質で抱きついたって女性らしい柔らかさも丸みも無くって、性別以外は本当に<兄>であるセイをティーチは心の底から尊敬して慕っていた。ティーチ自身の礼儀作法に厳しく少し苦労人な部分は確実にセイの影響を受けているといっている。

「まったく図体ばかりで中身が成長してない餓鬼が。」

「でも、にいちやんだって嬉しそうにしているよい。」

「ふん」

ため息とともにセイが言えば、其れに対してマルコが嬉しそうに言い返す。普段無表情で感情を表に出さないだけで、ちゃんとセイも再会を喜んでいるのだ。ほんの少しだけれど、その瞳が和らいでいる程度の差ではあるけれど。

「そういえば、てち坊。キヌからの早文で聞いたんだが烏が色々と画策していたらしいな。少し顔を貸せ。」

「お？烏のおっちゃん達のとて……ああ。了解。」

いきなり何を言われたのかと思えば思い当たる節はいくらでもある。おそらく烏天狗の「まー坊逆光源氏計画」のことだろう。ティーチは片棒を担いでいないので、大方証人が欲しいといったところか。キヌの早文の内容は知らないが、凡その見当は付く。

「今夜は焼き鳥か水炊きにでもするか。」

(うわぁ、鳥のおっちゃん達、ご愁傷様……！でも俺は悪くない！)

口元だけで笑みを形作るセイに、ティーチは引き攣りながらも必死に頷く。ここで逆らったとしても余計なくトバツチリ>を喰らうだけだと、昔からの経験で十分判っている。いくぞ、と刀を片手に離れを出て行くセイの後ろに付いて行くティーチ。

「お前だけでも姐さんに会って来いよ。俺ぁ、にいちちゃんとちよっくら行ってくる。」

「よ、よい。」

サキと逢えるのは嬉しい、しかしティーチがいないのでは心細い。そんな感情が表情に出てしまっていたのだろっ、セイが振り向きニヤリと人の悪そうな笑みを浮かべた。

「どうしたチビ。前のお前なら、ねーちゃー！とかいつて後先考えず突っ込んで抱きついていたらろっに。歳食って姉さんの所に素直にいけないか？あぁ、それともあれか、惚れた女だから逆に逢いにいけないってやつか？意外と初^{うぶ}なんだな。」

「そ、そんなことねえよい！」

「お前な、そんな面^{つら}で説得力がないんだよ。遊びであの人に手を出すなら自分が斬って捨てるが、本気で添い遂げるなら何も言わない。本人達の意味だからな。いくぞ、てち坊。」

そう言つてティーチを伴い旅館の中へ消えていくセイの背中を見送つてから、マルコは離れの中へ入っていく。玄関でサンダルを脱いで廊下を奥へと進む。歩くたびにキュツキュツとなる廊下に、心拍数を上げながらもこれは侵入者が直ぐわかるなど、頭の片隅で冷静

に考えていた。震える手で障子を開けば明かりのない部屋の中、明り取りの窓から差し込む日の光を受けて、こちらに背を向けている女の姿。

先ほどまで煙草をのんでいたのか、脇に置いてある煙草盆に煙管が置かれている。畳の部屋の中へと足を運び、後ろ手に障子戸をしめるとそこで声が掛けられた。

「一体、どこをほつつき歩いていたんだい？只の迷子にしちゃあ、性質が悪いじゃないか、まー坊。」

衣擦れの音をさせて振り返る彼女の姿は記憶のものよりも華奢で、小柄だった。もちろんそれはマルコが大人になった為に、そう見えるのだろうか。

「只の迷子じゃ、つまらねえだろい？序にあちこち見聞してきたんだい。」

「おやおや、そんな憎まれ口を叩けるほどには成長したのかい。やはり人間ってえのは成長が早いもんだ。」

ゆっくりと歩み寄りつつ、口元を緩ませながらそう言えば、面白げにサキがまぜつかえす。

幼いころから焦がれていた彼女が目の前にいて、思わずマルコはその腕を伸ばし、あの日の幼い頃の自分のように、サキの目の前に膝を付きその細い身体に抱きついた。その胸に頭を預けて、まるで母親にすがりつく幼子のような様子に、サキは何も言わずにその背中を撫でながら、抱きしめ返した。

「よく、無事でいてくれたね。」

静かに、囁く様な小さな声でサキが呟く。それにマルコは、ただ頷

いていた。

「逢いたかった…。姐さん、逢いたかった…。約束を守るために戻ってきたよ。」

「おやおや、こんな隠居の婆に何をお言いだい。」

くつくつと笑い出すサキに、マルコは一旦サキから離れてその切れ長の眼を見詰めながら、緊張した面持ちで再度言う。

「姐さんは、よい。ガキの戯言と思うかもしれないがねい…。俺あ本気だい。」

「私かりやすれば、あんたは子供なんだがねえ…。」

「一朝一夕で姐さんが俺のモノになるなんざ、端から思ってたねえよ。長期戦で挑むからその心算でいてくれよ。」

海賊は諦めが悪いんだい。と子供の頃からは思いも付かないような笑みを浮かべるマルコに、サキは内心一体どんな人生を送ってきたのだというのかと、少し心配になってきた。

幼い頃のあの愛らしく懐いていたマルコが、悪人顔とも言えるような笑みを浮かべ己を自分のものにする等と言い出すなど、一体誰が予想できようか。

「ねえ、まー坊…」

「マルコ、だい。なあ、ちゃんと名前を呼んでくれよ。」

サキよりも大きい図体をしているというのに、その顔を覗き込むようにして強請るのは傍から見れば軟派な男のようにも見えるのだが、その顔つきが真剣なもの故に、いつまでも子ども扱いをしないで欲しいという本人の意思表示なのだろう。

また決して誰もが振り返るほどの美形というわけでもないが、比較

的整った顔つき。鍛え上げてあるその肉体などで、少なくともそういったく場数>は踏んでいるのであると容易く看破できる。

応えないサキを逃がさぬように覆いかぶさるようにして、顔を近づけ囁くように優しく強請る。その言葉や声は甘く低いものではあるが、その眼は獲物を狙うかのような雄のもの。

「なあ…」

その厚みのある唇が、長い髪に隠されたサキの耳元に触れるか触れないかの位置になった瞬間

「まー坊…あんた、その後頭部…どうしたんだい？」

「……よい？」

突然の質問に固まるマルコへ、首を巡らせて正面から見詰めるサキ。その表情には照れや羞恥などは一切浮かんでいない。

正直な所、素人の女であれば、先ほどのマルコで簡単に落せたであろう。だが、サキとて色を売らぬとはいえ、幾多もの男を相手にしてきた商売女なのである。あの程度の<色香>など簡単にかわす事など朝飯前。

「伊達や酔狂で私も芸者をやってたんじゃないんだよ、坊や。人間がこの妖狐を誑かすんだあ…青い、青い…」

切れ長の目を細めて喉で笑う女に、バツが悪くなったのかマルコが身体を離して座りなおす。

「俺あ、妖怪になりかけるって。それも聞いたのかい？」

「ああ、キヌさんから聞いているよ。でもまあ、このまま放っておいても問題はなかるうよ。アヤカシの血肉を取らずに居れば、いずれ

人間にもどるだろうしねえ。」

幸いにも妖怪はこの島にいる島民しかないのだ。おそらく幼い頃に血まみれの己に抱きついたから、妖怪化が始まったんだろうとアタリをつけて。

「人間なんざ、戻らなくていいよい。姐さんたちと同じ妖か…」

「おやめっ！滅多な事を言うんじゃないよっ！」

マルコが妖怪になりたいのと言い切ろうとした瞬間、サキが其れを凄じ剣幕で遮る。怒りのせいか、ほとんど化粧を施していないというのに薄い唇や目元に朱が差し、まるで紅を施したような色香が立ち上る。

「いいかい？人としての生を全うする方が幸せに決まってるだろう？私はね、お前に、＜人で無し＞の生を歩ませるために助けたんじゃないんだよっ！」

必死にそうい募るサキは悔しげに唇をかみ締め、拳を握り締める。サキとしても、己の懐にいた子供が、己と同じ妖怪になりたいと言い出すとは予想をしていた。

しかし、今の彼等には己等とは違い、人間の仲間が居るのだ。その彼等が己だけを置いて先に逝ってしまうという苦しみを味あわせたくは無かった。

伊達に江戸時代から生きてきたわけではない。

時代が過ぎてゆくのを見守りながら、その中で何度も戦を経験してきた。

人間の子供を拾い育てたのは、初めてではなかった。慈しみ育てて、戦地へと送り出さねばならなかったこともある。いつだって人間は脆弱で、わがままで……。何度悔やんだことか、何度己の無力を呪

ったことか…！

彼等が一緒に行動しているということは、彼等が今マルコやティーチの＜家族＞なのだ。

その絆を崩すようなことはしてはいけない。

「ねえ、まー坊。あんたはちゃんと人間として、生きておくれ…お願いだから…」

淡く微笑むサキの表情に、マルコは鼻の奥がツンと痛くなりながらも、その身体を抱き寄せて胸に抱いた。下心などではなく、目の前の人が消えていなくなりそうな恐怖が芽生えたからだ。

幼いながらも綺麗な女だ^{ヒト}と思っていた頃と寸分の違いも無い彼女。それが意味することにマルコはやっと気が付いた。現在の仲間が老い、逝くのを見送らなければならないということ。

人間という理から外れ、もしかしたら輪廻と枠からも外れ、堕ちなければならぬかもしれない。彼女とく同じになる＞ということはそういうこと。悪魔の実のような海に嫌われるなどという生ぬるいリスクではない。下手したら精神を病むかもしれないほどの……

「でも、姐さんは耐えたんだろい？」

「耐えるしか、できなかつたんだよ……」

抱きしめた細い身体に似合わない強さ、本性は見上げるほど大きくて、バスターコール数十発以上の強さかもしれないが、それでもこの人は＜女＞なのだ。

この女^{ヒト}以上に強くなるのは無理かもしれない（敵になりうる妖怪が居なければ食えることも出来ない）が、離すことなど出来ない。

「俺も耐えられるよ。ティーチだって人間じゃないらしいじゃないか。ティーチが嫁さんもらえるまでは見守ってやりたいしねえ。」

だから人間の寿命じゃ足りないよい、と笑いながら、抱き込んだサキの顔を覗き込む。その唇が切れていることに気が付けば、そのまま何の気なしに、つい己の舌で舐めとって。

そのままの雰囲気で今度こそ口付けようとすれば、サキの細い指にマルコの厚い唇が押しのけられる。其れでも醸し出す雰囲気は、甘く感じられるような互いの吐息がわかる距離で。

「妖怪の血肉を口にするなど言った矢先にかい？なんで聞き分けないんだろうねえ。」

その表情は呆れたようなもので、嫌がされたわけではないと判断したマルコが押しのける指を節くれだった手で、やんわりと包み込んでから、ゆるく微笑みながら再度口付けを試みようとする。と、首筋に冷たく硬い感触が触れる。それに思わずマルコの動きが止まった。

「本気ならば構わないといったが、無理強いはいかなものかな？」

「よい…。」

驚張りの床が鳴らなかったというのに、いつの間に戻ったのかセイが抜き身の刀をマルコの首筋へと当てている。

固まったマルコに抱きすくめられた状態から、サキがするりと抜け出しながら、マルコの耳元に優しく囁いた。

「同じになりたければ、精々頑張って口説くが良いさ。お前さんがどこまで頑張るのか見物だねえ？まー坊」

そっついながら笑うサキは、マルコが出会った娼婦の誰よりも色香

が強く、無邪気だった。

君が為惜しからざりし命さへ10

場面は変わって幻燈楼の大広間、他に海賊も来ていないということで大広間を貸切にしてくれた支配人のニンザエモンにより、白ひげの陸に降りた殆どのクルーが揃っていた。とはいえ、この島の宿は此処しかないので、此処以外に宿泊場所などは無いのだが。

「すげえよな！ お前部屋みたか？ 能力者には能力者用の部屋って言うのがあるんだぜ？」

「聞いた聞いた！ さっきジヨズ隊長に聞いたら個室の風呂が付いてるんだろ？ 他の奴等は大浴場みたいだが！ 細かいよな。」

そんな事をクルーが話しているのがあちらこちらから聞こえてくる。各自の席の前には大勢の仲居により膳が運ばれ、あちらこちらで酌をしながら会話の相手をしている。荒くれ共の相手だというのに、みな一様に笑顔を絶やさず、なんとも嬉しそうに給仕をしている。そんな中、支配人が女将を伴い現れ、何かを合図すれば、ちょうど白ひげの正面に位置する広間の舞台の幕がひらかれる。

不思議そうに眺める一同に、幕の開いた場所に座りこちらに向かつて平伏する女が5人ほど。

「本日は、当宿「幻燈楼」へお越しいただき、誠に有難うございます。折角の宴盛り上げさせていただきたく、馳せ参じました。芸者の与一と申します。以後よろしく。」

中央に位置した女が面をあげて口上を上げる。同じく後ろに控える女達も面をあげ、各々が楽器を構え楽を奏でれば、それに合わせ扇を片手に与一という女が舞い始める。その洗練された動きにイゾウが楽しげに眺め、舞がわからずとも整った容姿揃いの芸者に男達は

喜んだ。

盛り上る酒の席の中、ニンザエモンは白ひげの元へと歩み寄り、頭をさげた。

「グララ…払った料金のよりも派手にもてなしてくれるじゃねえか。どういう腹積もりだあ？」

「いえいえ、これは、私共からの御礼でございます。」

「…御礼？」

芸者を呼べばかなりの料金が掛かると説明を受けていたのにも関わらず、こうやって料金以上のサービスを提供する支配人に後でばった来る心算かとあたりをつけていたものの、返ってきた答えに各隊長格のものを含め白ひげは訝しげな表情をする。

「あの子達と再度の逢瀬が叶ったのは、貴方様がまー坊達を救ってくださった為。こんなに嬉しいことがあります。こちらは私共のほんの御礼にございます。本当に有難うございました。」

そう言つて深く頭を垂れる二人に、白ひげは漠然とではあるが、ここがあの二人の捜し人のいる島であつたのかと合点がいった。

「そうか、あいつらの捜してたく家族…つてのはあんたたちのことか。」

しんみりと呟く白ひげに、ニンザエモンは微笑んで頭を振って否定する。

「いえいえ、家族同然として一緒に過ごされておりましたのは、拙宅のご隠居達でございます。私共はそのお手伝いをしていたに過ぎません。」

「隠居？」

ビスタが酒を飲むのを止め、なおも問いかけようとするのへ、広間の襖が開かれることにより遮られる。そこに居たのは少々幼い仲居のようで、一度平伏してからこちらへ歩み寄り女将に耳打ちをする。とはいえ近くに居る隊長格にはまる聞こえなのだが。

「女将さん、ご隠居がお見えに。ご挨拶を…と。お二人も一緒にございます。」

「まあ、相変わらず仲の良い…。」

仲居と女将が微笑ましいとでも言うように笑顔で、やり取りをする。と、開かれた襖から女を先頭に男、そしてマルコとティーチが現れる。見知った顔にクルーだけでなく、サッチやエースも驚いたように見詰める。

「え…マルコ？ティーチまで…」

マルコとティーチはそのまま酒の席へ戻ってきたが、その視線は女に注がれたまま。

先ほど聞いたご隠居というのはあの女かと思うも、その容姿は若く、隠居をしているような年齢には見えぬし、付き従う男も女よりも歳若く該当はしないのだが。

「お初に御目に掛かります。私はここ、幻燈楼にて芸者の元締めをしております、梅吉と申します。とはいえ、今では与一に元締めの座もほぼ譲り隠居の身でございます。本日は、そちらの乗組員でございますマルコとティーチをお連れくださいました事、深く御礼を。」

そのまま深く礼をする二人に白ひげが目を細める。同じように何人かのクルーも訝しげにサキを見詰めた。

「ウメキチってえ名前は、そうそういるような名前なのか？」

探るような視線でイゾウが尋ねるのへ、サキの唇が弧を描く。

「さて、私はこの名になりましたから随分と経ちますが、他には聞いた覚えなどはないですがねえ。何か、私の名前に問題でも？」

そちらへ視線を投げてから、うつそりと微笑むサキに警戒をしたのか懷に手を忍ばせたイゾウを白ひげが片手で制するのと同時に、サキの声が聞こえる。

「およし。酒の席で無粋な真似するんじゃないよ。喧嘩ふっかけにきたんじゃないんだよ。」

そちらへ目を向ければ、梅吉^{サキ}の後ろに控えていた男がいつの間にか片手に刀を携えていたのが目に見えて、思わず戦闘態勢に入ろうとしたものの、白ひげから許可が出ないためにイゾウ達も睨むだけしかできない。

「そうか、お前が毒婦・ウメキチか。グララララッ！確かに度胸が据わってるじゃねえか。と、なると後ろの奴が魔狼・セイってとこか。」

「おや、こんな小物をご存知とは……」

「3億超えが何をいつてやがる。天竜人をやったそうじゃねえか。」

楽しげに白ひげが尋ねるのへ、サキは口元の笑みを崩すことなく首をかしげて尋ねる。

「天竜人…？さて、そんな奴ここに来ていたっけかねえ？ニンザエモン」

「さあ？金魚鉢を頭に被った変な男ならきておりましたなあ。数ヶ月前にこの島で好き勝手に荒らしていたので、早々にお帰り願ったはずですがねえ。」

支配人の言い草に隊長だけでなくその場に居たクルーたちも目をむいた。この男は何を言っているのだ？

「グララ…そいつ等は何をしたってんだ？」

面白そうに尋ねる白ひげへ、ニンザエモンが、袂で口元を隠しつつ進言する。

「いえね、当旅館の芸者見習いだけでなく、仲居までを海軍の奴等と一緒に手籠めにしようとしたしましてねえ…。」

その言葉を聞いて思わず近くの仲居を見るクルー達に、仲居たちは動じた様子も無くくつくつと、楽しみに笑みを零した。海軍の中にはそういった蛮行を行うものも居るのは知ってはいたが、彼女達の様子では恐怖があったようには見えない。

「お客様方は、まー坊やてち坊の恩人だ。ですから正直にお話いたしますがねえ…」

黙っていたサキが楽しげに一同を見回す。先ほどまで酒の席にっていたマルコやティーチもいつの間にかまた彼女の傍に座っている。

「この島にや、人間なんざ数えるほどしか住んでいないんですよ。私も含めて…ね。」

その言葉にハルタやエース達が身構えようとして気が付いた。隊長格や白ひげ以外のクルーがその場に倒れ眠っていることに。慌てて見渡すと舞台に座る女のうちの一人が香炉を片手に扇を仰いでいた。其れを止めようと血氣盛んなエースが飛び掛るが、其れを片手でいなし押さえ込むティーチ。

「ゼハハ！安心しろ、みんなただ眠ってるだけだ。エース、前から言ってるだろ、ちゃんと見極めろと。」

「なんだとっ？！」

必死に逃れようとするエースが、周りを見ればイゾウやビスタ、ジヨズやナミユール達まで笑いながらこちらを見ている。そのことに余計混乱したエースが叫んだ。

「皆までおかしくなっちゃったのか？！」

「誰がだ、アホンダラ！エース、お前は最初の話聞いてなかったのか？」

他の隊長格が落ち着いているのも尤もで、あのサッチでさえ料理に舌鼓を打ちながら女に酌をさせている。未だに理解できていないエースにマルコが説明をしてやる。

「ようはだ、他のクルーには聞かせられねえ話があるから眠ってもらってるだけで、オヤジ達にどうこうしようっていうのは一切無いってことだ。話の流れで気が付くと思ってたんだがねい…お前の落ち着きの無さには困ったもんだい。」

「むしろ猪突猛進だよな。思い込んだら一直線。」

マルコの言葉を受けてイゾウがからかうように酒の杯を空け、次々

に同意を示す面子にエースも言葉が出ない。

君が為惜しからざりし命さへ11

やっと開放されたエースが頬を膨らませたままその場に座り込む。其れを見て白ひげがサキに話の先を促すようなそぶりを見せる。

それを受けてサキが話始めるも、いささか伝法口調なのは仕方ないものなのかもしれない。

「私共は、元々この世界にはいない生物、となりますか。人間からはく妖怪>だとか、<アヤカシ>なんて名前で呼ばれることもございます。別世界の人間に住処を脅かされこの島へ移住してきた次第で。此処にいるまー坊とてち坊は移住する前に、幼い時分で出会いました暫く世話をさせてもらったんでさあ。ちょいとしたイザコザに巻き込まれ、移住の際に離れ離れになっちまいやしたが、本日そちらさんの船に乗っていたお陰で再会と相成りました。その礼をと。ああ、もちろん二人が船を下りる必要はございません。私等はここにおりますので、この子達の<故郷>になればそれで結構。私等は確かにこの子達の家族ではございましたが、今はそちらさんが、<家族>で、ござんしょう?」

かなり話の内容を端折ってはいるが、ここで再会できたからそれで十分で、ここに置いていけとは言う心算もない。という思いは伝わったようで。

それに対し後ろに控えるマルコとティーチは些か不満げではあるが、反論が出来ないのか何も言わない。それを面白そうに眺める白ひげが自慢げに宣言する。

「確かにこいつ等は全員俺の家族で、息子だ。」

それを聞いて安心したのかゆるりと微笑んだサキが返すように応え

る。

「ならば、この島はその息子の故郷と思い、ゆるりとお過ごしください。私共がく人で無しであれど、一度懐に入れたモノを蔑ろにすることはありやしません。通常私等の秘密をしまった海賊は記憶を改竄させてもらうか、そのまま餌にさせていただくんですが、そちらさんに限りそれはごんせん。一部例外の場所を除いて自由に回っていただいて結構です。」

「一部ってなあ、どこだ。」

「ああ、一部の牧場では女しか入れない場所があるんで。そこは島の住人といえど限られた者しか入れないでござんすよ。それ以外なら特には問題はごんせんが、牧場や農場、工場などの回りは罫が張り巡らされてるんで、見に行かれましたらニンザエモンか女将、に言ってくださいや、案内のものを寄越しますよ。」

つらつらと島の案内を説明する女に、周りの女達もにこにこ笑顔で頷いている。海賊からの襲撃も多いということだし、そういった備えが徹底されているために怪我をしなくなれば大人しく案内されていた方が賢明ということか。

「あとは、ここにいる人間はいわゆる魚人と呼ばれる種族の方々でして…」

「魚人？」

「ええ、随分と迫害されてたらしくって、まあこんな島ですからねえ。容姿なんざ気にしやしない連中しかおりませんから、のんびりとされてますよ。」

魚人であるナミユールが、この島で迫害されずのんびりと過ごせていると聞いて、嬉しげに頷く。

「代わりに他のクルーには普通の島ってことにしておいてくれよ。折角ここまでできた楽園が壊されるのは見たかねえよ。」

「ああ、他にや他言はしねえ。そりゃ保証しよう。わかったかつ！」

マルコの言葉に白ひげが同意すれば他の者達も異論も無く。そのままサキとセイは広間から外し、他の面子も割り振られた部屋へと下がる。その広間に残ったのは支配人と白ひげのみ。

「まだ何か、言いてえ事があるようだな。」

「よく、お分かりで。」

人の良さそうな表情の支配人は、そのまま白ひげの前にて土下座をして見せた。

「貴方様を見込んでお願いの儀でございます。どうか、どうか…梅吉さんを連れて行ってはもらえないでしょうか。」

そう言い切ったニンザエモンの表情は苦渋の決断とも言える厳しい表情を浮かべていた。

「さっきの肝の据わった女だな。何だって俺にそんなことを頼む。」

白ひげや隊長達を前にして臆することなく応対して見せた女。口調は巻き舌で特徴的ではあるが、芸者の元締めをやっていたというだけはあり、度胸と色気はなかなかのものだった。ああいった女というのは筋を通さないと艇子でも動かないのが常であるのだが、なぜ、自分に託そうとするのかが理解できない。

「この島は、海軍に見張られておりますので、いつ彼女達の存在が露見し捉えられるかわかりません。この島に移住してからずっと尽

力を尽くしてください。彼女を、海軍なんぞにみすみす渡すなどできやしません。これはこの島の住人の総意でございます。そこへ、貴方様があの二人を連れて来てくださった。これは天命と断言したい。」

どうか、と深く土下座をして頼み込む支配人に、いつの間に現れたのか他の仲居や女将達まで同じく土下座で頼み込む。

「あ…あたしからもお願いします！」

その中から一際若い女が前へと飛び出てきた。芸者と同じ化粧を施してはいるがまだ17・8といったところか。その少女が、涙を流しながら白ひげに頼み込む。

「あたしのせいで、梅吉師匠やセイさんまで賞金首になっちゃったんです！あたしがっ！あたしがもっと強かったらこんなことにはならなかったのに…っお願いです！」

「小峰！お前は控えておいで。」

コミネと呼ばれた少女を支配人が嗜める。その様子に、天竜人が攫い殺される原因となった芸者見習いが彼女なのかとわかった。確かに少々幼いが将来有望な顔立ちに、声も鈴を振るような声音で、邪な男でなくとも男心をくすぐられる様な容姿である。

「あたしが、まだ変化仕立てだから上手く立ち回れなくて掴まってしまったから…。だから…」

「変化ってなあ、どういうことだ？」

なおも言い募ろうとするコミネを落ち着かせながら、支配人へ尋ねれば困ったように説明をしてくれる。

コミネなどは、古道具などが長い年月をかけて力を宿し変化した妖怪である事。

それは所謂「付喪神」と呼ばれ、ここでは赤子のような扱いになるというのだ。

どれだけ年若いのだろうと思えば、大体力を蓄えるのに百年を有し、そこから安定するまでまだ時間が掛かるのだという。コミネもつい10年前に付喪神として変化したばかりで現在は芸者としても、人間の姿で暮らしていくためにも見習いということで修行をしていたのだという。そんな年数はともかく若い少女を手籠めにしようとした、海軍の人間や天竜人に同情などは一切沸かない。

少なくとも話を聞いている限り非があるのは明らかに向こうであって、彼女達はただ、幼い家族を取り返したに過ぎない。白ひげとて、己の息子が攫われれば白ひげ海賊団全員で取り返しに行くだろう。色々話を聞いていけば、この島はそこの国よりも統率が取られている。住民が全員家族のような意識があるのがよく判る。

マルコやティーチを仲居達、島の住人全員で可愛がっていて、種族の問題ではなく彼等からしたらあの2人も子供に認識されるのである。

年齢よりも親の気持ちというものは皆共通するものだから、人間とは違う時間の感覚のため、この島の赤子は白ひげよりも年上になっ

てしまったりするという事実は、この際無視だ。

「俺は構わねえ。マルコのやつあ、どうにもあのウメキチって女に惚れてるようだしなあ。」

「ああ、それは昔からそうでしたよ。幼い時分から、あのお方を嫁女にすると言言されておいででしたからなあ。」

「グララララッ！そいついい。俺あ息子や娘は居るが孫がいねえからなあ。一人二人孫が欲しかったところだ。本人が望むんなら受け入れよう。」

「有難うございます！」

幼いマルコの様子に膝を叩いて楽しげに笑う白ひげ、それに対し再度全員で深く礼をする。

烏天狗ではないが、妖怪といえど女>として幸せになつて欲しいと願うのは皆同じなのだ。幸いマルコはサキに心底惚れているようであるし、当のサキも憎からず思っているのであればそのままくつついてもらいたいというのが本音である。それが家族としての愛情であろうと、なんであろうと上手く纏まってしまえば男女の仲というものは案外簡単に治まるものである。

君が為惜しからざりし命さへ12

セイが主に作業をする鍛冶場は、地妖精ノームのそれとは異なり日本古来から伝わる形式のものを利用している。

使用している鉱石は同じものだが鍛え方が違うだけで風合いが異なるのが面白いと、時折彼らが作業を覗きに来るほど鍛冶の腕も良い。生前跡取りにと望まれた通り、父親から鍛冶の仕事は幼少から叩き込まれていたが、本人の興味は鍛冶ではなく剣の道だった。

とはいえ、彼女が剣を抜くことは殆ど無い。なぜなら大抵は蹴りだけで済んでしまうし、剣を使うよりも先に敵を殲滅しなければなら
ないからだ。と、いうのも原因はサキなのであるが。

彼女はその性格からか、喧嘩早い傾向がある。それでも実際に喧嘩をするまでに彼女の舌先三寸で丸め込まれたり、相手にしなかったりが殆どで、傍から見たらそこまで短気というわけでもない。ただ、彼女が切れるとすぐさま足が出るのだ。

手ならば問題ない。しかし、裾を絡げて蹴りを繰り出すのはいいただけない。彼女の普段の生活からしてそうなのだが常に着物で生活をしていて、元々下着というのは腰巻と呼ばれる布を腰に巻くだけで、今で言うショーツ等はつけない。現代社会でも日本に下着が流通し一般に使用されたのは、ここ100年ほどであったというのをご存知だろうか。昔ホテル火災で、着物女性が窓から飛び降りるのを躊躇い大勢が亡くなったと言う惨事があった。これは下着をつけていなかったために、飛び降りて下半身が露出するのを恐れたためと言われている。

そう、サキはいわゆる洋風下着が落ち着かないといって身に着けるのを嫌がって使用していない。そんな状態で蹴りを繰り出せばどうなるのか。言わずもがな、蹴られる相手は桃源郷を見ることになる。そんな状況にならないように、サキが喧嘩をしだす前に先に出て相

手を倒す為に、セイが得意とする刀より己の脚力を利用した蹴りを利用するようになったのだ。

「そっぴや、タベサツチが情けない悲鳴上げてたな…。女に夜這いでもして返り討ちにでもあつたか…？」

思い出したかのように、イゾウがそんなことを言い出し、思わずマルコとティーチが目を見合わせて笑い出した。セイは無表情のままだが、それでも鳩尾の辺りを抑えているので笑いを堪えているのだろう。その様子にイゾウが不思議そうな表情で首を傾げる。

「なんだ？何か知ってんのか？」

「知ってるの何も…そりゃ、逆だ、逆。」

「逆う？つてえと、あれか、サツチが夜這い掛けられたってことか？冗談だろ」

全くもって信じていないイゾウに、必死に笑いを堪えようとするが堪え切れてないマルコが噴出し、涙を浮かべながら事の顛末を説明してやる。

「くっ芸者見習いの女がいてよい。昨日サツチに酌をしてたんだが、そのときにサツチに一目惚れしたらしくてよい…っぶ…く…っ。いや、すげえ女だい、エース以上に猪突猛進で夜這いを掛けて逃げられたって、さっき姐さんに報告きてたっよいっ」

そこまで説明して我慢できなかったのか、腹を抱えて笑うマルコに、ティーチも涙を拭いながらひいひいと笑う。

「あとで、サツチに感想でも聞いてやれ、きつと話してくれるぜ。ああ、おかしいったらねえや…。あのサツチが…っ」

「まあ、後でからかいついでに聞いてみるさ。あのサッチが逃げてどんけ凄い女だよ。昨日の女って結構な上玉だったじゃねえか。」

「いや、流石に俺もあの勢いには負ける。ありゃあ、サイクロン並だ。」

「全くだい。ティーチも上手いこと言うねい。」

そんな話をしつつ、いつの間に着いたのか鍛冶場の入り口に着き、4人はその中へと消えていった。

昼時が過ぎ、サキ達が寝泊りをしている離れの隣に設えてある座敷にて、今日も芸者達が稽古に励んでいた。

板の間に15名ほどの芸者達が並び三味線や太鼓の音に合わせて舞い踊る中、舞扇を片手に各々の体勢や首の位置、手の位置を直してやりながらサキが歩く。その壁際に正座し、座るほかの芸者達もその姿を見逃さぬように見詰め、少しでも上達しようと切磋琢磨している。その中に朝に軽い騒動を巻き起こした小峰の姿もあった。

「ほら、首の動きが硬いよ。そんなんじゃ踊りじゃなくて突っ立ってる案山子だよ。もっと柔らかく、動きに遊びを持って。」

「はい！師匠有難うございます。」

「辰亀、あんたは音をちゃんと聞きな。動きは合ってるのにノンビリしてたんじゃ、皆と合わないだろう？」

「すみません！」

普段の薄らと浮かべた笑みの欠片も無く、真剣に芸を磨こうとするサキの姿に、周りの芸者や見習い達も必死に見習おうと待機している者達まで手の動きや首の動きだけでもと練習を重ねる。芸者は基本歌と踊り、楽だけで成り立っているようにも見えるが実際はそうではなく、礼儀作法や話術、そして知性を磨かなければ出来ない仕

事でもある。

この島ではなかなか無いが、客の好みはさまざま異なるため客のニーズに合わせた世情の話や古典などの知識の幅が要求される。ありていに言えば、容姿だけでなく知性、柔軟性などあらゆる面を磨き高めなければならぬ。世の男が芸者を口説きたがるのは、その女性としての理想像を具現化しているかのように見えるからであろう。

「本日の稽古は此処まで、みんな、お疲れさん。」

「梅吉師匠、本日もご教授有難うございました。」

板の間に弟子達が全員声を揃えて礼を言いつつ、そのまま出て行く。これから湯浴みをし、着替え芸者としての仕事に就くのだ。

それを見送ってから、一息つく、その横にある窓へ視線を向けてサキが声を掛ける。

「そんなに珍しいなら、中へ入って見ていってくださってよかったんですよ。」

「……ごめんなさい。つい、魅入ってしまった。」

そう、おずおずと入り口へ姿を現したのは白ひげ海賊団のナースが数人。履物を脱いでどうぞ、と言われれば、恥ずかしそうに履物を脱いで中へと入ってくる。サキは隅に置いてある座布団を出して板の間へと置き座るよう促す。

「私らと違って正座なんて慣れてないでしょうから。この上に楽にしてくださいな。秋島とはいえ、昼過ぎからは暑くなりますからね。ちよいとお待ちを。誰がいるかい？」

「はい、お呼びでしょうか？」

「おや、小峰。悪いんだけどね、こちらさん方にお茶をお出ししておくれ。」

「はい！只今！」

いつの間に現れたものか、座布団に足を崩して座るナースの後ろから、「失礼いたします。」と小峰が各々の前に茶を置いてゆく。その茶の横に小さな花型の干菓子が増えてあつたりと、17・8に見える少女のその所作もどこか洗練された動きで、ナースたちもどこかうつとりとした眼差しでそれを眺める。

「ごゆるりと。また何かございましたら、お呼び下さい。」

「ありがとよ。下がっておいで。ささ、あんな外にいたんじゃ喉もお渴きでしょう？」

その嫌味の無い心配りや言葉を掛けるタイミング、容姿だけではない魅せ方にナースであるアンリエッタは背筋に電撃が走ったような感覚を覚えた。外見だけの色気ではなく女>というもの。先ほどの若い少女もそうなのだが、仕草一つ、配慮一つで嫌味のない色気を醸し出す、そのゲイシャの凄さに感動を覚えていた。

「ありがと…。私は白ひげ海賊団でナースをしているアンリエッタよ。お稽古中に覗いたりしてごめんなさい。」

「いえいえ、こちらこそお礼を申し上げたい所ですよ。人様に見られることで、あのこたちの稽古にも熱がはいりますからねえ。お気にせず見に来てやってくださいな。大抵この時間には、ここで稽古をしておりますから。」

「本当にゲイシャって凄いのね…イゾウ隊長から聞いたことがあつたけれど。許されるなら女としてここで修行したいくらいよ。」

「おやおや、十分お綺麗でいらっしゃるってえのに…まあ、女は欲張りなモノでございますからねえ…」

からかい口調の梅吉に、アンリエッタだけでなく他のナースも微笑

みながら、肩の力を抜く。3億超えの賞金首である毒婦・ウメキチがどんな人物なのか、単に興味本位で覗きに來たのだ。そんなことなどお見通しだろうに、笑顔で出迎えてくれてこうやって歓談をしている彼女の度量の深さに、ナース達は感服するしか出来なかった。昨日の宴の席では珍しく皆酒が回り、彼女も軽い挨拶だけして下がってしまつたようだったが、それでもその所作や眼差し、周りのナカルの羨望の視線からも彼女が同性から憧れを抱かれていることがよく判つた。

實際こうやって話してみても判るほどに、その相槌や笑い方、口元を隠す指の動きにもく色香くが漂う。それなのに口調は清々しいほどにサツパリとしていて嫌味がない。同じ女であることが恥ずかしいくらいに、アンリエッタを含めたナース達は彼女に魅せられていた。白ひげから許可をもらえれば、滞在の間ここに本当に見習いで入りたいと思うくらいには。

「マルコ隊長やティーチさんが、お世話になつていたつて聞いたけど、納得ができるわ。だつて二人とも礼儀や作法には厳しいものゝ、自分達の部下達にも徹底しているし。」

「昔はてち坊、いえ、ティーチもしょっちゅう怒られてましたがねえ。廊下を走つたり、おねしょがなかなか直らなかつたり。」

「やだ！ティーチさんつておねしょ直らなかつたんですか？意外…」
「たしか7歳くらいでやつと直つたようだけどねえ。マルコ坊やはすぐ直つたのに…」

どうやら会話の内容が、マルコやティーチに移つたようで彼等の幼い頃の黒歴史が暴露され始めた。女というものは、いつの時代もこういつた話が好きなのかナース達は楽しげに聞いている。

そんな中、アンリエッタが思い出したかのように梅吉へ尋ねた。

「そういえば、ゴーやっていうものはなんなのかしら。以前隊長達が話してただけけど、悪魔の実よりもまずいつて聞いたわ。」

「ああ、ゴーヤかい。あれも今となっちゃ笑い話さ。瓜科の野菜でねえ、別名が苦瓜っていうものなんですよ。名前の通りエグミと苦味が強くてねえ、まあ、普通は生では食べないで、塩もみしてから炒めたりして食べるんですよ。」

「そんなものを食べるの?!……本当に食べ物なの?」

「いえいえ、それが食べると肌の調子を整えてくれるし、暑気障りにも効くんで女の味方なんですよ。で、そいつを生で齧っちゃったんですよ。そりゃえらい騒ぎになりましたね。ティーチは悲鳴だかなんだかわからない声を上げるし、マルコ坊やにいたっては泣き出して、いくらあやしても止まらないし。」

昔のことを思い出しているのであろう、サキの表情が柔らかく微笑むのにナース達は感嘆のため息を零した。昨日のマルコの様子からおそらく彼女を思っているのだろうとはすぐにわかった。密かにマルコはナースの間でも人気が高いので、今回もやつかみが半分あった為どんな女か確認しようとしたのだが、これが大きな間違いだった。同性からみてもため息が毀れるような女っぷりでは勝ち目が無い。

だが、そこは転んでも只では起きないナース達だ。マルコを落すだとかはもう思考の彼方で、むしろ彼女に傾倒し女として色々師事を受けたいと思うようになってしまった。只でさえこの島の女達はレベルが高いのだから、自分達も頑張れば近づけるかもと思うのは至極自然なことだった。

「ねえ、ウメキチさん。船長の許可をもらえたら、私達を、見習いとして弟子入りさせてもらえないかしら。」

「おや、なんでまた……」

「だって…女だもの。ゲイシャは女の憧れそのものだわ。近づきた

いじゃない。もちろん時間の空いたときだけで良いわ！」

頼み込むナース達の剣幕に、サキも苦笑を禁じえない。それでも、白ひげの許可があればと承諾した。以降ナース達が白ひげから許可をもぎ取り弟子達に混じって稽古に励む姿が見られるようになった。

君が為惜しからざりし命さへ13

それから3週間ほど経ったある日、大きな船舶が沖に現れたと見張りの魚人から報告が投げられた。港は大きいため特に問題なく停泊は出来るだろうがどうにも、補給のための停泊ではないようだった。そのため見張りは海賊ではないかと辺りをつけたらしい。

「おや、ひと月ぶりの襲撃ってえやつだねえ……。だが、なにやらキナ臭いじゃないか。本当に海賊なのかい？」

宿の常に使っている離れではなく、支配人や女将などが使う部屋でサキが煙管を咥え紫煙を燐らす。その目は窓の外、海岸の方へと向かっていた。その近くで茶を入れていた女将も、その眉間に皺を寄せてその言葉に頷く。

「そうですよ。この辺りには他に島がないってえのに港に入らない……怪しいことこの上ないですよ。」

「そいつぁ……もしかしたら罔なんじゃないかね？海軍の。」

いくら海賊でモーガニアとはいえ、この島を最後に消息を絶っているのと調べれば直ぐにわかることだ。とはいえ、この辺りは大型海王類が多く生息しているから、その仕業ということもあるのだが。

「で？偵察の奴の報告は？そろそろ戻ってくるんだらう？」

「大変だよ！」

偵察の人間が戻るだろうと話をしていたところで、キヌが部屋へ飛び込んできた。その慌てようからしてどうにも嫌な予感しかない。

「あいつら、海賊じゃなかったんだよ！梅吉さん、海軍お偉いさんの私用船みたいだよ。いま島の連中に触れ回ってるから、ノームの旦那方もみんな避難してる！セイさんにも伝えておいたから隠れておいた方がいいよう！」

なんだって海軍の奴等がくるんだいつとキ又が爪を噛み苛立ちを隠さない。以前海軍の将校が来たときはサキが相手をしたのだが、そのときには梅吉とは名乗っていない。なんとも言いがたいが本能からか咄嗟の偽名で「葛葉」（クズハ）と名乗っている。どうしてそう名乗ったのかは自分でも判っていないが、そういった直感には逆らわない方が賢明だと長い時間のなかでわかっている。

「……もしかしたら以前にこの島に来た将校の旦那かもしれないねえ……島の特産物とか気に入ってたし、また来るみたいなこと言っただが、それならね。うち……何もこの時分にやってこなくとも良いだろうに……」

気に食わない輩であろうとも、客は客である。一応様子を見て相手の希望を叶えてさっさとお帰り願おうということになった。だが、それも狂わされることになる。

「まだクズハはいるか？もう他の座敷へ行ってしまったか？」

「まあまあ！これはサカズキ様ではございませんか。葛葉でございますか？いかがされましたか。」

「うむ。少し話があつて此処まで来た。いるなら、相手をしてもらいたい。」

「はあ、かしこまりました。お部屋へご案内させていただきますので、少々お待ちくださいませ。」

それを受けて小峰が慌ててサキのいる部屋へ伝えに行く。

「師匠！海軍のサカズキ様が、葛葉をだせと。」

「……なんだって？面倒だねえ……直ぐに行くと伝えておくれ。それと坊や達を上手く抑えておいておくれな。」

「ええ、姉さん。に、してもあの男……まさか姉さんを身請けしたいとか言い出さないでしょうね。いやですよ、あんな男が義理でも兄になるなんて。」

「よしとくれ。あんな敵ついの好みじゃないよ。断るに決まってるだろ。」

セイの言葉に、嫌悪感を前面にだしたサキが、器用に芸者の姿へと変貌していく。紅を塗り、簪をさして戦闘準備を完了。黒い留袖の裾を翻してサカズキの待つ部屋へと向かう。

廊下を衣擦れの音だけが支配し、慣れた仕草で部屋の前に座り、中へ声を掛ける。

「葛葉にございます。お入りしても？」

「来たか。待つちよったぞ。」

相手からの返事を待つてから両手で襖を開け、静かに中へと入り戸の半分を開けたまま中へと進む。これはこの宿独特の習慣で、芸者と呼ぶ際、1対1の場合は襖を半分開けることになっている。これは芸者に無体を働こうとすれば直ぐに回りに露見するようになるという配慮から生まれた風習で、それを破れば金輪際この島に来ることはできない。

「お久しぶりでございます、サカズキ様。本日は私に御用とうかがいましたか……どのようなお話でしょう？」

今回は酒も出ていないので茶のみ、客ではなく話があるというこ

となので向かいへと座るサキに、サカズキは茶を飲みながら話を切り出そうとしない。その煮え切らない様子にサキは首を傾げた。

「サカズキ様？」

「うむ…。」

どうにも図体のデカイ厳つい男が、空になった湯呑みを上げたり下げたりとしつつ、こちらに視線を一切寄せないのは異様といえよう。その様子からおそらくセイの言っていたく身請けの話が現実になりそうだと内心ため息を零した。

「わしは、ちまちましたのが苦手じゃあ。クズハ！単刀直入に言うぞ！」

「はあ。何でございましょう？」

「わしは、お前を身請けしようと思うちよる。じゃけん、付いて来てくれないか。」

「お断り申し上げます。私は芸者でございます。芸の道を捨てるなど出来やしません。どうかお引取りを。」

一大決心ともいえるようにサカズキが話を切り出すのを、即答ではつさりと切り捨てたサキ。

大体にしてこの島で海軍に對しいい感情を持っているものはまずいない。ついでこのサカズキという男は、サキの生まれた時代によくいる男の傾向そのもので、どうにも彼女からしたら嫌いなタイプなのだ。

顔の厳つさはさておき、正義ということに重点を置きすぎ、周りが見えていないまるで風船がギリギリまで空気を入れられたかのような性格の男。無か有か、善か悪か、まるで縫い代の無い着物のような考え。少しでも力を入れれば壊れてしまいそうで、極端な、いわ

ば昔の日本帝国軍そのもののような考えは、彼女にとって嫌悪でしかない。

もちろん、礼儀正しさや金払いの良さなどは評価できるが、それだけである。

嫌悪が強い相手にどうして身請けされなければならないのか。サカズキに特別な感情などはなく、只の客と芸者の関係だというのに何を勘違いしたというのか、この男は。

「もちろん、芸事ならいくらでもやってもらって構わん！考えてはもらえんか？」

「サカズキ様、何度も同じことを言わせないで下さいまし。お断りいたします、とお答えさせていただきました。私はこの商売に誇りを持っております。」

口元の笑みが湛えたまま、しかしその目は己の信念を揺るがすものは許さないという、強い意志の炎が燃えている。その炎にサカズキは思わず息を呑んだ。覇気というものではない、芸に全てを捧げる女の気迫。

「秋空を彩る野鳥はそこを飛ぶからこそ、その良さがわかるってえもの。手前てめえの駕籠に入れたところで良さなんぞ霞むだけですよ。…どうぞお引取りを。」

そのままもう話すことは無いとばかりに、その場に平伏してから部屋を後にするサキにサカズキは拳を握ったまま俯いていた。

サカズキとて、直ぐに了承してもらえとは思っていない。それでも芸一筋に生きる彼女の生き様に惚れて、身請けしたいとまで思いつめたのだ。結果彼女の信念を折るものと判断されてしまった。

その後、部屋に案内した仲居がサカズキを玄関へと案内する道すがら、サカズキは名残惜しいのか幾度かサキの後姿を目で追いかけて

いた。

そのまま先ほどの部屋へと入れば、中で待っていたのであろう女將とセイが心配そうな表情でこちらを見てくる。

その私選を受けつつ脇息へと持たれかかれれば、女將であるタキが焙じ茶を入れて出してくれる。

「ああ、ありがとうよ。はあ……くたびれた。ああ、悪いけどお茶じやなくて酒にしておくれ。」

ちょうど良い温度のそれを一気に飲み干して酒を頼めば、タキが苦笑しながら冷酒を注いでくれる。それを立て続けに2杯飲んでやつと人心地がついたのか、大きいため息をついてから天井を仰ぎ見た。その様子に、セイが膝をにじり寄せて尋ねた、

「大丈夫ですか？結局なんだったんです？」

「セイの言うとおりだったよ。私を身請けしたいんだとさ。っはん！速攻で断ってやったよ。」

あそこまで言っただけでも身請けをと言ひ募るのならば島からたたき出してやるところだが、ああいった手合いは妙に物分りがいい部分もあるのだ、おそらくもう来ないだろうと予想できる。

なにせあの男の己の信念で動く男なのだ。それを折られるということがどういふことが判らないほど、馬鹿ではあるまい。

「梅吉さん、お疲れだったねえ。」

「任左衛門、どうだったい？」

玄関でサカズキを見送っていた任左衛門が手ぬぐいで顔の汗を拭いながら戻ってきて、サキに労いの言葉を掛けた。

「ああ、身請けは諦めるらしいよ。申し訳なかったと伝えてくれてさ。ま、本人もすっぱりと諦めが付いたようだからいいんじゃないかね。」

「ならいいがねえ。まったくこっちは肝が冷えたよ。奴さん達の船は上手く隠したのかい？あの赤犬が気が付かないんだから策は講じただろうが。」

港には白ひげ海賊団の船が停泊しているのだ。あの堅物がみて暴れだしかねない。それを尋ねれば、満面の笑みで任左衛門が応える。流石は古狸、抜かりは無いらしい。

「ああ、只の貿易船と護衛艦にしか見えないようにしてるからね。あいつ等は気にしてないようだよ。島からでたら避難してる皆を戻してあげないとねえ。」

「そいつは上出来だ。もう、こんなのはこりごりだよ。」

幸いこの島には幻覚を見せることに長けているモノが何人かいるため、事前に船にマヤカシを掛けていたのだという。その辺りの配慮はさすがとしかいえない。そう思いながら、酒の入った湯のみを傾けながら、安心したようにため息混じりの苦笑を浮かべた。

後日談

「ええ?!、あの赤犬が来てたんですか?!」

「そうなんですの。梅吉師匠を身請けしたいと言い出してきました。まったく海軍の分際で身の程を弁えろでございます。」

稽古の合間の休憩中に、臨時で弟子入りしたアンリエッタ達が小峰から事の顛末を聞いて愕然としていた。

確かにあの日は、稽古も無かったし白ひげの乗組員全員が島の中央にある、施設の病院で一斉健康診断をどうかと言われ全員で行っていたのだ。

船でやる検査にも限度があるからと言うこともあつて、早朝から全員で施設に籠っていた。それも赤犬の来訪のためにと聞けば納得である。

「にしても、あの赤犬でさえも袖する師匠つて…素敵ね！ああなりたいわー！」

「アンリエッタさん達もこの短期間で踊りも三味線も上達してきますし、芸者としての素質は十分だと思いますわ！」

「嬉しいこと言ってくれるのね。そんなこといわれたら張り切っちゃうわ。」

なんとも和やかに、他の弟子達と共に歓談していると、そこへマルコが通りかかった。話の内容が聞こえていたのだろう、眉間に皺を寄せている。

「姐さんが、赤犬の野郎に言い寄られてたのかい？」

「あら、マルコ様。ええ、でも師匠つたらそれはもうはっきりと断ったんです。あのときの啖呵は忘れられないです！」

「え？え？何ていつてたの？聞きたい！」

赤犬の申し出を退けたという啖呵に興味が沸いたのか、周りの皆が興味深げに小峰に注目する。その視線に少々照れながらも小峰があのときのサキを思い出しながら言った。

「確かに秋空を彩る野鳥はそこを飛ぶからこそ、その良さがわかる

つてえもの。手前の駕籠てめえに入れたところで良さんぞ霞むだけですよ。……どうぞお引取りを。>っていつてました。」

秋空とはこの島で、野鳥とは舞い踊る芸者を指しているのだろう。芸に生きる芸者を囲ったところで、舞い踊っていた頃の女ではないのだという意味なのであろう、その言葉に、他の弟子達も、憧れをこめたため息を零す。

「あゝ……やっぱり師匠はカッコイイわあ。」

「この島じゃ、こういうのを、<粋>とか<気風がいい>っていうんですよー。」

「まあ、なんにせよ姐さんが身請け話を受けなくて良かったよい。」

ほうつと安堵のため息を零したマルコに、皆一様に視線を向ける。マルコが梅吉に思いを寄せてるのは皆周知であるし、なかなか進展しないのも知っている。

少なくとも、ああいった切り返しの出来る<良く出来た女>を、<モノ>にするには少々マルコでは物足りないかもしれないとアンリエッタたちは思った。この頃になるとアンリエッタ達の<女>としての質も上がってきて人を見る目というものが養われてきている。確かにマルコは魅力的なのではあるが、どうにも決定打に欠けているのだ。

「……………なんだよい。」

「いえ、マルコ様、ここいらで気を張って頑張らないと、いつまで経っても師匠をモノにできませんよ?」

「そうよね。隊長が頑張ってくれないと。一緒に船に乗ってくれば、私達も嬉しいんです! 散々女遊びしてたくせになんで落とせないんですか!」

いわれなくとも判つてるといいたいところだが、如何せん生きた期間の差が激しすぎて、逆にサキに翻弄されっぱなしというのが正直な所だ。それをどうにかしようとして毎回空回りをしているのだが、ここでマルコは一つ思い違いをしている。

サキ自身はマルコを本来子供だとは思っていない。しかし子供のように甘えてくるから、そう接しているだけのことだ。

要はちゃんと男女の仲というものを理解して向き合えば、それにちゃんと応えてくれるのに、基本的な所を見落としているだけのこと。そこにマルコが気が付けるのがいつのことなのかはわからないが、島の中ではこっそり賭けの対象になっていた。もはや娯楽と化している。

もちろん白ひげは皆には言っていないが、落せるほうに賭けていたりする。

君が為惜しからざりし命さへ14

早朝、セイの一日は朝日が昇らぬうちから開始する。

目覚めると、前日のうちに出しておいた着物に香を焚き染めることから始まる。狼となつてから異常に鼻が利くようになって入るが、この習慣だけはやめようとは思わない。

その香りは、セイの感覚に合うよう調整されているので常人であれば判るものではない。それでも、この島では特に鼻が利くものが多いため、その程度の香りで丁度良いようだ。

焚き染めている間に、寝泊りしている部屋に併設されている道場で日課の鍛錬をし、その後汗を温泉で流し、身支度を整える。

そして香を焚き染めた着物を身に纏い、井戸で汲んだ水を、自身で世話をしている君影草の手入れをするのだ。身に纏う香も君影草と芍薬の芳香で、無表情ではあるが、それでも彼女にしては穏やかな眼でその香りを愛でている。

彼女の義姉であるサキは、意味ありげに微笑むがそれについては何もいわない。その香りの名のごとく誰かの面影を想つていても、それを口に出さない限りはサキも口を出すつもりはないからだ。

勿論彼女が言い出せば、サキの持ちうる能力をフル活用して成就させるつもりなのだが、逆にそれを分かっているから言い出さないの

かもしれない。

着替え終わるその頃には日も昇り、食事の時間となる。義姉の寝泊りをする離れで共に朝餉をとり、その後仕事場である鍛冶場で槌を振るう日々。

最近では、昔海岸で拾った子供が大人になり、この島へやってきて一緒に食事をするようになっていた。共に鍛錬をしたり、鍛冶仕事をしたり、義姉の補佐をしたりと子供たちと一緒にできることは多くなっではいたけれど、相変わらずセイに怒られているし、拳骨を落とされるのも変わっていない。

すでにセイよりも身長も横幅も大きいというのに、そのあたりが変わっていないことに、内心呆れながらも安堵してもいた。

マルコが、セイや義姉であるサキと同じ妖怪になろうとしていたことには驚きもしたが、あの義姉の姿を見てお嫁さんにすると思っていたマルコのことだ。何が何でもそれを実行するだろう。

まさか、あんな奇妙な髪型になっているとは思わなかったのだが……。むかしから奇抜な転び方をしていたし、基から常人とは違う視点をしていた子だ、髪型が多少奇抜でもおかしくはないのかもしれない。

「なあ、にいちゃんっていつも同じ香りをさせてるけど、なんの匂いだ？昔はつかってなかったよな？」

「…ああ、そうだな。」

ふいに、ティーチがセイにいつも花の香りをさせていることについて尋ねた。それに対してセイは、明確な答えを出さず淡く微笑んで有耶無耶にしよう。

そんな彼女の反応にティーチやマルコも口には出さずとも、尊敬し憧れる<兄>に口には出せない想い人がいるのであろうと考えた。

（いわないってこたあ、口に出しちゃいけねえ相手なんだろうなあ。）

兄思いな弟であるティーチは、ただ、純粹にそんな彼女の想いが成就すればいいと願っているし、幸せでいてほしいと願う。

幼い頃に受けた厳しいけれど、優しい愛情は今もティーチやマルコの中に息づいているから。

今日も鍛錬の合間、セイが何処か遠くを眺めるように海を見ている姿を、見守るように二人で眺めるのだ。

君が為惜しからざりし命さへ15

海賊といえは何を連想するであろう？酒盛り？お宝？冒険？

このイナリ島の宿は1件のみ。しかしそうとはいえ、白ひげのクルー達が泊まってもまだ部屋に余りがあるという宿は、一体どれだけ広いのか。

この不思議一杯の島は、彼らからしたら冒険をするためにあるようなものなのだ。この宿とて例外ではない。

とはいえ、一般クルーには普通の島としか説明していないのだから、冒険に誘えるはずもない。となると自然に隊長格同士であちこち出かけることとなる。

ハルタはこの前ニンザエモンに連れて行ってもらった牧場で、幻獣たちと戯れることに夢中だし、イゾウはこの島の鍛冶が興味を引いたらしくノームの所へ入り浸り。

ビスタは島で作られるさまざまな果実酒の製造過程を見せてもらったりして、ナミユールは島に移住してきた魚人達と過ごすことがほとんど。

ある程度の年齢を重ねた乗組員は、温泉とうまい酒と料理に満足している。

「まー坊、久々に手合わせ等やらんか。あの童^{わらし}がこの年月で、いかに強うなったか確かめたいからな。」

セイの仕事の手伝いを終えたマルコを待ち構えるようにして、烏天狗の兄弟に捕まり引きずられる様にして来たのは鬱蒼と繁った森の中。

幼い頃からマルコは彼らに、こういった森の中でく遊んでもらって>いた。

何もない場所での空中戦はいかようにでも戦うことはできるが、こ
ういった動きを制限される場所での戦いも想定していなければなら
ない。

船内での戦いもそうであるし、街中でもありうる事。

黒い艶やかな翼を羽ばたかせて風を纏いながら此方を見やる烏天狗
達に、マルコも不死鳥へと変化し身構える。妖怪のすごい所は、そ
の体の丈夫さとロギアにも干渉が可能というところである。

此方が渾身の蹴りを放ったとしても、それを風で押し返しつつ翼
のコントロールを奪おうとするし、面白そうだからと飛び入り参加
したエース（どうやって嗅ぎ付けたのかは謎）。彼が2番隊を率い
る隊長であるということは戦闘力の高さもよく解る。しかし烏天狗
にいいように翻弄されるのは、如何なものなのか。

本来ロギアは覇気など一部を除いて、物理攻撃が無効化される為防
御を無視した戦い方をする傾向がある。これは、不死鳥であるマ
ルコも、＜再生＞という能力故に同じような傾向に該当する。

しかし、驚いたことに妖怪には一切これが通用しない。いと簡単
に先ほど飛び掛ったエースの片足を掴んだクロウが、空中でジャイ
アントスイングをしてコスケへと放り投げ、体勢の整っていないエ
ースの横腹にコスケが蹴りを入れる。

蹴りをまともに喰らったエースがそのまま地面に激突し、その衝撃
に苦しげに呻く。一応手加減をしてはいるようではあるが、能力者
のエースが手も足も出ない状態でここまでやられるのを初めてマル
コは見た。

（……的確に苦手な角度から攻めてくるね……。コンビネーション
が良いだけに嫌な相手だい。）

元々天狗は集団で行動する種族である為、空中戦では単体でいるマ
ルコには歩が悪い。しかし、あの子供の頃と比べられては、こちら
としても嫌だと思うわけで。

「オレがあん時のガキのままだと思わねえほうがいいよい！」

蒼い燐光を纏いながら力強く張り出した枝を上手く飛び交いながら、マルコの戦闘スタイルである蹴り技を仕掛ける。クロウの死角である左側の下から蹴り上げようとすれば、その真後ろからコスケの真空の刃が攻撃を阻もうと襲ってくる。

翼を翻して風をやり過ごそうとしても、クロウがその進行方向へ移動してそれを阻む。

そのまま背中に刃を受けてしまったマルコは、その傷を再生の炎で癒しながら枝から枝へと飛び移る。再生の能力があると判っているからか、二人の攻撃には遠慮がない。とはいえ、その再生能力にも限度があるから、そこまでこられたら嫌でも白旗を揚げなければならぬのだが。

「どうした童よ、小童のままではないというのを見せてくれるのではなかったか？」

「言われなくても！」

この鳥のジジイどもめ！と内心悪態をつきながら、突っ込んで言うては返り討ちにされるという行動を繰り返していた。どちらにせよ、翼や風の使い手である烏天狗に空中戦を挑む方が間違っているのだ。

結局ボロボロになるまで転がされ、といっても再生の能力で身体は傷一つ残らないため、マルコのプライドだけが傷ついたといえる。少なくとも白ひげ海賊団1番隊を率いる隊長としての面子など丸つぶれである。

結局のところ、烏天狗としては再生の能力に頼りきった捨て身の戦闘スタイルを更生させたかったようであるが、そうになると戦略や他の部分にも関わる為、一朝一夕でどうにかなるようなものではな

ったようだ。

「……酷い目にあったよい。俺あ一応人間だったのに、手加減なしかよい。」

「妖怪になりたがってる癖に、よう回る口だな、小童。」

「童^{わらし}だけじゃなくて小童^{こわっは}呼ばわりかよい！」

からからと楽しげに笑う烏天狗に、恨み言を零しながら気絶しているエースを背負いつつ戻るマルコだったのだが……宿へ戻った後

「呆れた…いくら何だって天狗に空中戦を挑むなんて、まー坊いくら海賊が冒険好きだったって限度があるよ。そういうのは、ただの馬鹿ってえんだよ。」

そうサキに、呆れた表情で告げられつつセイにまで、冷めた視線を投げられてしまったマルコはかなり本気で落ち込んでしまい暫く船に籠り、ティーチに心配を掛けつつイゾウ達に爆笑されたという。

君が為惜しからざりし命さへ16（前書き）

お気に入り登録本当にありがとうございます。

別というか、派生で小峰の話を書こうかと思うのですが…読みたい
っていう方はいらっしゃるのでしょうか…。

君が為惜しからざりし命さへ16

久しぶりにセイと手合せでもしようと、ティーチとマルコがセイの仕事場へ尋ねると誰もいない。それに顔を見合わせ首を傾げていれば、そこへサキがやってきた。

「セイに用でもあんのかい？あの子は今農場の方へいつてる筈だよ……たしか糸を紡ぐとか言ってたはずだが。新しい服でも仕立てるんじゃないかねえ。」

「糸？紡いでどうすんだ？糸作って服を仕立てるって……？」

「何言ってるんだろうね、この子達は。…糸を紡ぐんだから布を織るに決まってるじゃないか。基本この島じゃ全部自給自足なんだよ？糸つむぎから機織り、仕立てまで、島の住民なら性別関係なくほとんどのやつがやるよ。」

折角だから案内しようということ、弟子のアンリエッタも伴い4人で農場へと向かう。

「……アンリエッタ、お前姐さんに弟子入りしてんだろ？稽古はどうだ？」

「そうですね、正直きついですけどそれ以上に楽しいですよ。ただ、長唄とかを覚えるのが苦手ですけど。」

道すがらティーチがアンリエッタに弟子生活の塩梅を尋ねれば、和服姿のアンリエッタが笑顔で答えた。キツイと口では言うものの、よほど楽しいのか以前よりも女っぷりが上がっているようにも見える。

極上の女達に師事を願っているのだから、変化がないならば稽古をサボっているということであるし、真面目に稽古をしているのだろ

うアンリアッタの評判も与一からよく聞いていた。

「今はく松竹梅>っっていう長唄を教わってるんですよ。」

「それ、いろいろ種類あるけど…俺が知ってるのだとしたら、ずいぶんと色っぽい歌を習ってるんだな……」

「そうなんですよ。あれって解釈すると色っぽいどころじゃないですけど。」

二人で長唄の話をしているが、ティーチは別に師事を受けていたわけではない。サキがいろいろ歌っているもので気になったものの題名を尋ねたりしているうちに覚えたものだ。

中には子供に聞かせてはまずいだろうという艶めいた歌も多いのだが、芸者というものは何でも歌えるのが当然と考えるサキのことだ。何の気なしに歌っていたに違いない。

余談ではあるが、ティーチやマルコは横笛を嗜んでいる。それは、妖怪達が各々の得意なことをティーチ達に教えていた結果だ。

それに対し、サキやセイが、いったい子供たちを何にならせたいのだ？と笑って見ていたものである。止めないのは、何でもやらせて見せることはいいことであると思っているからであろう。とはいえマルコは才能がなかったのか、吹いても音程にすらならないのであきらめている。彼の場合は戦闘スキルにのみ特逸した才能があり、文芸の才能には恵まれていなかったようだ。

それでも、練習を重ねた甲斐あってかその腕前は、時折イゾウがティーチに強請って横笛を吹かせて肴にし、酒を楽しむくらいにはなっていて。芸の道は深く険しいが、少しでもその腕前になるということはそれなりに才能もあったのかもしれない。残念ながら三味線は子供の指では無理があり、ティーチも腹が邪魔で習得には至らなかった。

島の裏手の農場は作物だけでなく、妖精たちの集落がある。そこで

飼育している蜘蛛が細い糸をだすのでそれを紡いで機織りをするのだ。一般のクルーはこの島が妖怪の島だということは知らないが、弟子入りしたナース達は弟子入りの時にそれを知らされている為に問題はない。

芸者修行をするというのはこの島の誉れとなるので、彼女達は人間の身でありながら弟子入りしたとして一目置かれる存在で、男衆から秋波を送られるほどだ。とはいえ、彼女達はあくまで臨時の弟子入りなので、流石に本気ではないだろうが。

そうこうしているうちに集落の入口へと到着し、妖精たちが道案内をするべく出迎えてくれる。彼らの身長は凡そ150〜160位で華奢な体つきをしている。中性的な容姿が多く服装もゆったりとしたものが多いので一見すると性別がわからない。子供には羽が生えているのだが成人するとその羽が無くなる為、表で商売を出来る種族の1つでもある。

ここの特産は、機織物が中心で絹のような光沢と丈夫さでは定評がある。この系の原材料である蜘蛛の糸なのだが、特殊な蜘蛛で餌は鉱石のみ。鉱石の硬度により糸の強度も変化し、色も千差万別。主に防具の繋ぎとして使われていたものを任左衛門が、織物などに加工してみてもどうかと提案したところ、人気を博したものである。そんな場所にセイが来ているということで案内をもらえば、小型犬程の大きさの蜘蛛が入れられたゲージの並ぶ小屋へとたどり着いた。

しゃりしゃりと、かすかに何かを削るような音があちこちから聞こえる。おそらく餌である鉱石を食べている音なのだろうそれは、不快なものではなく、むしろ風に木立が揺れている音に似て落ち着くような音だった。

「蜘蛛っていうからもつとグロテスクだと思ったら、そうでもないのね……。むしろ綺麗……」

どこか見惚れるような口調でアンリエッタが言えば、なるほど蜘蛛とは呼ばれているが、精巧なガラス細工のような外見のそれは蜘蛛でありながら芸術品を眺めるような感覚であった。

その一角でセイの姿が見えると4人はそちらへと静かに歩み寄っていく。

糸紬用の椅子に座ったセイが、蜘蛛の作った複数の糸玉を縫り合せ1本の糸へと変えて紡いでゆく。黒に近い青い其れを足元の板で調節しつつも均等な太さに紡いでいく様子は、感心するしかできない。椅子の隣に置いてある籠には既に紡ぎ終えた同じ色の糸がたくさん入っている。

「いい色じゃないか。何を食べさせたんだい？」

「刀鍛冶に使う鉱石ですよ。あれは青みが強いので、丈夫さもいいかと。」

サキが話しかけても振り返ることなくセイは返事を返す。近くを見れば他の妖精たちも同じ色の糸を紡いでいるようで、鉄紺色の糸が奥の籠に積まれている。

「合わせる色は決まってるのかい？」

「いえ…これからです。」

「その色ならいろいろ合わせやすkarうよ。紅碧ベニみどりの艶消しがあっただろう？あれか銀鼠ぎんねず、ああ…勿忘草色なんかもいいだろうねえ。」

そうですね…と何やら考え込んだセイに他の物がサキの言った色の見本を持ってきて紬終わったに合わせてみせる。

何時になく真剣に悩むセイの姿に、ティーチとマルコは顔を見合わ

せ
楽
し
げ
に
微
笑
ん
だ
。

君が為惜しからざりし命さへ17

結局縁取りは銀鼠ぎんねずみにすることにしたらしく、その色を出す鉾石を食べさせた蜘蛛の糸玉を取りにマルコとティーチが向かった。糸を紡ぐのに最低でも30玉必要ということだったので、しっかり籠を持つて。

気分はまるでく初めてのお使いのそれで、自分たちの年齢を忘れていたのだろうかと思えるほど楽しげに向かっていった。

糸を紡ぎ終わったセイが、今度はその糸の籠を農場の前に置いてある荷車に積んでいく。そして隣に併設している加工場へ持っていくのだ。

「あの蜘蛛綺麗でしたね。糸も綺麗だったし…シヨールを編むのにあの糸玉どれくらい必要なのかしら…」

「襟巻き程度なら10個くらいで十分だろうよ。気に入った色でもあったのかい？」

アンリエッタは元から虫が苦手というわけでもなかった。しかし、先ほどの蜘蛛達は例え虫が苦手でも、あの美しさに思わず見とれてしまうのではなからうか。

作られる糸も光の加減で淡く光っていて、それでも華美過ぎることもなく控えめな美しさだった。

「自分で糸を紡ぐってんなら、糸玉だけ買えばいいさ。そうすりゃ10玉で5000ベリー程度で済む。商品になっちまったらもつと掛かるがね。」

「だったら私自分で紡ぎます。でも糸車なくてもできるものかしら…」

糸を紡ぐだけでも時間が掛かるため、航海中にできるならばと思つたものだが、アンリエッタ達が乗っている船は海賊船でそんな物があるはずもない。

いくら白ひげの船が大きいとは言えあくまで船なのだ。もちろん、船乗りならば余裕があつたとしても無駄な物を載せるようなことはしないものだ。

「ああ、独楽みたいに回して使う小さな糸車があるから、あれを使えば船でもできるよ。その代わりあんまり細くはできないがね。」

後で見せてもらえばいいといわれれば、嬉しげにアンリエッタが頷く。

マルコが惚れている女という事で、彼女に対し良い感情を持つていないナースも多くいた。しかし腕っ節や気風の良さ、艶めいた色気もあるが何より海賊の気質に似た所が好感が持てる。

そして当の本人であるマルコを相手にせず、母親のようにからかう姿を見ていれば、邪な感情など持つのも馬鹿らしくなってしまう。と、いうのもからかわれるマルコの姿は正直情けなく、普段目にするような頼りがいのある男らしい1番隊隊長マルコの欠片も見出せないからだ。

対して梅吉は、度量も情も深く抱き込んでしまう。男はいくつになつても子供だというが、あのマルコをみて受け止められると考えられる者はいなかった。それすら平然と受け流しからかう彼女を尊敬する者が続出し、2、30年しか生きていない小娘では、300歳を超える彼女に勝ち目がないとわかつたのだ。別の意味で白ひげの乗組員の女達が怖くなっていて男たちは近寄らなくなったのは、この際放っておく事にする。

そんな会話をして、加工場へ着けばセイがすでに機織に糸を通し、準備を整えていた。それを見てセイへサキが声をかける。

「どれ、ちよいと手伝おうか。それだけの量なら骨が折れるだろうからねえ。自分で作っちみたい気持ちもわかるが、時間が掛かっちゃまうだろう？」

「……………お願いします。」

たつぷり20秒程考えてからセイが頷く。アンリエッタは籠の横に座り、足りなくなった方に糸を渡す役目になり楽しげに眺めている。隣同士に座る二人の機を織る音がカロカロと鳴り始め、縦糸に横糸が滑る独特の音以外その場所で音が消えた。

二人が織る速さは、ほかの妖精達のスピードには劣るもののアンリエッタには到底真似のできないものだった。なにせ、渡す横糸がどんどん減っていくのだから。最初、二人の機織の場所の横に妖精が立っている理由がわからなかったのだが、今ならばよく解る。どんな機織で出来上がった布を巻き上げなければ間に合わないということに。それでもその織り上がった布の均一性や精密性から、質の良さは一目瞭然で。

（ありえない！！運んだ糸がもう半分もないなんて！……………ヨウカイってというのは、何をさせても完璧なの?!）

それでもそのスピードを維持させたいと思うアンリエッタは、必死に糸を二人へ運んでいるとティーチとマルコが中へ入ってきて、現状を把握するなり外の糸の籠を中へと運んでくれる。実際はこの機織は妖精達の術により通常に4〜5倍の速さで織れる様になっているのだが、そんなことを彼女たちが知るはずもない。運び終えた糸の全てを織り上げるのに半日も掛からなかった。後でその事実を知った3人は恐ろしい物を見るような目つきで機織の機械を眺めていた。

「おいてち坊、ちよつと付き合え。異論は認めん。」

「お？いいけど…って、ああ。了解。」

布を織り上げた後、セイは荷台に積み込んだ布と共に、なにやら一人で納得したティーチを連れて別棟へと行ってしまう。それをマルコとアンリエッタ、そしてサキが見送る。その後近場の妖精にサキがなにやら耳打ちをし純白に近い美しい糸を準備させたかと思えば、ノリノリのアンリエッタが嫌がるマルコを引きずり再度加工場へと消えていった。

君が為惜しからざりし命さへ18

2ヶ月という長いログ期間のあるこの島に、白ひげ海賊団が逗留して一月が経ち残り2週間というところまでになった。

そろそろ航海の準備をするために臨時の弟子入りをしていたナース達も、本来の仕事へ戻るために本日付けで稽古場に入りをしなくなる。

それでも航海中に自主稽古を続けると約束し、それぞれ梅吉からの餞別を受け取り名残惜しげながらも嬉しそうに稽古場を後にした。

そこへ、セイが顔を出したので、サキは煙管で紫煙を燻らせながら眉を上げて首をかしげた。

普段セイはこの稽古場へは顔を出すことはしない。珍しく顔を出した義妹に、何か話があるのだろうと人払いをした上で手招く。

「そんなところで突っ立ってないで此方へおいでな。珍しいじゃないか、ここへ顔をだすなんざ。」

「ええ、少々…お話があつたものですから。」

昼下がりの稽古場で差し向かつて座つたセイの表情は些か硬く、傍らに置いた包みに時折視線を投げては俯いてしまふ。それを見たサキは黙つたまま、静かに届けさせた杯をセイへと差し出した。

「酒でも入れたらどうだい。」

「はい。」

注がれる酒はとりとした物で、恐らくどぶろくに近いものなのだろう。普段は精製された清酒を飲むほうが多いのだが、こういった

時には飾り気のない酒のほうがありがたい。

清酒にはない独特の甘い香りが、強張っていた筋を解してゆくかのようで、知らずセイは小さくため息を零した。

「こうして二人で差し向かいで酒を飲むなんざ、久しぶりじゃないかね。」

「……ええ、移住してきてから何かと忙しかったですからね。」

江戸切子の杯はサキのお気に入りのもので、濃い青で彩られた麻模様が、どぶろくの白さを際立たせていた。それを静かに喉へと送り込めば、鼻腔に広がる酒の香りに口元を緩める。

「話ってなあ。その包みの事だろう？そして…誓約。違つかい？」

酒を舐めながら視線だけをセイへと眺めやって尋ねれば、セイの瞳と視線がぶつかる。その瞳には、驚愕と後悔の色が濃く浮き出していた。

セイは多くを語ろうとはしないものの、その瞳は雄弁に語る。話したとしても、あまり表情が表に出ないポーカーフェイスと、昔ながらの不言実行の性格が災いしてか冷淡な性格と誤解を受けがちだ。実際のところは、思慮深く物事の三手先は必ず考えてから行動し、礼儀正しく心を許した相手にはいくらでも心を砕くような性格。明治から大正にかけての時期に生まれたらしいセイは、剣術にしか興味がない実直な男だったのだという。

生家は鍛冶を代々していたというのだから、跡取り息子だったのだろう。鍛冶の才能もあったが、それよりも剣術の法が楽しいと感じてしまったセイは、近くの道場に居候をしその腕を磨いていた。

父親はセイを後とりになると決めて譲らなかったというから、ほかの弟子達からすれば邪魔だったのだろう。そして、何があったのかは知らないが、父の打った刀と共に山で殺されてしまったのだ。切り殺した拳句、油を掛けて燃やすという念の入れようで。

それからまた何年か経過して、その人里離れた山で禁術を行った者がいた。ちょうどオカルトめいたことが流行っていた時期なのだろう、それを実行しようとした者がセイの亡骸のあった場所で犬神を作ろうとした。

実際犬神を作るのには何種類か方法があるのだが、どうやら他のものごちゃ混ぜになった知識で挑んだらしく、多くの犬を集めて、餌を与えずに檻に押し込めたまま殺し合いをさせたという。

そして最後の1匹をその者が手を掛け術を完成させようとしたときに、落雷でその人間と1匹が命を落とした。運が悪いのか良かったのか、その亡骸を糧に、多くの殺された命の慟哭と恨みを糧に、セイは蘇ってしまったのだ。炎に焼かれ死んだせいなのか炎を纏った狼として。

ただ蘇ったのなら問題はなかったが、その姿は人間のものではない。そして偶然近くにいたサキが気がつき手を差し伸べてくれたのだが、そのときのセイは己の姿に混乱しただけでなく、己の内にある多くの負の感情に多い尽くされ何も解らない状態だった。そして近くにいたサキへとその牙と爪を向けたのだ。

『……生まれればつかりにしちゃあ、随分と暴れてくれるじゃないか！落ち着きなあ！！』

サキが本性を現して喉元に噛み付こうとするセイに、狐火で攪乱し

その爪から逃れる。その時点で気がつけばよかったのだが着物姿の女が、セイには極上の餌にしか見えずに、血肉を喰らうことしか脳裏には浮かばなかった。目の前にいる女の腹を引き裂き柔らかい肉を咀嚼し、甘い生き血で喉を潤す。なんという甘美な誘惑！

低く唸りながら姿勢を飛び掛かろうとすれば、目の前の女がセイをきつく睨み付ける。

『ちいとオイタが過ぎるんじゃないかい？』

そう言ったかと思えば、青い、蒼い炎が逆巻き女を包んだかと思えば、そこには純白よりも白い青を纏った九尾の狐がいた。そうしてその四肢で地を蹴ったかと思えばセイの喉笛に噛み付きその身体を大地へ押し付ける。それでもなお暴れる身体を、燃え盛る狐火がセイの半身を焼いてゆき、その痛みでセイの意識は途切れる。

君が為惜しからざりし命さへ19（前書き）

2011/7/3 改

君が為惜しからざりし命さへ19

次に目が覚めたのはどこかの家の一室の布団の中で、慌てて身体を起こせば傍らに父親の作品である刀が一振り。

それを手にとり、鏡台を眺めれば、そこに映るのは見知らぬ女。思わず空いた片手で己の頬や胸を触れば、鏡の女も同じ動きをする。

そこで己が女になっていると認識した瞬間、手にした刀で鏡台を叩き切り意識を無くすまでのことを思い出した。

『気がついたのかい』

そう、この声の持ち主を殺し喰らおうと考えていたということに。

己は人間ではなかったのか？なぜあのような姿になった？

なぜ人間を食べたいと考えた？

人間は餌でしかないのか？

己は人間？

本当に？

肉の柔らかさや血の甘さにこんなにも飢えているというのに？

そう、この刀などという無粋なものなど必要ないではないか。

チガウ

己には鋭い牙と爪がある。

ダメダ

何を戸惑うことがある？

ヤメロ

腕を伸ばし、あの細い首を手折ってしまえばいい。

ヤメロ、ヤメロヤメロ…

『近づくなあつ！！！』

手に持った刀を抜き放ち、己の心を侵食しようとする獣の声を払拭するように、目の前に現れた女に切りかかる。

『つうあつ！！！』

女の左肩から脇腹にかけてをまるで唐竹を割るように切り伏せれば、当然女の血を真正面から被る、とたんに霞掛かった思考がクリアになり、女のうめき声に目を向ければ一刀両断にされ血の海に倒れた女の姿。

その太刀筋は、見事に頸動脈を捉え心臓をも切ったのだらう、その夥しい血の量から女が即死したのだと思えなかった。

『あ……うあ……っ』

返り血を浴びてから、やっと己の仕出かしたことに気がついたのだ。その事実己の血に染まった手を呆然としながら見詰めていると死んだはずの女の声。

『……随分と、酷いことをしてくれるじゃあないか。私じゃなかったら死んでただろうねえ……？』

ゆるりと起き上った女の血は相変わらず酷く流れ、その顔色はひどく青白く死人がしゃべっているようにしか見えない。

肩から袈裟がけに切られたというのに、右手で器用に帯を包帯替わりに傷を縛り付ける。それを見てその場に力なく座り込むも、まるで射竦められたかのように視線を女から離す事が出来ない。土気色の肌に血の通っていないような唇、それでも薄い唇は緩い弧を描いている。

『まったくこれじゃあ、この部屋の畳は全部取り換えなくっちゃあいけない。……ああ、襖もかい。こりゃあ骨だねえ。』

『な……なんで?! 確かに俺がこの刀でっ……』

『殺したはず……ってかい?』

口元では笑みを湛えたまま、しかしやはり辛いのか、ややふら付きながらもゆっくりとした足取りで女が近付いてくる。それを、恐ろしいと思いつつも、身動きが取れない。

手を伸ばせば届く距離まで近寄った彼女は、静かにその場に座りやさしい手つきでセイを抱きしめた。

『お前さんは、まだ何もわからない状態で目覚めちまったんだ。大丈夫、ここにはあんたを傷つけるようなものはいやしないよ。みいんな訳有りのモノばかりさ。』

『あ、……あなた……は……』

『私かい？私は……』

そこまで話したところで女は倒れてしまい、奥から現れた老夫婦が悲鳴を上げながら介抱した。そして一緒に現れた女が駆け寄るなり、セイの顔を思いきり殴打した。

『ふざけんじゃないよ！嫁入り前の女のからだを傷物にしがたって！どついう了見だいっ？！』

なおも果敢に殴りかかろうとする女を後ろから山伏の姿をした男たちが必死に抑え込む。

『落ち着けい！キヌ！相手はまだ生まれたばかりの赤ん坊ぞ！』

『これが落ち着いてられるかい！ええい！いいから放しなァ！邪魔立てすんなら、鴉天狗の丸焼きししてやるよっ！』

暴れるキヌと呼ばれた女の下半身が蛇体へと変化し、身をくねらせて逃れようとする。それをうまく取り押さえようと、烏天狗と呼ばれたほうが羽根をバタつかせながら抑え込む。その非現実的な光景に目を見張っていれば、老夫婦に抱えられながら起き上った女がこちらを見て声をかけた。

『私は梅吉つてえ名前の芸者さァ。あんたの名前は？』

『…どう…堂守、竜之介…』

『どうもり、りゅうのすけ…はあん、苗字持ちかい。ま、いいさ。あんたのここでの名前をつけてやろうね。女の姿でその名前は不釣り合いだ。そうだねえ…セイってえのはどうだい。』

そう言った梅吉の笑みは何とも楽しげな表情だった。

「何を物思いに耽ってんだい？」

「いえ、昔を思い出していました。お気になさらず。」

ぼんやりと過去のことを思い起こしながら、セイは目の前の義姉の身体へ消えることのない傷を負わせた事や、己の身体に残る誓約の印、色々なことが脳裏をよぎる。それを胸に留め杯を傍らに置くと姿勢を正す。

「姉さん、いえ、梅吉様、相談がございます。」

「……聞こうか。」

己を姉ではなく名前で呼ぶ場合、義妹としてではなく従者として話をする時の合図となっている。

「これを……」

そう言つて傍らにおいた風呂敷包みを梅吉の前へと差し出す。差し出されたそれを解けば、昨日仕立てていたものであるう鉄紺色の上着が入っていた。縁取りは銀鼠の刺繍で、釦は深い蒼の艶消し。丁寧に仕立てられたそれは、セイが己のために作ったものではないのがすぐにわかる。

「……覚悟を決めたのかい？」

「……はい。たしかに、この魂は男のもので、体は女で矛盾したものではありません。それでも。」

その上着を梅吉が丁寧に風呂敷で包み、静かに微笑む。それは母親が己の娘を見るかのように淡く優しくなまなざしで。

「ねえ、セイ、いやさ竜之介。お前さんがその命を掛けてもいいと思えるおヒトなのかい？」

「……おそらく。」

「なんだい！あの堅物が必死にここまでやっというて、そんな適当にしか答えらんないなら、そんな相手やめっちゃまいなっ！」

「いえ、そうでは、っというよりも、自分はそんな必死になんて！」

「裕の色であんなに悩んで、私の手伝いまでたっぷり時間かけて悩むくらいの相手のくせに何言ってるんだい。」

「当り前じゃないですかっ！姉さんだって、相手が着るものはいろいろ悩むでしょう?!」

「生憎と着物を仕立てるほど懇意にした男なんざいなかったもんでね。悩んだことなんざないよ。」

「……あの子が不憫じゃないですか。」

「はん！芸者の名前で口説くような男に、秋波送られたって何とも思わないさ。」

「いえ、あの子は姉さんの名前自体知らないんですからって……もう、

いいですよ。自分の負けです。」

疲れたような表情で傍らに置いた盃の酒を飲みほして、溜息をつきながら酒を手酌で注いで飲み始める。その背中には苦勞がにじみ出ているかのようだ。

「結局、そのおヒトと所帯をもつつもりなんだろう？なら、ちゃんと挨拶しとかないとねえ……。」

「いえ、あの、まだそこまででは……。」

「セイ、あんたね、懸想してる相手の服を仕立てるってえのはそういうつもりってことだろうが。私の眼は誤魔化せないよ。めでたいこったねえ。お相手に送るんならクロウかコスケあたりに押し付けりゃいいさ。ごねるようなら焼き鳥か水炊きか好きなほうを選ばせりゃいい。」

君が為惜しからざりし命さへ20

いい機会だからと、半ば強制で島の医療機関にしばらく滞在していた白ひげに、話があるといわれたサキはその病室へと向かった。

人間では高齢になる白ひげから改まって話があると言われれば、聞かないわけには行かないだろうということとで木造の病院内を一人歩く。妖怪だけではなく体の大きな魚人もいるということで、この病院の扉は通常のサイズ以外にも見上げるような大きなものまで大小様々。もちろんその大きなものには別途通常サイズの扉も設置されている。

そして、一番奥まった場所にある大きな病室の扉の前で、中にいるであろう人物へと声をかけた。

「失礼、梅吉でございますが、ご在室で？」

「おう、来たか。」

この島に上陸した頃よりも血色の良い顔で出迎えた白ひげに、梅吉は会釈をしてから入室した。

「ここでの暮らしはいかがなもので？ だいぶいい顔色になったようですが。」

「ここに入られてから禁酒を強いられててな。まったく忌々しいつたらねえ。時折出る酒といえば、苦い薬膳酒だし……」

渋面をつくり、満足に酒が飲めないとぼやく白ひげへ周りのナースたちも困った顔をして見せる。それでも完全な禁酒をさせず、薬効のある酒を適量渡されるだけでもありがたいとは、一応理解はしているようではあるが、満足は出来ないのだろう。

「天下の白ひげとあろうものが、情けないですねえ。昔頃から過ぎたるは毒というじゃござんせんか。70過ぎた程度でガタが来るのが人間でさあ。夜泣きする赤ん坊みたいにびいびい泣いたってしょうがないやせんぜ？」

「……言っじゃねえか。」

「当たり前ですよ。私の3分の1も生きてない子供じゃあないですかい。まったく……」

ぐちぐちと文句を言う白ひげに対し、聞き分けのない子供に言い聞かせるような梅吉。見た目の年はともかく、実際は梅吉の方が白ひげの3倍は年上なので、流石に白ひげも強く出ることはできない。しかも言うことが正論で、確かにナース達も正論を突きつけるが、それでも己のほうが立場が上ということを利用していくらでも融通をつけることが出来るが、しかしこの島ではそうも行かない。

年若いナースでも、実際は白ひげよりも年上ということがあるのだ。下手なことを言えば、また懐かしくも恥ずかしい尻叩きをされるかもしれない。（実際それを初日にされて、白ひげもおとなしくせざるを得なかった。）

「この島あ。海軍に目え付けられてんだってなあ。」

「ええ、そのようで。隠居も楽じゃござんせんよ。人間ってえのは、手前等の都合で考えなさるんで、これだから私もも隠れ住まないといけない。ねえ、白ひげの旦那あ。異端なモノって奴はいつの時代、どんな世界でだって扱いは同じなんですよ。」

今までの己の歩んできた軌跡を思い浮かべたのであろう梅吉が、扇

子を片手間に弄びながらそう言えば、白ひげは双眸を閉じなにやら思案する表情を浮かべる。

先だつての宴の席の後で任左衛門へ、梅吉の身柄を預かると請け負った白ひげではあるが、果たして本当にこの女を手元に隠しているものか。

人間である己等の常識をも覆す彼等ならば、簡単にその身を守ることも出来そうなものなのだが…

「旦那あ。私等のことを勘違いしてやいませんか？」

「勘違いだあ？」

思案に暮れる白ひげに、梅吉が扇子で口元を隠しながら、視線だけが彼を捉える。一重の目元がゆつくりと細められ、ガラス球のような瞳に白ひげの顔が映し出される。

扇子の端から見える口元は歪められ、その口角があり得ないほどの曲線を描き出す。

「私らの能力を持つてすれば、いくらでも海軍の奴等なんぞ追い返せますよ。でもねえ…」

「でも、なんだ？」

実際に梅吉たちが戦ったところを見たわけではないが、無傷で大将を追い返すことが可能なのだから、何を隠れる必要があるというのか。白ひげからすれば、そう考えたのだろう。

確かに彼女たちならば海軍を追い返すことも、殲滅させることも可能。だが、それはバランスを崩すことなのだとは思わない。

「人間つてえのはね。共通の敵つてえのを持つと面倒になるんですよ。確かに私らなら海軍はおろか、世界政府でさえも制圧できるで

しょう。でもそれをしてどうするってんです？私等が望むのは平穩でも絶對的な強さってえのは、それを阻むんですよ。」

ほう…と吐息をひとつ零してから、半ば開いた扇子を閉じれば、ぱちり…と音を立てて。その先を己の唇へと当てて、双眸を伏せる。

その仕草は艶めいたものにも見えるが、反面常の彼女の氣風の良さを隠し、弱さをも匂わせるもの。目の前の女がその実妖怪で、己の3倍以上の年月を生きてきた九尾であることを忘れさせるような。

（そこらの男じゃ、あつという間に骨抜きにされてお終いつてとか。）

「降りかかる火の粉を一々振り払ってちやあ、本当の平穩ってえのはこの世界を私らが牛耳るより他無いでござんしょう？そんな面倒事なんざ、こちとらお断りですよ。」

無駄に正義感の強かったり、汚職の温床になっている海軍や、情報进行操作し真実を隠蔽しつつ下らない人間の保護にいそむ世界政府。彼等を全て潰しこの世界を手中に収めることなど造作も無いこと。それをしようと思わないのは、人間のことは人間でという考えとは別に思惑があるからだ。

そもそも妖怪というものは享樂的で、自分たちの興味のわいたことにしか関心を示さない。そしてその興味もいつまで保つかも曖昧で一瞬で興味を失うかと思えば、何百年、何千年でも執着をして見せることもある。

そんな彼等が人間を従えて政を出来るのか、と問えば答えは否である。

対して人間はロクがよく働く。ロクとは、聴覚、触覚、視覚、味覚、嗅覚、これら五感からくる勘働きの直感の6つの感覚。
えてして、妖怪というものはこの感覚のいずれかが鈍いものが多い。逆に言えばどれかに逸脱してしまい、その他まで感覚が回らないものがほとんどだ。

梅吉や義妹は元々が人間であつたということもあり、感覚は人のそれとは違い、研ぎ澄まされたモノへとなっている。鋭い感覚が故の弊害もあるのだがここではあえてそれは語ることはいしない。

「ヨウカイってえのも、色々大変そうだな。」

「長く生きてるからこそ、まあ、色々あるんでござんすよ。……で、私にお話とは？」

「……まあ、単刀直入に言えばだ。この島に隠れるのも限界があるだろう？俺の船に乗る気はねえか？」

「私が……旦那の船に……？」

流石にそれは思いもしなかったのか、梅吉の双眸が大きく開かれる。

「マルコの奴もお前えに惚れてるようだし、ナース共からの信用も高い。腕っ節も強いとなれば文句のつけようがねえ。」

「まー坊はさておいて、なんだってそんなことを。」

「おいおい、惚れられてる自覚があるのに、さておいてとはあいつが不憫じゃねえか？」

「さあ？男女のこともロクに知りもしない、尻の青いガキに迫られたからって、嬉しくもななんともないですよ。」

「……アイツの父親として、なんというかいたたまれないというか……その、なんだ、少しは意識してやったらどうだ。」

マルコの名前を出せば、とたんに梅吉の態度は元に戻ってしまう。それに対し少々というかなり、息子であるマルコに同情してしまう白ひげだった。

その後1時間ほど経ってから、梅吉は病室を後にした。残された病室には腕を組み窓の外を眺める白ひげと、側に付き従うナースのアリエッタが無言でいた。

そして梅吉が病室を出てから30分も経った頃、おもむろに病室の扉がノックされる。

「オヤジ、呼んだかよい？」

病院へ向かう道すがら、島の住人からまた何かをもらったのである。その両手には風呂敷包みが握られていた。

三十路も当に越えた中年男だというのに、島の住人には小さな子供にしか思えないのである。包みを開けば、果物やお菓子などの他に、真珠や水晶なども混ざっていた。

「マルコ隊長：なんで宝石まで入ってるんですか？」

「綺麗だからやるって言われたんだい。昔も、こういった類はよくもらってたよ。」

綺麗だからという理由で渡す妖怪も妖怪なのだが、慣れているマルコもマルコなのではないかと思う。しかしそれは言うことは出来ない。

結局のところ、そのマルコを育てた彼等だからこそ、マルコがそう

いう考えになつたのだから。

「価値とか、わかってない、とかじゃないですよね？」

「一応知ってるけどよい。価値を決めるのは人間だけだろい？」

「まあ、確かに。」

宝石の価値を決めたのはあくまで人間の主観であつて、他の動物や妖怪からしたらただの綺麗な石ころという認識しかないのだ。

そう言われてしまえば、納得せざるをえない。妖怪という存在を認識し容認しているアンリエッタではあるが、やはり人間としての感覚までは脱せ無かつたようだ。

「おい、馬鹿息子。」

「馬鹿は余計だつて言わなかつたかよい。」

「お前、あの女に本気で惚れてんのか？」

いつもの揶揄かと思いきや、思いのほか白ひげの表情はまじめな顔で、それに対しマルコも目を見開く。

「いきなり何を言うのかと思えば……愚問だろい？俺あ、ちっせえ頃からあのヒト以外の女なんか興味ねえよい。」

「だったら、精々必死になつて口説き落とすんだな。船の上あ女は少ねえ、いくら腕っ節が強かつたつて狙われねえとは限らねえんだぞ。さつさとモノにしちまえ、馬鹿息子。んで、早く俺に孫を見せろや。」

出来るものならやつてみると言わんばかりの白ひげの態度に、マル

コは言われたことを理解するだけで精一杯だった。

「それって、オヤジ… 姐さんが船に乗るってことかよい?!」

いつのまに?!と驚愕と喜びの入り混じった表情でいる息子に白ひげは、人を食ったような笑みを浮かべて頷いた。

「グララララ! せっかく俺がここまでお膳立てしてやったんだ。ちゃんとモノにしやがれ!」

（お膳立てをしたとしても、あの女狐をモノに出来るかはわからねえがな。）

その胸中は、マルコには明かさず白ひげは微笑んで息子を見守ることにした。

君が為惜しからざりし命さへ21

2ヶ月というログがやっと溜まり、白ひげ達が島を発つまでに残り3日となった。

白ひげの乗組員達が積荷の準備にいそむのはもちろんなのだが、島の住人たちが何やら忙しい。

マルコはここ最近妙に機嫌がいい。そしてセイもこのところ鍛冶場へ籠りきりで、ティーチにかまう余裕もなさそうで、ティーチは何かがあつてマルコにとって良いこと、つまり梅吉が船に乗るのだらうと考えた。この予想は外れるとは思わない。

昔からマルコは梅吉の事で機嫌が良いと鼻歌を歌うのだが、これが聞くに堪えないほどの音程で、流石のセイも閉口し逃げ出すほどだ。現に今も鼻歌を歌うという事はほぼ100%彼女が関わっているという事で…、あと3日でこの島を出港し離れ離れになるのであれば、もっとマルコは落ち込んでいてもいい筈なのだが、その様子は微塵も感じられない。

「マルコ、お前…本当に嬉しそうだな。」

「よい！まあねい。」

船に乗ることになったからといって、梅吉がマルコと一緒にいることではないのだが、其処に気が付いていないのか…ただ単に傍に居られることが嬉しいのか…

（こりゃあ、絶対に後者だ。マルコのやつ傍に居らるっていう事実だけで喜んでる。まったく…姐さんが絡むとどうしてこう、単純になるんだよ…）

この辺りは、まったく持って昔から成長していないのかもしれない。

良いのか悪いのかといえば半々といったところか、子供のままの純粹な気持ちを持ち続けているといえは聞こえはいいが、マルコのこれは刷り込みにも似た執着で。

絶対にあり得ないことではあるが、梅吉が攫われでもしたらマルコは冷静ではいられないだろう。

つまりそれは弱点そのものになるわけであって……

（まあ、実際あの人をどうこうできるようなのなんて居ないに違えねえが：姐さんを如何こう以前に、兄ちゃんを突破するのが無理な話だもんなあ……）

梅吉に着く辿り前にセイに一蹴、もしくは一刀両断にされてお終い。というのがオチだとティーチも理解している。

女性でありながら兄として慕っている彼（女）は、梅吉を姉と慕い従者のように守っている。実際白ひげの乗組員が梅吉に夜這いを掛けようとして、セイに蹴りだされているのを何度か目撃している。

「で、なんでそんなに機嫌が良いのか聞いても良いか？」

「よい！ティーチ、姐さんもこれから船に乗って俺たちと一緒に来てくれるんだい！また、一緒にいられるよい！」

ティーチがご機嫌な理由を尋ねれば、マルコは全身から喜びのオーラを発しながらティーチへ答える。

その答えの内容に、ティーチはくやはりと確信した。マルコはく一緒に居る>という目先のことだけしか見えていない。

「そうか！それは嬉しいな！……でもよ、マルコ、お前、告白成功したのか？」

「……まだだい。」

とたんにマルコは苦虫を噛み潰したような表情で、うつむいてしま
う。

そこそこ女性経験のあるマルコではあるが、何百年も生きてきた百
戦錬磨の妖怪、梅吉には形無しなようだ。

いい雰囲気を持っていくこうにも、暴走しがちなマルコが無体を働か
ないようセイが見張っているし、梅吉にも隙がない。現に手を握る
ことさえままならないのが現状なのだ、流石にマルコも落ち込みた
くなるのだろう。

「に、しても船に乗るって事は<家族>になるってことだよな？ 姐
さん、刺青を入れるのかな。」

白ひげの船に乗るということは、白ひげの家族になるということだ
ある。すなわち家族の印である白ひげのマークを背負うこと。

普通の人間ならば心配をしてしまうのだが、彼女は強さも申し分な
いから問題は無い。ふとティーチが疑問を口にした。

「姐さんの方がオヤジより年上だけど… オヤジのことなんて呼ぶん
だろうな。」

「……確かに…そこは気になるねい…」

家族になるのはともかく、白ひげよりもはるかに年上な梅吉が白ひ
げをなんと呼ぶのかというのは、二人にとって最大の疑問となった。
ついでにそれを聞きに行こうと、二人で梅吉が居るであろう離れへ
と向かうのだった。

「あん？私なんて呼ぶのが気になる？普通にオヤジさんでいい
んじゃないのかい？」

「だって、オヤジは姐さんより年下だろ？抵抗無いのかなと思って
よ」

あつさり二人の疑問に答える梅吉に、ティーチとマルコは拍子抜けした表情を浮かべた。

「二人とも、船の準備をしなくていいのかい？特にまー坊、あんた隊長だろう？上のものがこんなとこで油売ってんじゃないよ！さつさといきな！」

眦を上げマルコに仕事をサボるなと怒れば、ビクリと肩を震わせて慌てて仕事に戻るマルコ。それを呆れたように煙管を吹かしながら眺める梅吉にティーチは苦笑した。

「まったく…どうしようにも手のかかる子だねえ。」

「そりゃしょうがねえよ。マルコだし」

「そりゃそうだ」

昔から変わっているマルコなのだからしょうがないとティーチが言え、確かにと梅吉が同意した。

「あんなんで隊長やって、人様の上に立ってるって言うんだから…世の中本当によく解りやしない…」

「いや、あんなんでも普段はちゃんと仕事やってるんだぜ？」

少なくとも今までは冷静沈着、切れ者としてマルコは通ってきているだけに、戦闘能力だけではなくそのほかの能力もかなり高いといえる。

その為ナースの間でも人気が高かったのだ。最近では彼女たちの中でマルコはヘタレであるという認識のほうが強くなってしまっているが…

「でも本質が変わってないなら、いつかボロがでるんじゃないかねえ…先が思いやられるよ。」

そついいながら、紫煙を吐き出して梅吉は笑った。

閑話 幼き日の思い出（前書き）

お久しぶりでございます。

連載ではなく、ちよっとした小話です。

閑話 幼き日の思い出

梅雨を過ぎ、日中は30度を超えるのは珍しくもなくなったある日の事。

風も無く、湿気を多く含んだ日中、呼吸するのでさえ億劫になる気温の中、藍染の浴衣を肌蹴て、簾で日陰を作った縁側にぐったりと座り込む人影がひとつ。日陰に居たとしても風が動かなければ、あまり意味もない。

少しでも涼を取ろうと、庭先や玄関などに打ち水をして、撒いた傍から蒸発し、湿気が増してゆく状態では流石の梅吉と言えど、閉口せざるをえなかった。

「時代が移り行くと共に、こう年々初夏からの気温が上昇してるよ
うなんだがねえ…これがあれかい？ちきゅうおんだんか、だかなんだかの影響かい？たまらないねえ…」

それでも子供達には少しでも涼しくと思い沢遊びへ行かせ、来週には長屋の住人が子供等をつれて北へと避難をさせる予定ではあるものの、避難から帰ってきててもこの屋敷はまだ暑いままかもしれない。盥に水を張って、そこへ足を漬込んで体温を下げようにも、狐という毛皮があるせいか、人姿をとっていても暑さが体内に籠っているような感覚に陥る。

静かな屋敷の中で、ついぞ独り言を漏らしてしまうのも、この気象のせいなのだろうか。

「よし、いい機会だ。建具を変えようかなね。」

梅吉たちの住んでいる屋敷は基本が障子なのだが、余りに暑いと建具を夏仕様に取り替えることがある。

元々、京都ではよくあることらしいのだが、暑さに弱い住人が居るために態々京都まで買いに行った物である。梅吉は元々江戸生まれなので、こういったものにはなかなか馴染みが薄いのだが、京生まれの者たちが詳しいため試しに変えてみれば、これが案外過ごしやすい。

風の通り道を考えてたつぷり打ち水をしてやれば、家の中を風が通り抜けていくため、室内の温度が上がらすぎるといったこともない。

梅吉の号令のもと、住人総出で屋敷中の障子という障子が取り払われ、畳の日焼けを避けるための冬用の蓆も一緒に片付けられる。代わりに襖の代りを簾戸に、障子を御簾みすに替えて、簾を掛けたりして少しでも涼しい風が通りやすいようにしてゆく。畳には夏仕様の蓆を忘れずに広げ、強い日差しに畳が傷まないよう気を使う。

畳に気を使わないと、腐るのも早くなってしまう。現代ではそうではないかもしれないが、なるべく物を長持ちさせて使い続けていくという、先人の考えを守り続けているのだ。

そして打ち水を、まるで土砂降りがあつたかの如くたつぷりと撒けば、その気化熱の影響が風が通り抜け始める。

「本当に、危うく干からびるとこだったねえ。」

「おや、建具替えしたのかい？ まったくだよ、ちよいと昔ならば、そこらに打ち水するだけで涼しくなったもんさ。それなのに近頃の人間ときたら、ゼーんぶくこんくりいと>で覆っちまいがって。これじゃあ、お天道さんの熱さが下がらっこないさあ。」

余りの暑さに耐え切れなかったであろう、キヌがずぶ濡れのまま庭先から顔を出してきた。片手には網袋があり、中には泳ぐついでに捕らえたのであろう魚等が入っていた。

それに目を細めて眺めれば、キヌが網の中身をタキの用意した大きい笹に移し替える。すると鰻だけではなく、サザエや鮑なども入っ

ていた。網とは別に持っている竹籠には烏賊が詰め込まれてい、キヌがどれだけ泳ぎ回っていたのかが窺い知れるというものである。

「ちよいと遠くまで泳いでたら、鰻の群がいてねえ。丁度良いってんで、すこしばかり捕まえてきたよう。梅吉さん、この味噌叩き（なめろう）好きだろう？」

「ああ、良い鰻だねえ。建具の衣替えも終わったことだし、ちいと早いが夕餉の支度でもしようか。沢遊びに行った坊や達も、そろそろ山から帰ってくるだろう。」

新鮮な烏賊を刺身にするのもいいのだが、事に住人たちは醤油と摩り下ろした山椒をたっぷりあしらった、烏賊の和え物が好物であった。山に自生している山椒の葉を摘みすり鉢で細かくして置く、下拵えし輪切りにした烏賊を醤油で軽く炒めて、香ばしくなったところへ山椒をたっぷり混ぜ込むのだ。

なんともシンプルで豪快な一品なのだが、これを肴に酒を呑むのが住人からすれば何よりのご馳走であった。子供であるマルコやティーチには、山椒の辛さが不評ながらも、それでもご飯のお代わりをして食べるのだから美味しさはわかるうというもの。

高価な物を何よりのご馳走と考える人間とは違い、旬の物を仲間で楽しむ、この行為を含め、初めてご馳走として楽しむ妖怪達の方が豊かな生活をしているのかもしれない。もちろん市場に出回ったものではなく、自分たちで獲ってくるのだから金銭がかからない。その辺りが不自由な人間たちは、恵まれていないのかもしれないのだが。

キヌの帰宅に、他の住人がその獲物だけでは夕飯の材料には少な

ろうと言うものの、丁度山の中腹にある沢で涼んでいた子供と一緒に帰ってきた与一と小峰、そして男衆達が沢で捕らえたのだろう川魚を籠一杯にして帰宅をしてきた。子供たちとは言えば、はしゃぎ過ぎて疲れてしまったのだろう、クロウとコスケの背中、すすよと気持ちよさそうに寝入ってしまった。無意識なのであろうすっかりと握られた手には、黒い羽根が筆り取られてい、いつも悪戯の標的にされている子供達はどうかやらちゃんと自分で報復をしているらしい。

と、いうのもこうやって背負って帰ってくる毎に筆られる羽根の量が増えているようで、昨日などは小さな禿を作り、住人からからかわれていたのだ。もちろんコスケ達も普段の己の行いを自覚しているだけに、子供たちを怒ることなど出来るはずもない。

さて、海の物に比べて、沢で取れるいくらか小さめのそれ等は、子供達の大好きな骨ごと食べられる唐揚げの材料になる。また川エビは纏めて掻揚げにできるし、沢蟹なども甲羅ごと食べられる貴重なカルシウム源だ。

気持ちよさそうに眠っているマルコとティーチを、そのまま寝かせてやりたいところではあるが、この時間に眠ってしまうば夜に眠れなくなってしまう。子供はきちんとした時間に眠ってこそ身体はきちんと成長をするのだと、人間にまぎれて医者をしている魔女<マチルナ>が言う。

彼女は人間としてちゃんと籍も持っているのだが、この妖怪達の住まう屋敷が心地よいらしく、殆どをこの屋敷ですごしている。おかげで子供達の健康管理は安心して任せる事ができる。

「ほうら、まー坊、てち坊や。起きなあ……こんな時分に眠っちゃったら、また夜に眠れなくなっちゃまうよう。」

キヌが子供たちを揺さぶり起こせば、眠りから覚めるのを嫌がるようにむずがる子供。それはとても愛らしく、つい、絆され寝かせてやろうと言う仏心が芽生えそうになるが、ここはひとつ我慢と心に決めて揺さぶり続ける。

「んゆ……」

「ねむい……」

なんとか起き上がる子供達だが、二人ともその頭はふらふらと揺れて覚醒にはいたっておらず、マルコなどは八割方は夢の中だ。それでも両の手で目を擦って起き上がるうとするティーチに、キヌは微笑ましそくに頭を撫でてやる。

「さ、これから夕飯の支度をするから、畑に材料を採りに行くんだよ。働かざるもの食うべからずってえ、昔から言っじゃないか。籠を持ってついで。」

「ん……わかった。ほら、マルコ、おきろ。ゆうごはんの、てつだいいくぞ！」

「うー……よいい……」

無理やりティーチに揺り起こされて、半ば泣きかけるも梅吉に宥められれば、スンスンと鼻を鳴らしながらティーチの服の裾を掴み畑へと歩いてゆく。それを苦笑いしながら梅吉が見送っていた。

「と、まあ、昔からまー坊は寝起きが悪いと言っか、起こされると機嫌が悪くなってねえ。そのたんびに、宥めるのも一苦労だったさ。」

「う…梅吉姐さん、いい加減昔の事を引き合いにだすのはやめてくれよい！」

「なんでえ、マルコのガキン時の話なんざ貴重じゃねえか。聞きたくねえなら、さっさとあっちいってな。」

小さな茶室にて、たつての希望により梅吉がイゾウへ、マルコ達の幼い時分の話を聞かせてやろうとすれば、惚れた女を別の男と二人きりにさせてたまるものかと一緒に乗り込んできたマルコを含めて三人で、午後の茶室にて茶を楽しんでいた。

それに講義をするマルコへ、お前はいなくともいいとばかりに、イゾウが片手で追い払う仕草をすれば、それに対しマルコが今にも射殺さんとも言うような形相で睨みつける。

傍から見れば恐ろしいのかもしれないのだが、子供の頃の話聞いていたイゾウからすれば、そんなものが利くはずも無く。ぬかに釘のように、人を食ったような笑みを湛えながら受け流していた。

「いい年した大の大人がみつともない。およしよ。」

そう、梅吉に呆れたように窘められてしまえば、マルコもそれ以上何も言うことが出来なくなってしまう。

「姐さん…」

「なんだいその顔は…情けない面してんじゃないよ。」

二人の会話は、姉さん女房に頭の上がらないという夫婦のそれなのだが、本人たちは気が付いていないのだろう。イゾウが楽しげにそんな二人の様子を眺めて、他の隊長達の耳に入るのはきっかり30

分後のことだった。

三部 その流れに添うもの

離れの部屋に漂う香は、梅や菊のように仄かなもので、夜の冷たい空気の中でその香りは強く感じられるようだった。

藍染の夜着は、緩められその危うさが女の色香をより強いものと変えてゆく。臥所に横たわり無造作に結い上げられていた黒髪は、床の上に波打つように散らばり、脇息に持たれかかりながら座る男に緩く微笑みかける。

それを受けて、女の手には細いながらも男の手が重ねられ、暫し視線を絡ませては、互いにうつそりと唇を緩ませた。

耳元に唇を寄せて何事かを男がしな垂れかかる様に女へ囁けば、互いに含むかのような笑みを浮かべ、くつりくつりと声を漏らした。

「楽しいねえ……」

「ああ、愉快だねえ。」

男の目尻には朱が添えられ細められたその双眸には、そこらの女など裸足で逃げ出すほどの色香がにじみ出てい、夜着のまま女と寄り添い睦言を囁きあう姿など、何かの絵画のように美しく淫靡であった。

「ねえ、姉さん」

「なんだい？イゾウ」

イゾウと呼ばれた男が、姉と呼んだ女の肩口に顔をうずめる。それは男女の閨での事ではなく、子供が母親に甘えるかのような仕草で、それを受けた女が、優しくイゾウの頭を撫で付けた。

肌蹴た夜着や臥所から、いかにも男女の仲にも思えるのだが、この二人は恋人同士ではなかった。ただ、時折肌を寄せ合い眠るだけ。

そう表現されれば、なんとも爛れた関係が想像できそうなものだが、この男女の間にある関係はひどくシンプルで。そこにあるのは家族への愛情。すなわちく姉弟＞である。

「ヒトで無くなつて久しいのに、まさか縁にまだ繋がりがあろうとは、思わなかったよ。ねえ、イゾウ」

「それは俺もさ、姉さん。まさか生きて出会えるなんて、こんなに嬉しいことなんて、そうないだろうさ。」

姉と呼ばれた女、梅吉は肩口に甘えてかかるイゾウの頭を撫でてやる。普段は綺麗に結い上げられているイゾウの黒髪は、洗いざらしで下ろされたまま、鍛えられた肉体ではあれど、甘えるその仕草は女のように艶かしい。

しかし、互いの眼に浮かぶのは純粹な、相手を思い遣る家族への愛情で、その雰囲気とのギャップは激しいものではあるものの、二人には気にするようなものではない。

白ひげの一団がこの島へやってきてから、初めて梅吉と対峙したイゾウはその夜梅吉の部屋へと忍んできた。

改めて二人で対峙すればわかるのだが、二人の容姿は男女の違いはあれど似ている。

そして、イゾウの過去は謎に包まれている。その年齢も、どこの出自なのかも。

だが、二人には過去はどうでも良い事で、対峙したときにく同属＞であるとか理解＞した。それだけで十分。

正しくは、梅吉の人間としての血族ではない。しかし、妖狐としての血族であると感じたのだ。恐らく隔世遺伝か、いわゆる先祖がえりと言うものなのであろうイゾウは、妖狐としての特色が色濃く出ている。

この世界には妖怪はいないのだが、過去に梅吉達のように世界を渡った妖怪がいたのかもしれない。その妖怪がどうなったのかは今では知る術はないが、この世界の人間と結ばれその血を残していたのであろう。

そしてイゾウは妖狐として半人前とは言えどその血に目覚めている。すなわち、通常の人間とは違う時間を過ごしてきていたのであろうことは想像に難くない。

「今日は随分と甘えたじゃないかい？イゾウ」

「ああ…一緒に船に乗るのは、俺あ賛成だがねえ、姉さん。やはりマルコに姉さんをくれてやりたくはないよ。あいつは、まだまだ子供だ。」

マルコが梅吉を女として心を寄せていることは、イゾウも解っていたが、せっかく出会えた姉を、簡単に渡したくはないらしいのか、臥所に梅吉を押し付けてその身体の上に乗り上げる。あたかも男が<その気>で女を押し倒すかのように。

「おやおや、私がいつ、まー坊のものになるなんて言ったかね？私の<名前の意味>に気が付かないような子供に靡く気なんぞ、ありやしないねえ。」

臥所へ押さえ付けられ、天井を背景にイゾウを眺めながら、心外だと言わんばかりに肩眉を上げて梅吉が答える。仰向けになっただけでもその豊満な双丘は形を崩さずに、着物を常に着ているためか腰の括れは些かないものの、それでもその魅力は溢れんばかりで。妖狐の特色である<色香>が辺りに漂う。通常の男ならばその色香に我を失うのであろうが、半人前とはいえイゾウも妖狐であるため、この色香は効かない。代わりに思うのは、やっと出会えたこの姉を、

生半可な男に渡したくはないという、やや過保護な家族愛。

「なら、いい…。暫くは俺の姉さんでいておくれな。すぐに他の男のものになるんなぞ、ごめんだ。」

そのまま拗ねたように、梅吉の胸に甘えるように頬を寄せてくる弟に、梅吉は苦笑を漏らしながらその腕に抱きしめる。

「まったく、我が弟ながら、甘ったれだねえ。」

そうして、また二人は額を合わせてクツクツと喉を鳴らして笑いあった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2825t/>

お気に召しませ

2011年10月6日18時29分発行